碧梧桐歸京

團扇出して先づ問ふ加賀は能登は如何（明治卅年）

碧梧桐は竹村秋竹が金澤の高等學校にあるのを訪ねて出掛けて行つたことがある。碧梧桐は元來旅行ずきであつたけれども私と京都の近郊を歩き廻つた以來、東京では二三近郊をさまようたのみで餘り旅行をしなかつたやうであるが、この時不圖思ひ立つて金澤まで出かけて行つた。後年三千里の旅を思ひ立つたのも或は此旅行が原因であつたかも知れないのである。子規は病床に横たはつてゐて元來好きな旅をすることも出來ない。碧梧桐が金澤まで遠出をしたといふことは病床の子規の興味を唆るものが多かつた。碧梧桐がその旅行から歸つた時分に子規は喜び迎へて其旅中の狀を聞いたのである。

冬さびぬ藏澤の竹明月の書（明治卅年）

共に百年餘り前の松山の名筆である。藏澤は武士、明月は坊さん。子規のうちの藏幅には格別のものも無かつたが、唯藏澤の竹と明月の書とがあつた。其明月の書は私が家を持つた時分に贈

られたので愛藏してをる。其藏澤の墨竹は今尙十年一日の如く子規舊廬に懸つてをる。

初午に鶯春亭の行燈かな（明治卅一年）

根岸にある料理屋に鶯春亭といふのがあつた。今は其名殘もあるかどうか。私が子供の時分の江戸名所繪双六といふのに、根岸に鶯春亭といふ料理屋が出て居つた。其程名高かつたものと見える。子規が住まつてをる時分にはたいした料理屋とも思はなかつた。其所の料理を子規がとりよせて御馳走してくれたこともあつた。

元光院觀月會

やゝ寒み文彥先生髯まだら（明治卅一年）

此外にも元光院觀月會と前置きした句は澤山ある。之は恐らく日本新聞社長の陸羯南の主催であつたのであらうが、當時日本新聞を中心とした新聞記者、政治家、文士などの會合を名月の夜上野の元光院で催したものである。當時病床にあつた子規も誘はれたので、病を推して出向いた

のである。斯ういふ會合には出られるか出られぬかわからぬと思はれた子規の事であるから、大變興を催して澤山の句を作つた。文彦先生といふのは大言海の著者大槻文彦のことである。疎雨を貯へてゐたこの老學者の風貌を描いたものである。

虚子

桐の葉のいまだ落ざる小庭かな（明治一年）

ホトトギスを東京に移して發行するやうになつた時には、神田小川町の今文といふ牛肉屋の裏の家に居つた。其家に病中の子規は俥にたすけられて突然やつて來た。近所に居た碧梧桐も呼んで三人で歡談したことがあつた。子規の機嫌もよかつた。私等兩人もはしやいだ、今考へても愉快な一日であつた。其庭に桐の木があつたのである。

爐開や故人を會すふき膾（明治一年）

大根を荒く刻んで膾にしたものを、郷里の松山ではふき膾といふ。他郷にも通じる言葉にや。

冬籠る今戸の家や色ガラス（明治一年）

子規は赤い色を好んだ。今戸にある役者の家などには、色ガラスをはめた障子がしまつてをつた。其色ガラスが特に子規の眼にとまつたものと見えて、其役者の家のことは私に話したこともあつた。又今戸界隈にさうした家が竝んでをることも子規の興味を惹いたものであらう。

草庵

雪の繪を春も掛けたる埃かな（明治二年）

折井愚哉といふ畫家も俳句を習つて子規の家に出入して居つた。或時其畫いた雪の繪を子規の許に持參した。子規は其繪を楣間にかゝげた。其繪は幾年もかゝげた儘になつてゐた。現在も尙かゝげた儘になつてゐることゝ思ふ。

さそはれし妻を遣りけり二の替（明治二年）

介抱にのみ携つてゐた妹さんが、いつか人にさそはれ芝居を見に行つた。子規は病牀の心細さになか〳〵妹さんを手離さなかつたのであるが、これは珍らしいことであつた。其時の心持を妻として詠じたものであらう。因みに其妹さんは子規歿後、其晩年になつてよく友なる人と共に芝居に行つてゐられたといふことである。

五女ありて後の男や初櫻　（明治二年）

陸羯南の家庭のことを言つたものかと思ふ。女の子許りであつたのが羯南先生の晩年になつて一男子を得たといふことは大變な喜びであつた。尤も陸の家庭に限らず、斯ういふことはよくあることである。

有省

蕃椒廣長舌をちゞめけり　（明治二年）

子規は鳴雪を長者として尊敬してゐたが、併し、一旦議論となるとなか〳〵まけてゐなかつた。

鳴雪も亦子規の病人であることは忘れてゐるわけでもないが、一旦議論となるとまけてゐなかつた。それで二人が議論を上下する段になると、風雲を捲き起こしてとゞまる所を知らなかつた。たしかこれは興津移轉問題から、來客を謝絶することについての議論であつたかと思ふ。其翌日になつて鳴雪から病人である子規に對してあまり激論をして申譯無いといふ手紙が來たのに對し子規も詫狀を認め其終りに附記した句である。

蕪村忌集るもの四十餘人

風呂吹の一きれづゝや四十人　（明治二年）

これは已に何かに書いたことがあるが、此時分四十人の集合といふことは俳句會では珍らしいことであつた。殊に子規庵の八疊と六疊――其六疊には子規の病床が横たはつてゐる――の二間に集うたのであるから、病む人を驚かせ喜ばせたことは大變なものであつた。其狹い臺所で人々に食はせる風呂吹を作るといふのも、たとひ一切れづゝでも騷ぎであつた。子規の俳句も漸く盛になつたといふことを思はせたものである。

千駄木に隱れおほせぬ冬の梅　（明二年）

これは森鷗外を讃めて作つた句かと思ふ。鷗外は自ら千駄山房主人とも言つてゐたので團子阪の上の千駄木に住んでゐた。「柵草紙」つゞいては「目ざまし草」といふ雜誌を出してゐて殆ど自分一人で筆を執つてゐて、當時の文壇を縱横に批評してゐた。其武者振りは雄々しいものがあつた。子規は其態度を讃めて此句を作つたものと思ふ。因みに鷗外は漸く世間が其態度に反抗しつゝあるのを知つて、後に自ら「鷗外を罪る」といふ文章を發表して、其から辛辣な筆はとらなくなつたのである。

病床の匂ひ袋や淺き春　（明三年）

子規は自分の病床の臭氣を氣にしてをつたものかと思ふ。匂ひ袋をつけてゐたといふことは記憶にないが、この句によつてそんなこともあつたらうといふ想像がつく。

草庵

春寒き寒暖計や水仙花　（明三年）

子規の枕頭には寒暖計が置いてあつた。この寒暖計を眺めて其日の寒さによつてストーヴを焚くのであつた。又唐水仙が鉢に入れて置いてあつた。

草庵

春雨や裏戸明け來る傘は誰　（明三年）

子規の病床からはガラス戸を隔てゝ裏戸が見える。子規は私に斯んなことを言つたことがある。あの締まつてゐる裏戸が開いて誰か來るであらうかといふことを想像して見ると面白いと。これは誰か病床を尋ねてくれる人があればと待設けてゐるやうな心持があつてのことであらうと思はれてあはれであつた。尤も子規は脈な人が來ることは人一倍脈がつて居たが。

春の日や病牀にして繪の稽古　（明四年）

子規が病牀にあつてせめてもの慰安の爲、畫を描くことをはじめ、其畫もなか〳〵見るべきものがあつたことは人の知るところである。元來子規は幼い時分から畫心があつたらしく、一寸した雜文集の表紙などに筆に任せて繪を描いたものがあるやうに記憶する。が後年爲山、不折などから西洋畫の講釋を聞いてから、寫生といふことを俳句文章等に應用し共に一生面を開いた。さうして病牀にあつて畫を描くやうになつてからも一途に刻明に寫生をして、其畫も亦、素人畫としてゞはあるが、なか〳〵に一家の風格を供へてゐた。私は後に英吉利の博物館でゴッホの描いた向日葵や椅子の畫を見た時分に、子規の畫を思ひ出したのである。子規の畫は誰に習ふといふことなく、實物を枕頭に置いて草花や果物などを寫生したのである。畫の稽古とあるが其は師匠についての稽古ではなく、自分一人の稽古であつたのである。强ひていへば其師匠は寫生といふことであつたのである。

ランプ消して行燈ともすや遠蛙

（明治四年）

これは子規自身の境涯を言つたもので、其頃根岸には電燈が無く、ランプを點してゐた。それから子規が眠る時分になると、其ランプを消して行燈をともしたのである。種油に浸つてゐる燈

芯は一本の暗い行燈であつた。

即事

母と二人妹を待つ夜寒かな

（明治四年）

母子三人の家庭で、子規の病は篤く、母は老いてゐた。妹君一人で重責を負うてゐた。其妹が偶々用があつて外出した。其歸りを待焦れてゐる樣である。

病牀の財布も秋の錦かな

（明治四年）

子規は或時私に言つたことがあつた。「病苦にあへいでゐる此頃は御馳走を食べることが、せめてもの慰藉だ。ところが金が無い。こゝに財布があるが、これを天井から釣り下げてこの中に御馳走を食べる金が這入つてゐると思ふと、せめてもの慰みになる。誰か其金を寄附する人は無いかと思うてをる」と。其後私の差出した若干金が其中に收められて久しくぶら下つて居つたと思ふ。何かこれについて仰臥漫錄に記事があつたと思ふ。

即事

九月蟬椎伐らばやと思ふかな　（明治四年）

子規庵の門を這入つたところに椎の樹があつた。その椎の樹に秋蟬の喧しく鳴き立つのを病床の子規は辛く思つたものであらう。

驚くや夕顔落ちし夜半の音　（明治四年）

病床にあつた六畳の庭には夕顔棚があつて其所には毎年のやうに夕顔がぶら下つてゐた。其夕顔がひとりでに腐れ落ちた音が子規を驚かした。翌朝私が訪ねた時に「大きな音がしたのに驚いた。何の音かと思つたら夕顔の落ちた音であつた」と、物に襲はれたやうに話した。衰弱してゐた子規には餘程の衝撃を與へたものらしかつた。

書簡前文略（加藤恒忠宛）

雀の子忠三郎も二代かな　（明治五年）

加藤恒忠といふのは外交官であつて子規の叔父である。其叔父の二番目の男子が生れた時に、自分の幼名の忠三郎といふのを其儘襲名さしたのに、子規は喜びの手紙を添へて此句を送つたのである。ところが此忠三郎君は子規の歿後、其あとを取ることになり（子規のあとは妹君が相續し、妹君のあとを忠三郎君が襲ふことになり）今は正岡忠三郎として此頃は俳句をも嗜んでゐるやうである。

母の花見に行き給へるに

たらちねの花見の留守や時計見る　（明治五年）

これも前にあつた妹の留守に其歸りを待ち焦れてゐるのと同じ意味で、老母がたま〳〵すぐ裏の上野の山の花見にいつたのを、待ち焦れて時計を見てゐる衰へた子規の様が想像される。

律土筆取にさそはれて行けるに

家を出でて土筆摘むのも何年目　（明治五年）

律といふのは妹君の名前である。郷國松山にあつては土筆を煮て食ふ習慣がある。――梅干を入れて煮るのである――その爲め春の野に出でゝ土筆を摘むことは子女の樂しみとも營みともなつてゐる。妹君も松山にあつた時分はよく土筆を摘みに行つたが、東京に出てからは其を摘みに行くといふこともなく、間もなく子規の病氣の介抱に全力を委ねてそれを摘むどころか、家を出るといふことも滅多になかつたのが、偶々人に誘はれて珍らしく家を出て土筆を摘みに行つた、といふことをいつたのである。

絶筆三句

絲瓜咲て痰のつまりし佛かな（明治五年）

痰一斗絲瓜の水も間に合はず（明治五年）

をとゝひのへちまの水も取らざりき（明治五年）

辭世の句となると、死の感想を陳べたものが多いが、この句は世を辭する時のたゞ事實を陳べた迄である。特に辭世の句と銘をうつたわけではないが、さう意識して句を認めたことはたしかである。併し唯其場合の寫生句である。それがいかにも子規らしい。十五夜に絲瓜の水を取るといふ習はしがある。子規が死んだのは十七日であつた。

（昭和二十一年四月）

古人の花の句

子規の「俳句全集」の中から古い花の句をとり出して、その解釋を試みた。

女夫して住持醉しぬ花に鐘　几董

夫婦してお寺の住持を酒を強ひて醉はしてしまつた、といふのであつて、その坊さんも飲酒戒を破つた破戒の僧であるけれども、夫婦のものが、無理強ひに強ひて坊さんを醉はしてしまつたのも罪が深い。しかしその坊さんの醉つぱらつてゐる樣を想像すると、其は夫婦のものに醉はされたのであるといふところから、一寸をかし味を誘ふところがある。殊に其坊さんも夫婦のものも花に浮かれてのことであるから強ひて咎めるに當らないかもしれん。其坊さんの醉つぱらつて憚りなく醉態を見せてゐるところに爛漫と咲き亂れた花の態も彷彿することが出來る。折ふし鐘

の聲が殷々と響き渡つたのであるけれども、その鐘の音は花のさかんな事を象徴してゐる音であるし又坊さんの醉態に對する法の警鐘でもあるやうな感じがする。

据風呂に後夜聞く花の戻り哉　蕪村

花見をして家へ遲く歸つて來た。くたびれたので据風呂に入つてをると後夜の鐘が鳴つたといふのである。後夜といふのは夕方から夜半までといふ解もあるし、また夜半から明方までといふ解もあるやうであるが、とにかく初夜の鐘、後夜の鐘といふ言葉があつて、初夜の鐘といふのは今でいふ午後八時頃の鐘、後夜といふのは夜更けての鐘の事、多分十時か十二時頃に撞く鐘の事を言ふのであらう。「花の戻り」といふと戻りつゝある人で、戻つて來た人といふ事を言ひあらはすのは少し無理かもしれないが、併し前後の續きでさういふ風に解せられる。この句はたゞ、その事がらを叙したばかりの句であつて、複雜な事柄が簡單に叙されてゐるのが面白い。

餞別

此心推せよ花に五器一具　芭蕉

芭蕉の心持を言つた句であつて、人に向つて言つたやうな語氣である。自分の心を推量して呉れ、自分は花に對しても世間の人の如く豪華な遊びをして狂歌亂舞しようとも思はない。たゞ佛前に供へてある五つの器――これは佛の前を莊嚴にする爲に五つの器、其は一對の花瓶と一對の燭臺と一個の香露がならべてあることを言ふのである――其が一と揃ひある。――一具といふのは一と揃ひといふことである――我は花に醉狂亂舞する事はせぬ、花に對しても嚴肅な端正な而かも質素な佛の五器一具を思ふのである。俗世の人の好みとは違つて、自分にはさういふ好みがある。この心を推量して貰ひたい、といふのである。「餞別」といふ前置きがあるから人を送る時に作つた句であらうが、何だか其人に對する訓戒の意味があるやうにも見える。前の蕪村の句にくらべては全然行き方が違つてをつて、芭蕉の心持を述べたのである。唯芭蕉の心持を陳べたといふ許りでは興味は索然たるものがあるが、「五器一具」を持つて來たところに芭蕉の手腕を見る。

ほら貝に浮立つ花の夜明哉　淡々

山伏がほらの貝を吹く、それは大峯に參詣する山伏が朝早く宿を出る時分にほら貝を吹きたて

る、其浮き立つた景色を言つたものであらう。淡々は其角の弟子であるが、かくの如き平明な句も往々にして見うけるのである。

旅駕にうしろ窓なし花の中　梅室

櫻の花の咲き滿ちてゐる中を駕に乘つて旅をしてをる。其旅駕には後ろ窓が無いといふのである。たゞ其だけ言つてあるのであるが、其言つた心持は、其駕の兩方の窓からは左右の花を見る事が出來るし、また行手の花を見る事が出來るのであるが、たゞ、うしろ窓がないから、うしろの花は見る事が出來ない、といふのである。さう解釋してはじめて「うしろ窓なし」と言つてある意味が、成程さういふ意味かと解かるのである。これが天保の梅室あたりの句の特色の一つである。うしろ窓なしと澄まして言つて知らん風をしてをるところに作意があるのである。さういふ思はせぶりの叙法は私等のとらないところである。もつと率直にいふ方がいゝ。又事柄も平俗なことである。駕のうしろの窓が無いといふことは面白いことでは無い。

狹筵に錢置く花の別れ哉　几董

これはどういふ事を言つたのであらうか。まづ「花の別れ」と言ふ事は何を言つたのであらうか。花が散つてしまつた時の事をいつたのであらうか、「蚊帳の別れ」といふ言葉はあるが、花はだん〳〵に散つて行くので花の別れと際立つていふ感じは無い、又別れといふのは人と人との別れであつて、花の下で人と人とが別れる事を言つたのであらう。花をたよりに茶店を營み、そこに筵が敷いてある。その筵の上に友達二人が久濶を叙しながら花を眺めてゐたが筵賃を亭主に渡して遂に立ち上つて左右に別れた、とでもいふのであらうか。さうも取れぬことは無いが、少し解釋がいりほがで面白くない。それよりも「花の別れ」は花と人とが別れることで、今迄花の下に休んでゐたが、錢をほうり出して、其まゝさつさと行つてしまつたといふのであらう。

四十以後の人三里に灸すへしと

二日灸花見る命大事也　几董

几董といふ人は前置を無暗につけたがる人であつたやうに思ふ。この句などはかならずしも前置がなければならぬ句とも覺えない。二日灸といつて、二月二日に灸をするならはしになつてゐるが、それは命が大事の爲である。命と言つても花を見る爲の命が大事である。その爲に灸を

するのである、といふのである。芭蕉以來、花と月とは命を打ち込んでもいゝものとなつてゐる。芭蕉以來ではなく、昔から日本人は花と月とには憧れる性質を持つてゐる。それをこゝでも強調して、他の事はどうでもいゝ、たゞ花に憧れる爲に長生きしたい、その爲に灸をするのである、といふのである。芭蕉は「見るところ花にあらずといふ事なし、思ふところ月にあらずといふ事なし」と言つてをるが、しかしながらまた「この心推せよ花に五器一具」といふ前の句もあるやうに、己れを引き緊めて、輕々しく風狂の徒となる事を戒しめてをる。天明の几董あたりになるとその心の絆が少しゆるんでゐる樣な心持もするのである。

小袖ほす尼なつかしや窓の花　去來

天明の蕪村や、几董や、また天保の梅室あたりの句に接して、元祿の去來の句に戻つてみると、すつかり趣がちがつて、おほまかで品がいゝ。ふと見ると尼さんが花の咲いてゐる窓の下で小袖を干してをる。小袖といへば尼が着てをるやうな墨染の衣とは違つて俗の人が着るやうな絹の美しい衣服である。尼だところでたまには俗にあつた時分の美しい小袖を着る事もあるであらう。着ない迄も行李の底には昔の思ひ出にしまつて置きもするであらう。今はそれを取り出して窓の

ほとりに干してをる。却つてその尼のなつかしくあはれである事を思はしめるのである。それを去來はそのまゝに言ひあらはしたので景色も心持も素直に出てをる。

出代も頭巾で行や花の頃　園女

園女といふのは例の芭蕉に菌を食はして、それが爲に芭蕉が赤痢になつて死んだといふ話のある人である。といふと園女が惡者になるやうであるが、さうではなく、芭蕉も其時「白菊の目に立てゝ見る塵もなし」といふ句を作つて園女の美しい性質をほめてをるし、園女もまたそれが眞逆に芭蕉の死因とならうとは思はず樣々の御馳走をし芭蕉を遇するに餘念がなかつたのであらうが、たゞすゝめた菌が芭蕉の腹に障つたといふ事が、やむを得ない事であつたのである。扨てこの句は、昔は春と秋に婢僕が主人のもとを去つたり、また新しく入つたりする事に極つてをつて其を「出代り」と言つたのである。今は昔ほど、さういふ事は規則正しく行はれてゐないが、昔はそれが正しく行はれてゐたものと見える。後の出代りと言ふのは秋であつて、單に出代りと言ふのは春になつてゐる。さてこの句の意味はどういふことであらうかを考へて見ると、その頃の風俗が私には詳しくわかつてゐないから、解釋が覺束ないが先づ斯ういふ風に解釋は出來ぬであ

らうか。それは頭巾を被るといふことは其頃の女が着飾る時分にすることであつて、女中はふだん使ひ歩きをする時などはそんな事はないが、出代りの時分になると多少着飾つておめかしをするために頭巾をかぶるといふのではあるまいか。これが解の一つ。もう一つは、此の頭巾といふのはお高祖頭巾の類であつて、出代りする女は人目に立つのを嫌つて顔を半分かくして頭巾を着て行くといふのであらうか。それからこの句の裏面には元祿頃の風俗が想像されるやうに思ふ。花見に出る良家の女は目立たぬ爲に覆面して行つたものかも知れない。被衣といふものも行はれたかもしれないが、頭巾で顔を包んだものが多かつたのではなからうか。いづれにしても其頃の風俗を知らなければ此句の正解は得られない。

難波人の木屋町に宿りゐしをとひて

花を踏みし草履も見えて朝寢哉　蕪村

京の木屋町といふのは、現在は藝妓も出這入りする旅宿、東京でいふ待合の如きものゝ多いところである。天明の當時も矢張りさうであつたのであらうか。そこに大阪から來て泊つてをる人を蕪村が訪うた時分に、其人はまだ朝寢をしてをつたのであらう。蕪村は、其人は昨日は花見をしてそれで今日は草臥れて朝寢をしてゐるのであらうと解釋して、それといへばその玄關にぬぎすてゝある草履がある、この草履の主人は朝寢をしてゐると言つたのである。芭蕉であつたならば、何か一言の訓辭を與へるところであらうが、蕪村は粹に其朝寢を花見疲れとして此句を讀んだものと思ふ。「草履も見えて」と言つたのは實際草履があつたのかどうか分らない。又あつたにしても其は外の人の草履かも分らない。それを其人のものとして言つたところが面白い。

葛城山

猶見たし花に明行神の顔　芭蕉

葛城山の神は顔が醜いために晝は人に逢はれないといふ傳說がある。さういふ傳說のある神樣とすると晝間は見ることは出來無いであらう。併し出來無いとなると見度いといふ念慮が一層强くなる。殊に花の曙といふやうにほがらかな美しい時を背景にしては一層それが見度いものである、と言つたのである。「明け行く神の顏」と言つたところは、それが醜くからうが美しからうが、その神々しさを思ふやうな心情が出てゐる。併しあの謹み深い芭蕉が「見たし」といつたところには傳說を眞ともに信じないで聊か興がつて言つた心持が覗はれる。

山深く分け入りて

木の空の天狗も今は花の友　去來

山深く分け入つて花見に來た。こゝまで來ると天狗もをるかもしれぬ。併し、木の空に居る天狗はこはくは無い。それも花見の友だからと言つたのである。山深くとあるが、これは鞍馬山であらうか。鞍馬天狗の謠に、坊さんが稚兒達を連れて花見をしてをるとそこへ天狗が出て來て一緒に花見をするといふことがある。又其文句の中に「花見の友」といふ言葉がある。「木の空の天狗」と言つたところが面白い。

咲く花に浮世の人や神せゝり　去來

「神せゝり」といふのは、神樣をせゝくりまはす、即ち心から信じるのではなくて、半分はもてあそぶ如く、其癖頻りに神參りをするやうなのをいふのであらう。そんな人はよく世間にあるものである。花を賞翫もしないで、神せゝりばかりしてをる、これが浮世の人であると言つたのである。神せゝりをしてをる人は神樣をたよりにして浮世を渡る人である。我はそれには組せぬ。

唯花咲けば花をたづね、之を友としてゐるのである、といふのである。

子に飽くと申人には花もなし　芭蕉

世間にはよく、斯んなに子供が多くては困る、それだのに又一人出來さうだ。もう子供には飽き〳〵したなどゝいふ人がある。さういふことをいふものでは無い。そんなことをいふ沒人情の人は又花の趣をも解せぬ人である、と言つたのである。これも芭蕉の訓戒である。

やことなき御方のかさりおろさせ給ひて
かゝる淋しき地にすみ給ひけるにや

小冠者出て花見る人を咎めけり　蕪村

前置きから見ると、京の田舍の淋しいところで、そこによしある住居がある、誰か貴人が落飾して隱くれ住はれてゐるのであらう、といふので、扨て句は小冠者即ち元服をして冠をつけた少年、其が出て來て、そこに這入つてはいけない、と咎めた。こちらは何氣なく床しい住居で、其

軒にある花はいゝ花だなと覺えず一歩を門内に入れて眺めてゐたのに、其小冠者が出て來て咎めた。其小冠者の物腰も稍横柄なところもあるが、又やさし氣なところもある、全體の景色が棄て難く心を牽かるゝ風情であつたといふのである。これは物語りにでもありさうな景色であるが、蕪村時代にも斯る山里の住居はあつたことであらう。今では小冠者といふやうなものは無いが、斯る山里に斯る家はあつて、人を咎める少年が出て來るやうなことが無いとはいへない。現在はもう無いかもしれないが最近まではあつたことゝ思ふ。

花にあかぬ浮世男のにくき哉　千子

千子といふのは去來の妹である。花にあかぬといふのは花見をするといつて毎日のやうに出歩いてゐる人を言つたので、或は花を口實に、他の事に浮かれ歩く人かもしれない、それ等の人を千子は浮世男と言つたので、世の中の男といふものは遊びまはつてをつて仕方が無い、「にくい」男ではあると言つたのである。「にくい」と言つたところに女らしさがある。兄の去來は、花にかまはぬ人を浮世の人と言ひ、妹千子は、花にあくがれてゐる人を浮世男と言つたのである。

空耳に人聲すなり夜の花　梅室

晝の花は人が雜踏して騷がしかつた。が、夜の花は靜かだ。けれども晝の人聲がまだ耳についてゐて、空耳に聲が聞こえるやうである、とでもいふのであらう。空耳に人聲するといふのはうそである、けれども其うそを言つたことを巧みだといふ人もあるのであらう。俚耳には斯ういふ句が這入りやすいのかもしれぬ。

古寺や誰植捨し花一木　芭蕉

或古寺に一木の花があつた。斯んな古寺にも尙ほ今を盛りに咲いてゐる花がある、が誰も其花を賞翫して見に來る人も無い。又寺の人々も別に賞翫するでもなさゝうだ。誰が植ゑてどうしてこゝに育つて來たか。あはれに淋しい花である、といふので芭蕉らしい句である。

花に眼のちつてあぶなし丸木橋　梅室

丸木橋を渡つてゐる時分にも、尙ほ咲いてゐる花に心が牽かれる爲めに、其方をちよい〳〵見る。足許がお留守になる。危なくつて落ちさうだ、といふ句である。危ない丸木橋ならば氣をつけて靜かに渡つて、それから花を見るがよからう。渡りながらも花を見るといふのは似非風流である。併し斯ういふ風のことが、專ら風流だと解せられた時代もあるのであらう。今も尙ほあるかもしれぬ。

花に浮世我酒白く食黑し　芭蕉

この句は前にあつた「此心推せよ花に五器一具」といふ句に似通うてをる。「花に浮世」といふのは此後に大分言葉が略されてゐるものと解すべきであらう。「花が咲いた、浮世の人はそれ花見だと騷ぎはじめた、定めて芳醇な酒山海の珍味をと心をくだくであらう」とでもいふ言葉が略されてゐると解すべきであらうか。扨て此句の意味は、浮世の人はさうであらうが、自分は酒を飲むにしても白い濁つた酒で、食も黑い飯だといふのである。芭蕉だところで隨分御馳走も食べたこともあるであらう。必ずしも御馳走は食べない、御馳走は嫌ひだといふのでもあるまいが、——芭蕉が茶事の献立を自ら認めたものなどには隨分御馳走がある。——斯ういふ心持は常に忘

れなかつたものと見える。任口に送る手紙に此句を認めて、「此の句のこゝろに身持可被成と存候」と書いてをるから、人を戒める意味につかつてをるやうである。此句も唯芭蕉の道學者めいた心持許りでは興味が無いが、「酒白く食黑し」といつたところに文學がある。

（昭和二十二年四月）

古人の花の句をひろひ讀みして

子規の俳句全集を讀んでゆくうちに或る人々の句に逢著して、それを見ると古人の句にはまた今頃の句に見當らない面白さがある。

蓮哥以來「花」といへば櫻のことになつてゐるやうであるが、又櫻の文字を遣つた句もかなりある。が茲には「花」といふ文字を遣つた句のみを取り出して見ることにする。

花過て雨にもうとくなりにけり　几董

花が咲いてゐる時分は、雨が降るといふことがたいへん氣になることである。ひとたび雨が降ると花の色は褪せてしまふ、さうでなくても花を見に行く人にとつても雨は惱みである。從つて雨のことは氣になる。それが花が過ぎるともう雨のことも餘り問題にしなくなる、それは雨にも疎遠になつたといつてもよからう。さういつたところに此句の曲がある。

深草元政古墳

月に花に法の杖あり竹三もと　蓼太

深草の元政庵にある元政の墳には、今でも竹が三本植わつてゐると思ふ。これは元政の遺言によつて竹三本をその墓の上に植ゑることになつたのだといふことである。歌人であつた元政のことであるから、月花に心を寄せ、しかも佛の道にも徹した人の墓じるしとしては、竹三本はまことに由あるものと思はれる、と云ふのであらう。或は月、花、法、その三つの象徴として三本の竹が植ゑてあるといふ風に解されないこともあるまい。

布袋讃

物ほしや袋の中の月と花　はせを

布袋の畫にはかならず大きな袋が附物である。如斯大きな袋を携へてをつていかにも物欲しさうに見えるが、その袋の中には別の財寶を貯へようといふのではない、たゞ月と花とを滿たしてゐるのである。といつたので、芭蕉自身の心もちをいつたものかと思ふ。

憶芭蕉翁

月花や洛陽の寺社殘りなく　其角

芭蕉翁を追懐しての句である。月につけ花につけ京都の寺や社は殘りなく廻つたことであらう、と芭蕉を追懐しての句である。「洛陽の寺社殘りなく參詣仕りて候」などゝいふ謠の文句に因んだところもある。

宗祇影開

影とめて世に月花のあるし哉　宗因

はせ翁の像の讃

月花の外に用なき翁哉　野坡

由來連哥であつても俳諧であつても月とか花とか、自然の風物に心をとめ、それに精神を打込むことをいのちとしてをるものである。連哥の宗祇、俳諧の芭蕉兩人に對する讃美の情は是等の

句となつたのである。「影とめる」とあるのは、いつまでも此世の中に影となつて殘つてをるといふのである。この世の中にとこしなへに殘つてをつて、月や花のあるじである、と宗祇を讃美したのが宗因の句である。また人世の功名富貴、利害得失等には何の關係も無い、といふよりもむしろ月や花に携はつてゐる外には何も用事がない人であつたと芭蕉を讃美したのが野坡の句である。

寢惜みて二人出合ひぬ花に月　梅室

春といふものにあくがれて早く寢る事が惜しくつて夜更かしをしてをる人が二人あつた、其二人が偶然出合つた、といふのであるが、「花に月」といつたのは、其場合の景色を現したと同時にその二人が恰も花と月でもあるやうな感じもしたのである。梅室時代の句になると平坦に景色を敍するといふばかりではなく、そこに何等かの曲がなければ承知が出來ない。此句も二人が出合つた、花と月が出合つた、といふ風にいつたところが巧みだとせられたものだらう。

月花におくらまほしき此世哉　宗祇

これはいかにも大まかに平坦に心もちを述べた句であるが、この世の中には利害得失などで樣樣の紛糾葛藤があるのであるが、さういふことは一切棄てゝ、たゞ月花を友として送りたいものである、といふだけの句である。これは連哥の發句である。

しばらくは花の上なる月夜哉　はせを

月は東から昇り西に沒するのであるが、恰も今は中天にかゝつてをつて櫻花の咲き滿ちてゐる上にとゞまつてをるやうな感じである。「しばらくは」といつた處は、その場合の景色なり感じなり、つまり花の上にとゞまつてをるやうに感じた、其事を現したのだと思ふ。

芳野

あの雲は翌見ん花か吉野山　蓼太

吉野を望んだ時の句であつて、その上には白雲が棚曳いてをるが、あの白雲はあす見る花であらうか、といつたのである。すでに花の雲といふ言葉があるくらゐであるから、白雲を花の雲と

見ることはあり得べきことのやうであるけれども、あの白雲があした見る花であらうかといふのは、些か實情に遠くて、言葉の上の巧みを見せたやうな句であると思ふ。

いつとなく花になりけり峰の雲　梅室

この句も亦同じやうな著想から出來てゐる句であつて、峰の雲がいつのまにか花になつた、といふやゝ誇張した敍法を用ゐた句である。

前者は天明時代の句、後者は天保時代の句である。

觀音のいらか見やりつ花の雲　はせを

花の雲といふ言葉が現してをるやうに、一面に咲き滿ちてをる櫻は、恰も雲が棚曳いてをるやうである。その上に觀音の御堂は稍〻反つた甍を載せて聳えてをる。花の雲の中にその甍を見たといふことをいつたのである。たゞ見たといふだけでなくつて、その甍に目を止めてじつと見たといふ心もちが、「見やりつ」といふ言葉の中に出てをる。同時にその觀音の甍が花の雲の中に

はつきりと、目に映るやうになる。芭蕉の句の力のあるところである。

吹け〳〵と花に欲なし凧千代尼

凧を揚げる場合にはたゞ風がほしい、風よ吹け吹け、と凧揚げの子は心に念ずるばかりである。子供のことであるから花に欲はない、花に執著のあるのはおとなのことである。花のためには風は仇である。おとなになれば子供とは反對の欲望があるわけである。そのおとなの欲を裏づけてゐるところが此句の味噌である。

夕暮や花に猪追ふ嵐山　闌更

晝間は出盛つた群集で花盛りの嵐山は相當に賑はつたのであるが、日の暮れになると猪が出るといふので、その猪を追ふといふのであらう。今でも嵐山の奥の方になると猪が出ることがあるのかも知れないが、天明時分にはかういふ實況があつたのであらう。

逢坂や花の梢の車牛　智月

おそらく逢坂山で見た實景の句であらう。坂道のことであるからして、花の咲いてゐる坂道を車の牛が通つてをる、それが目に映つた時の句であらう。牛車といはないで「車牛」といつたところも、その牛が特に黑く大きく目に映つた感じが出てゐる。おそらく寫生の句であらう。元祿の俳句の實直なところがある。

われ獨りむれつゝ花の旅烏　鬼貫

吾れは獨り旅である、が花の上を飛んでをる烏は群れてをる、といふ句である。「旅」といふ字は恐らく吾れといふ字の上にも冠せられるものであらうが、それを「旅烏」と烏の上にのみ冠せた處に此句の巧みが存してゐるのかもしれぬ。

鶯のたま〳〵啼くや花の山　蕪村

かういふ句に接するとはじめて自分のうちへ歸つたやうな感じがする。現代の句と大變似通つてをる。蕪村の句としてはむしろ平坦な句であるが、併し「花の山」の感じは此平坦な敍法のうちによく出てをる。花の山には多くの花を見る人がゐるのであらう。其等の雜踏も想像されるがしかし此句にはさういふ方面のことはわざと描いてない、たゞ鶯がたま〳〵啼く、といふことが敍してある。雜踏もしてゐるであらう、併しながら大體において靜かである花の山の感じは出てをる。

物皆自得

花を吸ふ虻なくらひそ友雀　はせを

蜜を吸ふ虻がある、またその虻を食ふ雀がある。「物皆自得」といふ前置きは、その事想を其儘に見た感じであるが、芭蕉はそれをそのまゝに見すごすことが出來なかつた。雀に呼びかけて、お前も虻は友ではないか、虻を食ふことはよせ、といつたのである。併し物皆自得といふ前置きを置いた處から見ると一應「虻なくらひそ友雀」とは云つたものゝやはりそれはやむを得ない自然の攝理であると觀じたものかも知れない。

暮れかねて花に淋しや尾長鳥　樗堂

尾長鳥といふ鳥はなんだか目立たしい哀れげのない鳥であるやうな感じがするのである。夕暮になつてその尾長鳥が花の梢にをる。春の夕暮でおほかたのものは暮れてゐるけれども、その中に尾長鳥はまだ暮れ切らぬさまに目に映る、それが哀れげのない鳥であるだけに却つてあはれに淋しい感じがする、といふのである。

つばさ折りし雁哀也須磨の花　闌更

翼折りし雁、といふのはどういふのであらう。おそらく芭蕉の「病む雁の夜寒におちて旅寢かな」といつたやうな、雁をあはれむやうな心もちから作者が醸し出した言葉であらう。春の雁は所謂歸る雁で、日本を去つて北の方に歸つて行く雁である、その中に翼を折つて歸れなくなつた雁がある——、それは寔に哀れである、須磨の櫻は今を盛りに咲いてをるが、その哀れな雁があると哀憐の情を述べたものである。須磨の浦は平家沒落の古戰場である、その古蹟に立つた作者の哀情が畢竟ずるに此句を生んだものであつて、平家の武者達が弓が折れ矢が盡きて、船へ歸るにも歸られずにこの須磨の浦の土となつた、それを悲しむ情を雁に移していつたものであらう。

すみた川の花

嵐山と此花といざ都鳥　成美

前置きがないとちよつと判りにくい句であるが前置きと合せて見るとすぐに判る句である。嵐山と隅田川の花とどちらがすぐれてをるか。花だけでは兩者の間の優劣が無いが、唯隅田川には都鳥といふものがある。これを配して見ると隅田川の方を勝とすべきである、といふのである。「いざのぼれ嵯峨の鮎くひに都鳥」といふ古句をも踏まへてゐるのかもしれぬ。

漢人丸山に遊ふ圖

花に鳥鸚鵡の舌のほしけなる　樗堂

漢人の丸山に遊んで居る圖は華やかで美しい、花に鳥が遊んでをる光景を髣髴する。たゞ双方言葉が通じぬため不便を感じるであらう、せめて鸚鵡の物眞似の舌をほしいと思ふであらう、と

いつたのである。鸚鵡も亦美しい鳥であつて、その圖の華美である處から連想される處のもの〻一つである。

人追ふて蜂戻りけり花の上　太祇

蜂が怒つて人を追うて行くといふことはあることである、暫く人を追うてをつたが人が逃げたために、蜂は前のところへ戻つて來て花の上にをるといふのである。たゞそれだけの句である。「花の上」といつたところがいくらか敍法が大まかであるが、しかし此頃の寫生句と相近い句である。

辛崎の松は花より朧にてはせを

辛崎の松は根を張り枝を擴げて蟠居してをる。春の夜その松を見ると、處々に咲いてをる花よりも一層朧に見ゆる、といふのである。朧夜のすべてのものは同じやうに朧の中に包まれて居るのであるが、然し特にその松に目をとめてこれを見ると、一番その松が朧のやうに感じられる。

朧といふものは元來ものなつかしい情趣をそゝるものである處から、特にその松を朧といつたものであらう。

山松のあはひ〳〵や花の雲　伊賀越　その

伊賀越をしてをる時に見た景色を其儘句にしたものであらう。山に生えてをる松の間のところとところに櫻の花が湧き出たやうに咲いてをる、といふ單純な敍景の句である。たゞ「山松」といふ言葉、即ち山といふことは松ばかりにかゝつてをる言葉であるが、それで全體の景色を山の景色と推量させようとするところに多少敍法の無理があるともいへる。尙此句は前置きがなくとも如何なる場處にある景色だとしても受取れる句である。

花と松一人〻〻に向ひけり　嵐山　梅室

嵐山は皆の知つてをる如く松と花とがなひまぜになつてをるいゝ眺めである、それを見物してをる群集は大勢であるが、然しその花と松はその群集のめい〳〵に向つてをるのである、甲の人に向つて乙の人には向はないといふやうなものではなく、一人々々に向つてをるのである、一人一人に媚を呈してをるのであると迄は言つてないが、まあさう言つた趣であるといつたのであらう。「一人々々に向ひけり」といふ言葉はいくらか無理である、がその無理なところに巧みさがあると云へないこともなからう。

鹿島に花稀也

なまなかに花は塵也神の森　梅室

鹿島明神に參詣した時分の句である。鹿島に詣つて見ると花が少ない、いくらか花を探ぐる心もちもあつて鹿島に詣つて見たのであるが花は稀にしかない、この境内に立つとなまじひに花は塵のやうな感じがする、只神々しい神の森がある許りである、といふ句である。唯鹿島神社には少ない、といふだけでは不滿足で、斯く敍したところに此作者らしいところがある。

傘さして駕かく花の都哉　蓼太

駕舁といふものは笠をかぶつてをるのが普通である。或は雨が降つてゐても笠もかぶらないで手拭で頰冠りをしてをる者もあるであらう。然し京に來て見ると、傘をさして駕を舁いでをる悠長な姿を見るといふのである。傘をさして駕を舁ぐといふ特別なことを扱つた句ではあるけれども句柄は此作者としては素直な句である。

山々や花に摧けし杖の尖　闌更

「花に摧けし」といふのはどういふことであらうか。杖の尖が減つてさゝらになつてゐるといふことでもあらうか。併し此句には人が花にあこがれて山々を經巡ぐる、即ち心をくだいて花にあこがれる、その心が杖の尖も亦花に摧けるといつたものであらうか。天明あたりでも闌更あたりには斯ういふ入り組んだ構想があるかもしれぬ。

威勝寺に遊ぶ

池水を鏡や花の夕化粧　乙由

威勝寺といふ寺に遊んだ時の句である。景色は唯池の畔りに櫻の咲いてをる木があつて折節夕暮であつたといふのに過ぎないのであるが、それを斯く言葉を綾にして描いたものである。池水を鏡にしてその花が映つてをる、折節夕方であるからその花は夕化粧をしようとして鏡に向つてゐるのであるといふので、率直に景を敍するといふよりも、池水を鏡と見立て、更に花が夕化粧をしてをるといふ風に言つたところが此句の覘ひ處である。乙由といふ人は所謂月並の大家であつたのであるが、この句の如きは先づ上々の月並句といつてよからうと思ふ。併し私等はかういふ句には感心しない。

草庵

花の雲鐘は上野か浅草かはせを

芭蕉がその草庵に閉ぢ籠つてをると鐘の音が聞える、遠くに花の雲が棚曳いてをつて霞鍵とした春の日である。あの鐘は上野の寺で鳴らす鐘か浅草の寺で鳴らす鐘かと疑ひを抱いたのである、かりに疑ひを置きはしたものの、上野であらうが浅草であらうが強ひて聞きさだめようとは思はない、たゞ霞の深い花の雲の處々に棚曳いてをる大江戸の一隅にあつて、上野か浅草かどこか知らぬが鐘の音が響いて來る、といふ其時の茫洋たる感じを述べたものであらう。

石高な都よ花の戻り足　蕪村

「石高な」といふのは石が高く出てをるといふ意味であらうと思ふ。その時分の京の町はづれの道などは石が出てをつて歩きにくいものであつたらうか。西山か北山の花を探ぐつて京に戻つて來る時分に足はもうかなり草臥れてをる、それで石の高く出てをる京の町に這入ると草臥れた足がその石に躓づいて歩きにくゝ一層草臥れを覺える、といふのであらう。稍〻複雜なことをいつたものであるけれども、言葉が巧みに遣つてあるために直ぐ其等の景色を受取ることが出來る。

花に來て都は幕の盛哉　其角

京に來て見ると今が花盛りである。それよりも、幕を打ち連ねてところ〴〵に花見の宴を催してゐる方が目に立つ。花の盛りといふよりも寧ろ幕の盛りと云ふべきであると、いふのである。其角の、ずばつと事柄を敍した磊落な面が出てはをるが、「幕の盛」といふやうな敍法は必ずしもとらない。

芳野にて花を見せうそ檜笠　はせを

芭蕉塚

よしの見た笠羨ましき花の雲　乙由

この芭蕉の句は杜國と共に吉野の花見に行く時分に「乾坤無住同行二人」と前置きをして此句を檜笠に書き、また杜國も其句に竝べて「よし野にて我も見せうそ檜の木笠」と書いたといふ有名な句である。句の意味はきはめて明白で、檜笠に向つてこれから吉野へ行つたならばお前にも櫻を見せてやるぞと、生きたる者に云ふ心もちでいつたので、その檜笠を有情のものに見立てゝいつたといふ處に芭蕉の、吉野の花を見るといふ、はずんだ心もちが出てゐるのである。

次の乙由の句は、芭蕉塚に詣つて作つた句であつて、その吉野を見た笠が羨ましい、自分もその笠の如く芭蕉の身邊につき添つて共に吉野の花見をしたかつた、といふのである。「花の雲」といふのは別に意味があるわけではない。其時の吉野も花の盛りであつたらう、今も亦花の盛りである、といふ意味である。

絶壁懸河を凌て日毎に越來るは危き世渡也

筏士の嵯峨に花見る命哉　几董

保津川に筏を下すのは、危いところを水棹一つの操りで無事に渡つて來るのである、一つ違へば急湍深淵の藻屑となるのである、まことに危いいのちである、がこの筏士が嵯峨に下つた時分には筏をとめて花を見てをる。それに就けてもこの筏士のあぶない日々を過すいのちのほどを思ひやるといふ句である。

ある僧のさらひし花の都哉　凡兆

「ある僧」といつたのは誰のことであらうか。西行法師のやうな人であらうか。或は兼好法師といふやうな人であらうか。とにかく或る名高い坊さんが、萬事が派手できらびやかで、其中では權勢爭奪の見にくい葛めきもあるであらう其花の都を嫌つて都の外に隱れ栖んだ、さういふ坊さんがあつた。茲はその坊さんが嫌つた花の都である、といふのである。如何に美はしいきらびやかな併し乍ら又見にくい花の都であるかといふことを云つたものである。

日暮る程嵐山を出る

嵯峨へ歸る人はいつくの花に暮し　蕪村

今自分は日が暮れたために嵐山を出て都へ歸るのである、然るに今頃嵯峨の方へ歸つて來る人がある、此人は何處の花を見に行つて今どろこの嵯峨へは歸つて來るのであらう、といふのである。日暮れになつて歸る人は各々違つた用事を持つてゐるであらう、然るに是等の人を皆花見に行つての歸るさと無理押付けに考へる所に、多少風狂をでらふといふところが無いでも無い。

山路

道ありと下れば庭そ寺の花　淡々

これはよく私達の遭遇した景色の一つである、花を探ねて山を通つてをる時分に、よい道があると思つてその道をとつて下るとそれはお寺の庭に出てしまつた、それも一木の花があつた爲にそれを目當てにして下つたらばそれはお寺の庭であつた、といふのである。

花に暮れて我家遠き野道哉　蕪村

これは説明をするほど何もむつかしい處のある句ではない、花見をして暮れて戻つて來る道はなか〳〵遠い、夜道をとぼ〳〵歩いて來るのであるが我家はまだなか〳〵遠い、といふのである。

花に來て佗よ嵯峨野の草の餅　几董

花を見に來て、嵐山あたりではきらびやかな群集も見飽きたが、今自分は、それらの境をはづ

れて、嵯峨野の道端にある茶店で草の餅を食べてをる、それは佗びしいことではあるが、併しながらなか〳〵に風情がある、願はくは人々もこの佗びた味をあぢはふやうにして貰ひたい、と人に呼びかけて云つたやうな句である。お説經の句である。

翁百回忌に

空に降るはみよしの〻櫻さがの花　蕪村

芭蕉の百回忌に當つて蕪村の詠んだ句である。芭蕉の靈を祀るに當つて佛法莊嚴に天から花を降らす、それはかね〴〵芭蕉があこがれてゐた吉野の花、嵯峨の花であるといふのである。

肌のよき石に眠らん花の山　路通

花の山で日が暮れて、石の上で眠るとしよう、が、きめの荒い石よりも肌の柔かい石に眠らう、といふのである。「肌のよき」といふ處はいくらか人を連想したやうなところもある。

をとゝひはあの山こしつ花盛　去來

この句はおほまかな、此作者の人柄を現して居るやうな句である。旅をして來て今は或る處に居る。目に見える山を振り返つて見て一昨日はあの山を越えたのである、とつく〴〵其邊を眺めた。その山を越えた時分も或は峰高く或は谷深く花を送迎した事である、今自分の居るところ亦花の盛りである、といふ花盛りの感じが、をとゝひはあの山を越えたといふ感じと相抱いて作者の情懷となつてをる。それが、きのふでなくて、をとゝひであることが殊に其感懷を力勁くする。

洛陽

歌一首もたぬ山なし花の雲　蓼太

京の山々は千年の間歌人に詠みふるされて居るのであるから、一つでも歌によまれぬ山といふものはないであらう、といふのである。それを山が歌を持つてゐるといふ風に敍した處が此作者の得意なところであらう、が私等は與せぬ。

煩悩と知りつゝ花の山めぐり　梅室

煩悩だと知りながら花をたづねて山巡りをする、花に對する執著があるといふのも畢竟悟れぬからである、といつたのである。宗祇や芭蕉の月花にあこがれて歩く、と率直にいつた方が感じがよい。斯うかしこげにいはれると多少の俗臭を感ずる。

二日見ていかさま花のよしの山　几董

たとへば嵐山を二日見たのであつては其翌日の方が前日より勝つてゐるとか興味が深くなるといふことはないが、其が吉野山となると、前の千本、中の千本、奥の千本など〻變化が多く、はじめ一日見たゞけではさほどにも感じなかつたものも、二日見てはじめて成程これこそ所謂「花のよしの山」であるわいと感じたといふのである。

これは〳〵とはかり花の吉野山　貞室

花の吉野山の代表的の句になつてゐるほど有名な句である。吉野の花もたくさんに續いてゐる様を想像さすことは一と通りは出來ぬこともないのであるが、それほどい〻句とは思はれない。

大峰や吉野の奥の花の果　曾良

吉野の山つゞきになほ花をたづねると大峰にも立派な花がある、がもうこゝは花のあるところの一番果てと見るべきである、といふのである。まだ奥にも花の無いことはないのであらうが、花の名所としては此の大峰が果てである、といふのである。

藍に宿りて

めづらしやよしのを下りて花一木　蓼太

吉野の山の麓に宿つたといふ前置きであつて、其宿の庭にも一木の花があつた、その花をめづらしく思つた、花を珍らしく思つたといふのではなくつて、唯一本の花であつたといふことを珍

らしく思つた、といふ句である。穏やかな句のやうに一應は考へられるが、吉野山では千本二千本と連なる澤山の櫻を見た、その澤山の櫻に馴らされた目で唯一本の櫻を見るといふことは珍らしく感じられるのであつて、斯ういふ裏面の意味があることを悟らねばならぬ。

戀々と花に沈めり嵐山曉臺

「戀々と」といふ言葉は此場合どういふ意味かはつきり判らないが、恐らく嵐山は、一途にひたむきに、花に沈んでをるといふ意味であらうかと思ふ。又戀々といふ言葉の音から花に沈んでをるといふことが強く頭に響くやうになる。花に沈むといふのは嵐山が花の底に沈んだ、即ち花ばかりになつてしまつた、といふ意味であらう。

四方より花吹き入て鳰の海はせを

これは實際見た景色といふよりも、大かたを想像したやうな句であるが、併し乍らさういふ事もありさうに思へる。それは鳰の湖即ち琵琶湖は、周圍七十里ばかりである、その四方から落花

が吹き入れるといふのである。少し大まか過ぎるけれども壯大な句であるといふことは云へる。

ねむたさの春は御室の花よりそ　蕪村

春も酣はになつて來るとだん〳〵眠たくなつて來る。朝の眠りもむさぼりたくなるし、晝間も亦うつら〳〵とすることが多い。それは丁度御室の花のさかり頃からである、といふのである。御室の花は、八重であつて普通の花に較べると一と月餘りおくれて咲くのである。薄暑を感じる頃であるから、そろ〳〵眠くなる時分である。其意味はそれだけであるが、それを御室の花から眠む度い春ははじまるといつたところに言葉の綾がある。

花といへばはや幻に嵯峨御室　梅室

花といへば早とつくに過ぎ去つてしまつた、唯幻に嵯峨や御室を描くばかりであるといふのである。月日の經つのの迅いことを云つたものであらう、同時に過ぎ去つた花に尙ほ懷ひの殘つて居る心もちをいつたものであらう。

花に鐘そこのき給へ喧嘩買其角

上野の山の花の盛りを云つたものであらうか。花ざかりの中に撞き出す鐘の音が響き渡る。そこに喧嘩がはじまる、穏やかにしてをればいゝのに喧嘩を買ふ男がある。喧嘩などはよしてそこを退いた〳〵といふ句である。

（昭和二十二年四月）

古句一百

俳句も幾變遷したが、俳句は花鳥諷詠詩であると云ふ見解の下に現代の俳句は歩みを續けて居る。

我國は天然の風景が秀でゝ居る許りで無く、四季の循環が正しく、蝶鉾ひ鳥歌ふ所謂蓬萊島の觀がある。我國に花鳥諷詠詩の興つたことは偶然では無い。

花鳥とは、春夏秋冬四季の現象を謂ひ、諷詠とは、其現象を詠嘆讃美するを謂ふ。花鳥諷詠詩は或は花鳥を藉りて心に有る感情を述べ或は花鳥其物を讃嘆諷詠するものである。

俳句も幾變遷したが、骰密なる意味で、花鳥諷詠詩として立つやうになつたのは元祿の芭蕉からである、といふよりも、芭蕉の開拓した花鳥諷詠詩の天地が、今迄の俳句史の中で最も偉大なるものである事を注意しなければならぬ。其芭蕉を始めとして、名選集「猿蓑」の選者去來、凡兆、安永天明にあつて芭蕉の遺業を復興した蕪村、並に之を扶翼した太祇、几董、召波、俳壇の彗星である文化文政の一茶、明治の俳句革新を遂げた子規の句等一百句を選り出してこゝに「古句一百」と題するものを得た。

以つて花鳥諷詠詩の何物なるかを明かにすることを得れば幸である。

無精さやかき起されし春の雨　芭蕉

隠逸を旨とした芭蕉にはかういふ粗懶の境涯を詠つた句もある。春雨の降る日、何の拘束も無い獨り住みの境涯はいつ迄も蒲團にもぐりこんで居た、其處へ一人の友達が來て、「未だ寢て居るのか、もう晝が近い、いゝ加減にして起きてはどうか」と無理やりに起された。その無理やりに起されたといふことも亦春日の一興である。

落ちざまに水こぼしけり花椿　芭蕉

庭に咲いてゐる椿は蠟細工みたやうな固い花瓣をしてゐて美しい。それを見守つて居ると、突然ぽろりとこぼれ落ちた、その拍子にその花の底に溜へてをつた水がこぼれた、といふのである。後になつて蕪村に「椿落ちてきのふの雨をこぼしけり」といふ句があるが、何もきのふの雨とことわる必要は無い。

木の下に汁も膾も櫻かな　芭蕉

昔の花見は悠長なものであつた。木の下に毛氈を延べて花見の座を作る許りか、傍には石を積んで竈を拵へそれに鍋をかけて汁も出來、丼には膾もある、といふ具合に御馳走が取揃へられるのであつた。その汁の上にも膾の上にもはら〳〵と落花が散りかゝる、といふ落花繽紛の狀を描いたものである。

青柳の泥に枝垂るゝ汐干かな　芭蕉

海の湖が這入つて來る入江がある。其岸に一本の青柳がある。舊暦三月の大潮の時、潮が退くとその柳の下に泥の洲が現れて平常は餘り目に附かなかつた泥が見えた、その洲の現れたことも、柳の絲の長く垂れ下つて居る景色に一層のやはらかみを添へて、春の長閑な一幅の畫圖になる。

酒落堂記

四方より花吹入れて鳴の湖　芭蕉

周回七十幾里といふ琵琶湖は沿岸に澤山の櫻があつて其櫻が一時に落花するとき、その落花は悉くこの湖の中に吹き込むのであると、琵琶湖を大觀して作つた句である。この濱田珍夕の洒落堂といふのは膳所に在つたのであつて、そこから湖の一角だけを望んでも澤山の落花が吹き込んで居る、定めて湖一面に落花の吹き込むさまは壯觀であらうと芭蕉はこの洒落堂を讃美する心持から琵琶湖をシボツテ一眸のうちに集めた如く敍したのである。

くたびれて宿かる頃や藤の花　芭蕉

今日もかなりの道のりを歩いて脚胖も足袋も砂埃に塗れた。折節一軒の旅人宿を見つけて其處を今宵の宿りとしようと思ふ。前にある小高い山の崖から下つてをるか、若くは宿屋の軒端に高く掛つてをるか、藤の花が紫の房を垂れて居て、その藤の花に春の夕日が戻らうとして居る。といふ春夕の旅情を詠つたものである。

ひや〳〵と壁をふまへて晝寢かな　芭蕉

仕事に草臥れた者が疲れ果てゝ晝寢をするといふのでもなく、又、もの持の隱居さんが涼しい間を選んで晝寢するといふのでもなく、芭蕉の如き隱逸の人が乏しい生活の中に氣任せに晝寢をするのであつて、足を伸ばして傍の壁に足の裏を附けて見ると、ひや〳〵として心持が良い、といふのである。

五月雨の雲吹き落せ大井川　芭蕉

昔の大井川はよく話題に上る所であつた。他の天龍、木曾、富士等の諸大川よりも大井の渡しと云ふ方が人口に膾炙して居る。其渡しを渡るのに舟では渡らずに、特に雲助が一人づゝ肩車をしたり、若くは蓮臺に乘つて渡るのであつて、若し雨が降り續いて大水の出た場合は直ぐ川止めになつて旅人は幾日もの間空しく金谷、島田といふ其兩岸の宿場に逗留しなければならなかつたのである。芭蕉も矢張り其一人であつて、五月雨の雲が大井川の空に固く凝つて動かうともしない、この鹽梅では何時晴れるか分らない、どうか一陣の風が吹き起つてあの雲を大井川に吹き落し、晴間を見せて呉れるやうに。と云ふ句である。

五月雨を集めて早し最上川　芭蕉

最上川は羽前の中央を流れて日本海に注いで居る大河である。山嶽重畳たる間を流れて居る此最上川は、五月雨の頃になると其川沿ひの山々の雨が此最上川に集つて水嵩が増し滔々たる濁流になつて海に注いでゐる。

ほと〻ぎす大竹藪を洩る月夜　芭蕉

大竹藪といふと直ぐ嵯峨野を思ひ出す。あの現在見る處の天龍寺から野の宮あたりに續いてゐる大竹藪は元祿の昔もあつたものであらう。夏の月が空にか〻つてその大竹藪を照らして居る。竹藪を洩る月影はかなり明るい。折柄ほと〻ぎすが一ト聲二ト聲大空を過ぎ去つた。といふ句である。

草の葉を落つるより飛ぶ螢かな　芭蕉

螢の光が草の葉を匍つて居る。軈てその光がこぼれ落ちたと思ふと直ぐ曲線を描いて飛んだ、と云ふのである。螢火のとぶ柔かい線が想像される。

田一枚植ゑて立去る柳かな　芭蕉

芭蕉が奥の細道の旅をする時分に、西行の「道の邊に清水流るゝ柳蔭しばしとてこそ立とまりつれ」といふ歌のある蘆野の里に在る柳の蔭に立寄つた。芭蕉はその柳蔭を懐しんで態々其處に立寄つて休んだといふ其感懐を詠ひたかつたのであるが、なまじひに感情を直敍することをしないで、只其時の事實、即ち田一枚植ゑてしまふのを待つて立去つた、といふ、只事實の儘を直敍したことに依つて、獨り其場の容子も明かに寫されて居る許りで無く、又其時の情緒も豐かに出て居る。

手離せば夕風やどる早苗かな　芭蕉

田植をする時分に早苗を手に取つてそれを田の中に挿込む、さうして手を離すと早やその早苗

に夕風が宿るといふのである。早苗といふものは一たん苗代田から引抜かれて束にされて、それが水田の中に投げ込まれて早乙女の手に移つて植付られるのである。その引抜かれて束にされた早苗はたとへば假死狀態に在る人間のやうなものであるが、一度早乙女の手に依つて植付られると早や夕風がそよ〳〵と吹き渡つて蘇つたもの丶如く戰いで居る、と云ふのである。

立石寺

閑(しづか)さや岩にしみ入る蟬の聲　芭蕉

奥の細道の時分に羽前の國の立石寺といふ山寺に詣つて出來た句である。その立石寺と云ふ寺は「岩に巖を重ねて山とし、松柏年舊り、土石老て苔滑に、岩上に院々扉を閉て物の音きこえず」云々とある山寺であつて、蟬の聲も岩に沁み入る如く響き渡る、といふ句である。

清瀧や波に散り込む青松葉　芭蕉

高雄川の下流は清瀧川となつて清瀧と稱へる一部落を流れて居て、洵に名にふさはしい清い激

流を爲して流れて居る。勾配の急な石の間を落ちた水は忽ち碧潭となつて巖の間に澄んで居る。そこに青松葉がはら〳〵と散込む、その松葉の一度沈み又泛び流るゝ樣子もはつきりと見える。如何にも清澄な感じである。芭蕉はその境を敍べて其情を略して居る。

陸奥に下らんとして下野の國まで旅立けるに、那須の黑羽といふ所に翠桃何某の住けるを尋ねて、深き野を分入ほど道もまがふばかり草深ければ

秣負ふ人を枝折の夏野かな　芭蕉

前置にある通り草の深い野原のことであつて殆ど道さへ分らない。只、秣を背負うて居る人が向うの方に見える。其人の行く所には道があるのであらうと、其人影をあてにして歩いて行く。

平泉古戰場

夏草や兵どもが夢のあと　芭蕉

奥の細道の時分に、奥州の平泉を訪うて高館に登り、昔義經が此處で亡びた、其時の事を懷古

した句である。昔は忠勇の武士が枕を竝べて討死した所である、今は夏草が茂つてゐる許りである。三代榮華の趾も空しく全く夢の如し、といふのである。此句の如きは只「夏草や」の五字で景色を彷彿させて居る許りであつて、下の十二字で切々の情を敍べて居る。

秋鴉主人の住景に對す

山も庭もうごき入るゝや夏座敷　芭蕉

秋鴉主人の家の景色の佳いのを賞翫した句である。その家は山に對しまた大きな庭を控へて居る、其山も庭もゆるぎ出して座敷に集つて來る如く感ずると云つたのである。動くと云ふ言葉は自動詞であつて山や庭にかゝり、入るるといふのは他動詞であつて夏座敷にかゝる。文法上から云へばをかしなものであるが、然しよく其情景が寫されて居る。詩としては斯の如き破格の用語も亦差支無いであらう。

あら海や佐渡によこたふ天の川　芭蕉

奥の細道もだん〳〵末になつて越後の出雲崎に來た。冬海の日本海は荒れてをる。其荒海を前にして大空を眺ると天の川が沖の方遠く佐渡ヶ島かけて流れて居る。芭蕉は仰いで此壯大なる天象を讃美すると共に切々たる旅情を味はつたのである。

大風のあしたも赤し唐辛子　芭蕉

唐辛子は日に日に赤い、朝露が下りても赤いし、日が當つても赤い、又大風の吹いた朝見ても矢つ張り赤い、と唐辛子の赤いことを强調して言つた句である。

海士の家は小海老に交るいとゞかな　芭蕉

海士の家には小海老を門口や緣側に干して居る、その小海老に交つていとゞがとんで居る、といふ句である。海士の家の貧し氣な荒涼たる景色が想像される。

赤々と日はつれなくも秋の風　芭蕉

日はまだ赤々と照り渡つて人に情なく暑い。がもう風は秋であつて落寞の氣もせぬでもない。といふので、旅を住家として居る芭蕉の體驗を咏つた句である。

一つ家に遊女も寢たり萩と月　芭蕉

奥の細道で、とある宿に泊つて居ると其處に新潟の遊女が二人同じ宿に泊つて居て、「私達は伊勢參宮をしたいと思ひますが、淋しい旅で心細く思つて居ります、どうかご一緒にお連れ下さいませんか」と云つた。芭蕉は素より辭退したが其女達を哀れと覺えて作つた句である。芭蕉が泊つた同じ家に遊女も泊つた、その遊女と芭蕉は緣無きが如く有るが如き事、恰も萩と月の如し、と云ふ意味の句である。詩人芭蕉の心持が宜しく汲み取れる。

白露もこぼさぬ萩のうねりかな　芭蕉

萩の花に白露が置いて靜かに枝垂れて居る樣を巧みに敍した句であつて、白露もこぼさぬやうに萩の枝はうねつて居る、といふので、露もたわゝに、花もたわゝに附いて居る樣が想像される。

奈良にて

ひいと啼尻聲悲し夜の鹿　芭蕉

鹿の啼き聲を聞いて居ると、ひいと曳く尻聲がまことに悲し氣である。「悲し」といふのはありふれた言葉であるが、「ひいと啼く」といふ描寫の爲に其普通な言葉も力强く響いてをる。

名月や門にさし來る潮かしら　芭蕉

芭蕉は深川に居つたから、隅田川の水も潮のさし引きで增減することを充分に知つて居たゞらう。殊に隅田川の支流である芭蕉庵の前の川などは滿潮になるとその潮頭が下流から押寄せて來るところ等もよく見たであらう。名月が上るにつれて下流の方から潮頭が門前の方におしよせて來たといふのである。

敦賀にて

名月や北國日和定めなき　芭蕉

奥の細道もいよ〳〵末になつて越前の敦賀に來た時分に、八月十四日の月が大變美しかつた。あすの夜、即ち名月の夜も矢張りこの樣に晴れて居るであらうか、と云つたところが、宿の主人が、「越路の天氣は變り易いから明日はどうか判りません」と云つた。果して明月の晩は雨が降つて無月であつた。そこで亭主の言葉をそのまゝ借りて此句は出來たのである。

堅田既望

安々と出ていざよふ月の雲　芭蕉

堅田で十六夜の月を眺めた時の句であつて、出る時分には雲のさはりも無く大きな月が明かにする〳〵と登つた。が、やがて雲が出てその邊にたゆたうて居てなか〳〵其雲は退かない、といふのである。十六夜の月を、いざよひ、といふのは十五夜に比ぶれば少し遲れて出る月であるから躊躇すると云ふ意味からいざよふ、と云ふのであるが、此句は月が出て後に雲が懸つて容易に退かない意味に轉化して用ゐてある。

まつ茸や知らぬ木の葉のへばりつく　芭蕉

一本の松茸を描いた句であつて意味は解かずとも明瞭な句であるが、笠の上に著いて居る木の葉の中に一向に見知らぬ木の葉が有るといふ、纖細な處に氣を止めた句である。

菊の香や奈良には古き佛達　芭蕉

菊の匂ひといふものにはどことなく古雅な尊い感じが有るものである。奈良の都は古い都であつて、古い寺々が澤山殘つて居て其處には古い佛達が澤山にある。其古い佛達と菊の匂ひとを、芭蕉は頭の中で結びつけて、讃美の情懷をうたつたのである。

爐開や左官老いゆく鬢の霜　芭蕉

夏の間は爐を塞いで風爐を用ゐてをつた茶室に、冬の初めになつて風爐を撤して爐を開くやうになつた。爐開をする時分には左官を賴むのが例になつて居る。毎年爐開に其左官が來るのであるが、何時の間にかまだ若かつた左官も鬢に白髮のふえて居るのが目立たしくなつて、「あゝ、左官も年をとつたものだな」と云ふ感じがした。

金屏の松の古びや冬ごもり　芭蕉

冬籠りして居る人の後ろには金屏が立て廻してある、金屏といへば贅澤な物になつて居るのであるが、それに描かれて居る松の繪は古びて見える、素より其金屏も古びたものである。贅澤な一個の金屏を點出して居ながら尙ほ物古りた樣を描き出してをるところが、流石に芭蕉であると思ふ。

冬籠り又よりそはんこの柱　芭蕉

この句もまた芭蕉自身の境涯を詠じた句であつて、佗人芭蕉は他に家族が有るでもなく淋しく籠居し勝ちである。冬籠りして居る時分には殊に訪ふ人も無ければ訪はるゝ人も無い、唯、庵の柱により添ふのが毎日の日課である、する事も無い今日も亦この柱に倚り添はんか、といふのである。

住みつかぬ旅の心や置炬燵　芭蕉

旅人芭蕉の心持を詠つた句である。或る宿に泊ると寒いからといつて置炬燵をして呉れた。その宿には二三日は逗留するのであらうが、そこに定住するわけでないから何處となく心が落著かぬ無い。それが切り炬燵であるならばまた多少の落著きもあるであらうが、置炬燵であるが爲に一層慌しい旅らしい心持がするのである。芭蕉は其住みつかぬ旅の心を味はひつゝ淋しさに住するのが好きであつた。

尾頭の心許なき海鼠かな　去來

一塊の海鼠が轉がつて居るのを見て、さても海鼠といふものはどちらが頭であるか尻尾であるかと云ふことさへも分らない物である、誠に心許ない物である、と、をかし味を感じて述べたものである。

湖の水まさりけり五月雨　去來

五月雨が天地を覆した如く際限も無く降り續く、廣い近江の湖も水嵩が增した、と云ふことを

詠じた句である。

都にも住まじりけりすまひとり　去來

相撲取は人中に在つても體格の大きい爲に目に著く。又勝負に負がつゞくと忽ち陷落して老いぼれた哀れな力士となつて仕舞ふ。普通の人の職業に較べて派手やかな處も有るが、又哀れなところも有る。その相撲取はどこか格段な社會があつて其處に住つて居るものゝ如く思つて居たがさうでも無い、矢張り都人に交つて住つて居て群集の中でも折々は見かける事がある、といふ句である。

筑紫より歸りけるにひみと云ふ山にて卯七に別れて

君が手もまじるなるべし花芒　去來

去來は長崎の産であつて、長崎から陸路をとつて都へ歸つて來る時分に、ひみと云ふ峠迄その甥の卯七が見送つて來て其處で別れた時の句である。去來は卯七に別れてとぼ〳〵と獨り山路を

歩きつゝあつたが、振返つて見ると一面の花すゝきであつて、それが吹く風に靡いて居るのが見える許りであつた。先刻別れる時分に去來も卯七も互に手を擧げておーい〳〵と呼びかはし乍ら別れたのであつたが、ひよつとするとあの芒の中に卯七の手が交つて居はしないのか、といふ、別離、思慕の情を述べたのである。

中秋の夜猫子を葬送して

かゝる夜の月も見にけり野邊送　去來

名月の晩に自分の子と同樣に見なして居つたものが死んだので、それを葬送した。月を見ると云へば特に月見の宴でも催して愉快に月光を賞美するのであるが、今宵は自分は野邊送りをして悲しい憶ひを胸に抱いて居る一つの愁人である。又、かゝる夜の月も見ることである哉、と述懷したのである。

鉢叩來ぬ夜となれば朧なり　去來

時宗の坊さんが冬になると、鐵鉢に代へた瓢を竹の先に附けてそれを叩いて米錢を乞うて洛の内外を廻る事をする、それを鉢叩といふのである。其鉢叩がもう來なくなつたと思ふと月が朧になつて居る、といふのである。

篩こせ眞似ても見せん鉢叩　去來

芭蕉を落柿舍に泊めた時分に、鉢叩が來るのを一度は見度いものだといふ芭蕉の言葉に、「鉢叩は毎晩のやうによく來ます」と去來は無造作に返事をしたのであつたが、偖て待てども待てども其夜に限つて鉢叩は來なかつた、其時に出來た句であつて、其處に在る篩を持つて來い、その篩を鉢叩の鉢に代へて自分が眞似をして芭蕉翁のお目にかけよう、と云ふのである。去來の、其夜に限つて來ぬ鉢叩を待ち佗びて芭蕉に申譯無く思つて居る樣が出て居る。

鶏の聲も聞こゆる山櫻　凡兆

山路を分け入つて櫻をたづねる、餘程山深く分け入つたつもりであるが思はぬ方に鶏の聲がする、さては近くに人家が在るのかな、と氣が附いた、と云ふ櫻狩の一興を述べたものである。

花散るや伽藍の框（くわ）落しゆく　凡兆

「山寺の春の夕暮來て見れば」と云ふ歌の趣で、寺の庭にある櫻花が盛んに散る、夕暮れになつたので一人の雛僧がかたぴしと伽藍の扉を閉めてやがて框をコトンと落して行つた。最早人影も無く物音も無い寂しい山寺の春の夕暮れとなつてしまつた、といふのである。

越より飛驒へ行くとて、籠のわたりのあやうきところどころ、道もなき山路にさまよひて

鷲の巣の樟の枯枝に日は入ぬ　凡兆

越より飛驒へ行くとあるから險岨な山路であつて、籠に乘つて溪を渡ると云ふやうな危い所もあつたものと見える。其山路の一方に大きな樟の木が有る、その樟の木の枯れて居る枝の先に鷲が巣をつくつて居る、鷲の巣といふやうなものは素より斯かる深山でなければ見られぬ處の物で

ある、丁度その鷲の巣のある樟の枯枝の方に當つて日が落ちて居るところである。目の前に鷲の巣を見ると云ふやうな事は物凄い景色ではあるが、遲々たる春日が其處に沈みつゝあると云ふ光景は心ゆく許りの景色である。

渡りかけて藻の花のぞく流かな　凡兆

或る流れを渉りかけた、中流に出た時分にふと下を見ると藻の花が白く咲いて居るのが目に止つた、「あゝ藻の花が咲いて居る哀れに美しく咲いて居る」と覗き込んだと云ふ句である。すがすがしい感じが出てをる。

禪寺の松の落葉や神無月　凡兆

禪寺はよく掃除が行屆いて居るものである。神無月、即ち舊暦の十月に或る禪寺に這入つて見ると、一點の塵も止めぬ如く綺麗に掃かれた大地の上に、僅に松の落葉がして居る、と云ふのである。神は皆出雲に旅立つて仕舞はれたのであるが、禪寺はさういふ事に拘はらず一塵を留めず

住みなして居る樣を、僅に松の落葉を點出した事に依つて力强く描寫して居る。

三葉散りてあとは枯木や桐の苗　凡兆

桐の小さい苗木が有つて、その苗木の葉も亦一ト葉する秋になつた。然し三枚の葉が散つて了ふともうあとは枯木になつた、といふのであつて、苗木の桐一本が俳句の題材になつたといふ事は注目すべき事柄である。

上行くと下來る雲や秋の天　凡兆

晴澄な秋の空を見上げて見ると、今日は少し雲が有る、下の方の雲は此方へ來て居る、が上の方の雲は彼方へ行つて居るといふので、稍風立つた日を想像する。上層の雲は右に動き、下層の雲は左に動く、といふ現象は私達も時に見うける處であるが、斯くの如くはつきりと、秋天の圓蓋が活動的に描き出されて居るのは面白い。

下京や雪積む上の夜の雨　凡兆

下京と云へば京都でも繁華な土地であつて、店舗が相連つて殷賑を極めて居る、と云つても京のことである、浪速などと較べては物靜かであつて町も亦規則正しく出來て居る。その下京あたりの光景であるが、降り積つてゐる雪の上に或る夜は少し暖かであつて雨が降つた、といふことを云つたものである。

ながく〳〵と川一筋や雪の原　凡兆

一面に白皚々たる雪の原である、その中を一筋の川が延々として遠く流れてゐる、といふので大景を展望した句である。

肌寒し竹伐る山の薄紅葉　凡兆

或時私は二尊院から祇王寺に行くところの竹林の間の山路を通つてゐた時に道沿ひの藪の中でこつ〳〵と音がして居るのを聞いた。何事であらうかと其方を見ると一人の男が竹を伐つて居るものである事がわかつた。折節その邊の紅葉は薄紅葉をして居た。其時私は此句を思ひ出したのである。

浪花女や京を寒がる御忌詣　蕪村

御忌詣は正月の十九日から廿五日迄淨土宗の寺院で行はれる法然上人の忌日の法會である。現在は四月に行はれる事になつて居るけれども蕪村時代はもとより正月に行はれたものである。大阪の女の人がその御忌に參る爲に京へ出掛けて來た、京は大阪と違つて底冷えがして大變に寒い、その大阪の女の人は、「京といふところは寒い所やなア」と今更のやうに寒がつて居る、と云つたのである。

畑打や木の間の寺の鐘供養　蕪村

向うに見ゆる木の間の寺では鐘の供養があつて、最前からがーん〳〵と鐘も響き鳴るし、又參

詣人も絡繹と續いて賑かである。が、その賑かなのは遠景であつて、こなたは物靜かに百姓が畑を打つて居るのである。

離落

鶯のあちこちとするや小家がち　蕪村

籬がこひのつゞいて居るやうな淋しい小村を想像する。大きな家はなく小家ばかりである。鶯が飛びも去らずにあちらの庭こちらの庭と飛び移つて居る、といふのである。長閑な春日の小村の樣が想像される。

たらちねのつまゝでありや雛の鼻　蕪村

子供が生れて鼻が低いのをよく母親は鼻が高くなれ、と言つてつまむ、可愛ゆいあまりにそんな事もよくするのである。雛さまを見ると美しいお顏ではあるが鼻が低い、之は此お雛樣の幼かつた時分に其雛樣の親雛樣が鼻をつまゝなかつた故であらう、といつたのである。雛に情を移し

て言つたのである。

むくと起きて雉子追ふ犬や寶寺　蕪村

洛外の山崎に在る寶寺に行つた時分に觸目の光景を詠じたもので、其寶寺の境内に一羽の雉子が下りた、其所に寢て居た一疋の犬が其を認めてむくと起きて追はへて行つた、といふ句である。即景なる故に力强い。

味氣なや椿落ちうづむ潦　蕪村

水溜りに一ぱいに椿が落ちて居るのを見た時分に、蕪村の心に起つた詠嘆の情が、味氣なや、と云ふ言葉に依つて現されたものである。語原より稍轉化されて用ゐられてゐる。

菜の花や月は東に日は西に　蕪村

京近郊の春景を詠じた句である。地には一面に菜の花が咲きつゞいて居る、東の山の端には春の大きな月が描ける如く出て居つて、西の山の端には春の日が今春いて居るところであると云ふのである。これは萬葉に「東の野に陽炎の立つ見えてかへりみすれば月傾きぬ」といふ歌が既に有ると云ふ説があるが、そんな事はどうでもよい。

ゆく春や逡巡として遲櫻　蕪村

春も末になつてもう夏にならうと云ふ時分に、早い櫻はもうとつくに散つて了つたのであるが、遲い櫻は未だところ〴〵に殘つて居る。さうして山陰の遲櫻がやう〳〵散つたかと思ふと又八の櫻が開き初める、と云つた有樣を「逡巡として遲櫻」と云つたのである。暮春の情景が描かれてをる。

お手討の夫婦なりしを更衣　蕪村

お小姓と奥女中とが戀に陷ちて不義はお家の法度である、と忽ちお手討になる可き處であつたのを助けられて、夫婦になつて今は夏になれば更衣をすると云ふが如き平和な暮しをして居ると云ふのである。

夕立や草葉をつかむ群雀　蕪村

沛然と夕立がして來て、あらゆるものを地面に擲きつけるが如き勢である。一羽の雀は逃げ場を失つて賴りにならぬ草の葉を掴んで居るといふ句である。夕立の大きな力を詠じた句である。

五月雨や大河を前に家二軒　蕪村

五月雨が降り續いて刻々に水嵩が增す處の大河を前にして堤に唯二軒の家がある、といふ句であつて、其家に住つて居る人々にとつては格別心配でも無いのかも知れないが、他所目に見た目では刻々增して來る水に對して其家は、風前の灯火、と云ふ果敢ない感じがせぬでもない。さういつて居る中にも尙ほ水は增しつゝある、と云ふ自然の偉大な力がだん〳〵と迫りつゝある事を描いてをる。

おろし置く笈に地震る夏野かな　蕪村

山伏か何かゞ夏野を通りかゝつて木蔭に笈をおろして休んで居ると、その笈が少し揺らぐのを覺えた、と同時に軀にも震動を感じた、「あゝ地震だなァ」と感じた、といふ句である。夏の野の地震を笈を中心にして描き出した處がよい。

行き行きてこゝに行き行く夏野かな　蕪村

武藏野とか那須野とか云ふ野原を旅行する時のことを云つたもので夏草の生ひ茂つて居るところを暑さにあえぎ乍ら行くのであるが、行つても行つても盡きない夏野である、と云ふ事を云つたのである。

石工の飛火流るゝ清水かな　蕪村

石工が石を伐り出して居る、其鑿が石に當つて火が出る、その火が傍を流れてをる清水の中に落ち込んで其清水と共に流れるやうに見えると云ふのである。

二人して掬べば濁る清水かな　蕪村

清水が僅に湛へてをる。一人でむすぶのなら濁らずにむすべるであらうが、二人でむすべば濁るといふのである。斯る野中の清水もあるのである。

鮎くれて寄らで過ぎ行く夜半の門　蕪村

鮎釣りに行つた男が夜更けてもう寢て居る家の戸を叩いて鮎を少しやらうと云つて置いていつて吳れた。其吳れていつた人の樣子、又叩き起された家の人の樣子も想像される。

牡丹散つて打重なりぬ二三片　蕪村

牡丹の美しい大きな花瓣が二三片散つて重なつた、といふ句である。只、それだけの句であるが、牡丹の花の莊重な華麗な樣が描き出されて居る。

道のべの刈藻花咲く宵の雨　蕪村

道のほとりに藻が刈つて揚げてある。雨が降つたが爲に其刈つた藻に花が咲いた、といふのである。

丹波の加悅といふ所にて

夏河を越すうれしさよ手に草履　蕪村

加悅といふ所はどういふ所か知らないが、蕪村が其處を旅して居つた時分に前面に夏川が横たはつて居て橋が無い、見ると餘り水も深さうにないので其儘跣足になつて手に草履を持つてざぶさぶと河の中に這入つて行つた。手に草履を持つて無造作に夏川を渉るといふ事が嬉しく思はれた、といふ其時の即興を謠つたものである。

心太さかしまに銀河三千尺　蕪村

心太の心太つきに突かれて皿の中にこぼれ落ちる時のことを、「逆しまに銀河三千尺」と云ふ風に漢詩風に極端に形容して云つた處が此句の生命である、其が心太なるが故に。

白露や茨の刺に一つづゝ　蕪村

露を詠じた句であつて、茨の刺に一つづゝ露の玉が宿つて居る、と云つたのである。唯それだけの句であるが露を詠じて極めて力强い。

西吹けば東に溜る落葉かな　蕪村

落葉がから〳〵に枯れて轉がつて居る、東から風が吹くと西の塀際に溜る、西から風が吹くと東の木の下に轉がつて行く、と云ふ句である。如何に落葉を詠じて力有るかを見よ。

東風吹くと語りもぞ行く主と従者　太祇

主が従者を連れて何處か野道でも通つて居る。冷たいが春めいた風が吹いて來る、主が従者を顧みて、「もう東風だ」と言ふ、従者も愉快氣に「左様です、もう東風で御座います」といふ、そんな景色を云つたものである。

京へ來て息もつきあへず遲櫻　太祇

京へ上つて花見をするのであるが、もう櫻は稍ゝ遲れて遲櫻の最中である。休む間も無く西山北山の櫻と見て歩く、と云ふのである。

もの堅き老の化粧や更衣　太祇

もの堅い古風な媼がある。夏になつて更衣をするにつけてもちやんと身じまひをしてお白粉、紅を忘れずに老いの化粧をするといふのである。

夕立や膳最中の大書院　太祇

寺の大書院か或は大名の大書院か、其書院に澤山の客が居並んで、今膳最中である。そこへ暑かつた一日が暮れ間近くなつて俄かに一天が掻き曇つて夕立が降つて來た、皆が膳に就いて盃を取り上げた瞬間にこの夕立である。壯快な感じの句である。

江を渡る漁村の犬や蘆の角　太祇

大きな河がある、その河の畔には漁村が有る。其漁村の犬はその大きな河を平氣で泳ぎ渡つて居る、その岸には角芽立つた蘆の角が出て居る、と云ふ漁村遠望の畫圖を描いたものである。

あり佗びて酒の稽古や秋の暮　太祇

秋の夕暮れ物淋しくしようことなしに酒を飲む稽古を初めた、といふ句である。

葛水や浮かべる塵を爪彈き　几董

葛の白く溶けて居る水に一片の塵が浮んで居つた、其塵を爪彈きした、といふのである。爪彈きといつたので葛水に浮べる塵の存在がたしかになつた。

時雨るゝや南に低き雲の峯　几董

時雨がはら〳〵と降つて來たが、南の方は晴れてゐて、低い雲の峰に日が當つて居るといふ句である。夏ならば中天に伸び上る雲の峰も、冬のことであるから南の空に低く立つてをるのであつて、冬であるのに思ひがけぬ雲の峰の立つてをるといふのが、却つて物寂しい添景物となつてをる。

栗に飽いて蘭につく鼠捕へけり　召波

始めは庵に蓄へてある栗に鼠がついて居つたが、此頃はどうしたものか蘭の鉢に附くやうになつた。栗の時分はまだ我慢をして居つたが、蘭に附くやうになつてからもう堪へられなくなつてその鼠を捕へたと云ふ句である。蘭につく鼠は面白い。

冬籠五車の反古のあるじかな　召波

五車の反古といふのは、五つの車に積む程の反古の持主である、と云ふので、もと五車の書といふ言葉があるのを轉じて言つたのである。冬籠をして殆ど書齋に蟄居して書きものをして居る自分は何も取得は無いが、先づ五車の反古のあるじとも云ふべきものであると、謙遜したるうちにも、又矜持した心持もある。

これがまあつひの栖か雪五尺　一茶

一茶が諸國を放浪して故郷の信州柏原に歸つて來た。信州柏原は雪の多いところであつて軒を埋めて雪が降り積む、「さて〳〵茲を一生の栖と定めることであるのか、五尺も雪の降り積もる貧しい山村ではあるわい」といふ佗しい懐ひを述べた句である。

初芝居見て來て晴著未だ脱がず　子規

人に誘はれて女が珍らしく初芝居を見に行つた。華やかな一日の芝居見物、殊に初芝居と云へば曾我狂言などが出て一層華やかな感じのする芝居、其芝居を見て歸つた女は家人に芝居見物の晴著を著た儘で今日の芝居の有様を話して居る、まだ芝居に陶醉して居る心のときめきが納まりきらないもの丶如く、著替へもせずに其芝居の狀況を家人に話して居る、と云ふのである。細君の無かつた此作者の一家の事とすれば介抱にのみ沒頭して居た妹がたま〳〵一日許しを得て觀に行つた芝居の事であるから、いかにその一日の放樂が樂しいことであつたか、晴著を脱がずに暫く話して居ると云ふ事柄で其心持がよく現れてゐる。

赤飯の湯氣あた丶かに野の小店　子規

以前は田舍の茶店では馬子や行商人等が立寄つて赤飯をした丶めるのである。其所には赤飯が炊いてあつたり、燒豆腐が煮てあつたり、蛸のうでた足が吊してあつたりする、其店の有様を云つたものである。田園の小景である。

石手寺へまはれば春の日暮れたり　子規

子規の郷里松山から一里足らずの所に、四國遍路の參詣する札所の一つである石手寺はある。其石手寺の近くに道後の溫泉がある。恐らく此句は松山から道後の溫泉に入浴して、それから石手寺に廻つた時の句であらう。晝すぎから松山を出て、ぶら〳〵と野路を歩いて、道後の溫泉に一浴して、それから又ぶら〳〵と歩いて石手寺に廻つた。處が春の日ももう暮れて石手寺に著いた頃は近所の百姓家にもぽつ〳〵灯がともり始めた、と云ふ句である。子規の頃は電車も無く、自動車も無く、俥に乘るのは贅澤であると云ふので、大概の人は歩いて道後の溫泉に行き石手寺に參詣したものである。殊に日の暮れるといふことにも氣をとめず唯春日の興に任せてぶら〳〵と歩いて行つた心持が出て居る。

會の日や晴れて又降る春の雨　子規

何か會をして居る日に美しい春雨が晴れたかと思ふと、又降り出すといふのである。會衆も物靜かな人々であつて、晴れた時分はぽつ〳〵庭に出る者もあるが、降り出すといふと緣に上つた。

り座敷に坐つたりして居ることも想像される。

摺鉢に薄紫の蜆かな　子規

たゞ之だけの句であつて、摺鉢の中に薄紫の色をした蜆が有る、と云ふだけの句である。が、靜かなる臺所に其蜆の置かれてある事を中心にして、其厨の狀況、春の朝(あした)の長閑な狀況などにだんだんと擴がりを持つて來る。

山吹や人形乾くと筵子規

恐らく粗末な泥人形か何かゞ筵の上に澤山乾してあるのであらう。春もやゝ暮れ方になつて日の照りもかなり强くなつて來て居る。その一筵の人形はもう大方乾いたやうだ、其庭の一方には山吹が咲いて居る、といふので、泥人形を作る貧し氣な家の庭前の即景を描いたものである。

佛を話す土筆の袴剝きながら　子規

或る人が來て何か其人と佛に關した話をして居る、が家人が摘んで來た土筆の袴をとり乍ら話して居るのである。子規の面影が想像出來る。

正宗寺一宿を訪ふ

朝寒やたのもと響く内玄關　子規

正宗寺と云ふ松山にある寺に、其正宗寺の住職一宿を訪うた、といふのである。此正宗寺といふ寺は必ずしも大寺といふのではないが、松山にしてはかなりな寺である。朝寒の頃に其寺を訪ねて内玄關の方で松山の士の習で「賴もう」と案内をした。其聲が内に籠つてぼうつと響き渡つた、といふのである。寺の森閑とした内玄關の樣が想像せられる。子規歿後埋髮塔がこゝに建立された。――丁度この稿を認めた日、其正宗寺が燒けたといふ報を耳にした。其内玄關も烏有に歸したのである。

長き夜や障子の外をともし行く　子規

秋の夜長の頃子規は病床に靜かに横たはつて居る、根岸の夜は物靜かである、折節家人が手燭を持つて障子の外を向うに歩いて行つた、といふのである。唯、動くものは手燭の火のみであつて閲として聲の無い草庵の様が想像される。

或日夜にかけて俳句函の底を叩きて

三千の俳句を閲し柿二つ　子規

俳句函の底を叩く、といふのは子規の枕頭に備へつけてあつた俳句の投稿を入れる函から投稿を取出して悉く見終つた、といふのである。句數は三千も有つたらう、其三千の俳句を見終つて、やれ〳〵とがつかりして好きな柿を二つ喰べた、といふ句である。子規の病床に於ける起居は此一句によつて想像される。

隣からともしの映る芭蕉かな　子規

隣の灯の光が隣境の庭に突つ立つて居る芭蕉に映ると云ふのである。隣の人の生活が其火影に

暗示されてゐるやうな心持である。此隣の人といふのは陸羯南である。

市に得し草花植ゆる夜半かな　子規

子規は草花を愛好して居つた。家人が夜遅く縁日に行つて草花を買つて來た。子規はその草花をよろこんで直ぐ植ゑさした。妹は自ら鍬を取り、老母は灯火を縁からさし出して庭に植ゑる、もう餘程夜が更けて居るので四隣は閲として物音も無いといふのである。

のら猫の糞して居るや冬の庭　子規

子規の病室には硝子戸が嵌つてをつた、子規は病室から此硝子戸を透して庭を見ることをせめてもの慰めとして居つた。或る時ふと冬枯の庭を眺めて居ると野良猫が一疋這入つて來てまごまごして居つたが遂に其庭の眞中に糞をして去つたと云ふ句である。淋しい冬枯の根岸の庭の様が想像される。

病中

いくたびも雪の深さを尋ねけり　子規

病床に横たはつて居る子規の有様が想像される句であつて、今日は大變に雪が降る、病床に横たはつてゐながら幾度も雪の深さを聞いた、家人は始めは三寸も積つたと答へ、次にはもう五寸も積つた、と答へ、更に、もうかれこれ一尺も積つたらう、と答へる。其度に子規は雪の降り積む家に病んで寢て居る自分であると云ふ意識を繰返す、といふのである。

草庵

薪をわる妹一人冬籠　子規

子規には一人の妹があつた、それが薪水の勞をも取れば看護婦の代りもして居つた。子規は其妹一人をたよりとして病苦にあへいでゐた、妹は何でもした、薪をすら割つた。と云ふ此詩人の佗しい生活を描いた句である。

（昭和八年三月）

俳句は斯く解し斯く味ふ

俳諧の歴史といふものは嚴密に云へば殆ど未だ調べがついてゐないと云うてよい。芭蕉とか蕪村とか云ふ主な二三の俳人に就いては相當の研究をした人もあるけれども、俳句全體の歴史を文學史的に研究した人は未だ一人もないと云つて差支ないのである。而して世間で普通に説いてゐる俳諧史は極めて簡略な極まりきつた説話に過ぎん。今一層大膽に引つくるめて言へば、德川初期から明治大正の今日に至るまで、多少の盛衰もあり多少の變化もあるにした處で、要するに俳句は即ち芭蕉の文學であると云つて差支ない事と考へる。即ち松尾芭蕉なる者が出て、從來の俳句に一革命を企てた以來二百餘年に渉る今日まで、數限りなく輩出する處の多くの俳人は、大概芭蕉のやつた仕事を祖述してゐるに過ぎん。そこで今俳句を解釋するに當つても、元祿の俳句はかういふ風に解釋せねばならぬが、天明の俳句は其と全く違うてかういふ風に解釋しなければならぬとか、明治大正の俳句はかういふ風に解釋しなければならぬといふやうな、そんな複雜した變化のあるものではなくつて、若干の俳句を拔き出して來て、一應それを解釋する事が出來るやうになつた以上は、大概の俳句はそれに準じ

て左程困難を感ぜずに解釋の出來るものである。唯その中に讀み込まれてゐる材料の解釋が六ヶ敷いが爲に、解釋が出來ぬといふやうな場合は論外であるが、俳句なる或る特別の一つの詩形を解釋するだけの事は、若干句の解釋によつて容易く領得せらるる事と考へる。そこで私は殆ど時代なんかに頓著なしに數十句の解釋を試みて、諸君の俳句に對する解釋力といふやうなものを養ふといふ事にしようと思ふ。

な折りそと折りてくれけり園の梅　太祇

春先きになつて、或る人の庭に梅の花の咲いてゐるのを見て、彼處にいゝ梅の花が咲いてゐる、あの枝が一本欲しいものだと思うて、それをその家の人に斷りもしないで折らうとしてゐると、意外にもそこにその家の主人が居て、その梅を折つてはいけない、と叱りながらも、そんなに欲しいのならば上げようと云つて、かへつて其主人が手づから梅の枝を折つて其人に呉れたと云ふのである。同じ物を盗むのでありながらも、所謂風流泥坊で、その盗む者が花卉の中でも殊に清高な姿をして芳香を持つた梅の花である事が、一種の面白味を持つてゐる。又其梅を折る人も物を盗むは惡い事と知りながらそれを金に代へようと云ふわけでもなく、多寡が梅の花の一枝位だ

から折つてやれと、竊かに折り取らうとして居ると、思ひ懸けなくも其處に主人の聲がして梅の花を折つてはいかんと尤められたので、吃驚して手を止めたのであるが、其處の主人も又、それを尤めたばかりで無下に追ひ拂ふのも、それを折る人の心持を十分に解釋することの出來ぬものとして、何處かに自分自身不滿足を感ずるので、そんなに默つて折るのはいけないが、欲しいのなら上げようと云つて、かへつて手づからその枝を無造作に折つてその男にやつたのである。斯くして其盗まうとした人も、それを尤めた人も、梅花そのものを通じて互に其心持を領解し合ふところに、この小葛藤の大團圓はあるのである。

親雞のひよこ遊ばす葵かな　成美

庭先に葵がついゝと立つてゐて、其青い葉の頂きの方に赤い花が咲いて居る。夏といつても未ださう無暗に暑くならない頃で、寧ろすがゝしい心よさを感ずる位の時候であつて、その葵の近所には赤い雞冠を持つてゐる親雞が、黄を帶びた小さなひよこを連れて餌を探しながら歩いてゐる。葵の幹の曲りくねつたところもなしについゝ立つてゐる形や、强味のある葉や、堅いやうな花やが初夏の心持にふさはしいと同じやうに、雛を孵して間もない親雞が滿足氣にその雛

を引き連れて歩いてゐる様子からその親雞の大きく丸い形や雛どもの小さく丸い形やまでが、やはり初夏らしい心持を持つてゐる。其上色の配合の點からも葵の葉の青いのに、花は赤く、親雞の雞冠は一層赤く、雛は黄いといふところに餘り色の混雜がなくなつて而も色彩の配合の面白味がある。それが又初夏の心持を十分に好く現してゐる。今一層はつきりした印象を描き出して見るならば、その葵も親雞も雛もそれ〴〵くつきりとした影を地上に落してゐるやうな心持もする。この種類の句は繪畫と同じやうな力をもつて人に迫るのである。

新蕎麥や長田が宵の馳走ぶり　合瓜

この長田は長田の莊司の事で、例の源の義朝を泊めて置きながら此れを暗殺して平家の方に黨した等の事蹟に基いて作つたもので、長田が義朝を家に泊めて置いたのは節季から正月にかけての事であつたのだから、それにすると新蕎麥といふのは事實に合はぬけれども、俳句には往々にして事實には頓著なしに趣の方から趣向を立てる事が多いからこの句もやはりその一例と見るべきものである。愈〻今夜か明日は義朝をたばかつて弑してやらうといふ前の晩に、折節出來た新しい蕎麥粉を打つて、新蕎麥が出來たから一つ召上らぬかと他意もなげにそれを勸めて、心から

義朝を款待するやうに見せかけたと云ふのである。なまじひ際立つた御馳走などをしては、どうもいつもと違うた御馳走を今夜に限つてするのは、少し變だなと萬事に警戒して居る落武者の事であるから、忽ち氣取らぬこともないとは云へんのであるが、同じ馳走をするのにも、新蕎麥を打つたからというて蕎麥を勸めるといふ事は無造作であつて、而も親しみのある馳走ぶりであつて、それで酒でも勸めて義朝に油斷をさすとしては、如何にも事實ありさうに思はれる事柄である。季節に頓著なしに感じの上から、新蕎麥を持つて來たところが詠史の句としては取得である。俳句の詠史は漢詩や和歌など〻違うて其事柄を優美にしたり、莊重にしたりすることはしないで、寧ろ其事柄と反對に卑近な物を持つて來たり、滑稽な物を持つて來たりして頓挫を與へるものが多い。この句などもその一例で、長田忠宗が源の義朝を弑したといふやうな事柄は歴史の中でも悲壯な事柄であつて、若しこれを漢詩にでもすれば堂々たる文字で、英雄の末路を弔するのであるが、それが俳句になると極めて卑近な新蕎麥といふやうなものを持つて來て、長田が義朝を弑す前の晩には新蕎麥を御馳走して一杯飲ましたのださうだ、はあ〳〵、成程新蕎麥で一杯やつたのか、など〻話すとすると、その悲壯な事實に頓挫を與へて其處に一種の輕味が生ずるやうになつて來る。これが即ち俳諧趣味ともいふべきものであつて、俳句の詠史は多くさういふ風になるのである。

易水にねぶか流るゝ寒さかな　蕪村

詠史の句の話をした序に、今一句この句の解釋を試みて見よう。唐詩選五言絶句の第三句目に易水送別といふ題で、駱賓王の、此地別燕丹。壯士髮衝冠。昔時人已沒。今日水猶寒。とあるのは人口に膾炙した詩句で、秦始皇を弑さうとして壯士荊軻が、燕の太子の丹に易水のほとりで分れた事蹟を咏じたのである。此事蹟を簡單に說明すると、戰國時代に燕の太子の丹といふのが、秦の國に人質として行つてゐたのを始皇帝が虐待した、それを憤つて丹は燕の國へ逃げ歸り、何とかして其恨を報じようと思つてゐた矢先、秦の將軍の樊於期といふのが罪があつたのを逃れて燕の國へ來た。其處で其樊於期の首を討つて、其首と燕の國の地圖とを持つて、其を始皇帝に献上すると見せかけて、暗殺しようとしたのが燕の國の壯士の荊軻であつた。これは丹の依囑を重しとして、荊軻はもとより一命を棄てる積りで出掛けたのであつたが、不幸にして見現されて殺されてしまつた。その愈〻秦の國へ入り込まうとする時易水といふ川で丹と別れた。其遺跡として易水を唐の駱賓王が弔うた時に、此詩は出來たのである。蕪村はよく唐詩を換骨脫胎して句を作つてをる。此句も恐らく此詩から思ひついたものであらう。蕪村は實際支那へ旅行したことは無いので、易水の景色を知つてをるわけは無いが、日本內地などで見る景色から想像すると、恐

らく其易水といふ川もたゞの川で根深などが流れてゐるであらう。風蕭々兮易水寒とか今日水尙寒とかいふと格別な景色かとも思はれるが、恐らくさうでは無からう。川上には根深を洗ふ百姓などが澤山ゐて、其洗つた根深の葉片が薄濁りのした水の中に青い色を見せて流れてゐるのであらうといふのである。蕪村の想像からいへば「あらう」であるのだが、其を實際其景色を見たやうに「ある」としてをる處が此句に力を與へてをるのである。想像も斷定も其人の心の內の現象として見れば畢竟同じ事である。蕪村などは好んでこの斷定の形式を取つてをる。即ち此句の如きも前の長田の新蕎麥と同じ事で、漢詩などでは「風蕭々兮」と言つたり、「壯士髮衝冠」とか言つたりして、ものを仰山に言つて易水の寒さを咏じてをるところを、俳句であつては極めて卑近に「根深の流れる」といふ事を以て輕く其を敍してをる。前に漢詩を控へた上で之を見ると矢張り一種の頓挫があつて、輕い滑稽味を覺える。其處が即ち俳諧趣味である。

同じく滑稽味と言つたところで、是等はげた〳〵笑ふやうな滑稽では無くて底には淋し味も含んだ品のいゝ滑稽である。ユーモアと云ふやうな部類に屬するものである。ところが俳句の滑稽もずつと以前になると、大分趣を異にした駄洒落に類するものがある。序に其一句を擧げて見ようならば、

かぜ寒し破れ障子の神無月　宗鑑

此頃は大分風が寒くなつて來た。その寒い風が吹くにつけ自分の住居の破れ障子が今更のやうに目について佗びしく、それから吹込む風も寒い、のみならず世上は八百萬の神々が出雲の大社へ旅立をせられて、いづれの社もその御留守の即ち神無月であると思ふと一層の寂しさを覺える、と云ふこれだけのものとすれば、「神無月の破れ障子に風が寒い」といふ普通の敍事に過ぎないのであるが、此句で注意すべきことは「障子の神無月」と連ねられた文字の使ひ具合でこれは「障子の紙」といふ掛言葉になつてゐるのである。此作者宗鑑といふ人は今から凡そ三百年餘りも前の時代の人で、其時代はこの掛言葉が流行して、其掛言葉の上手下手が驚て俳句の上手下手と見做されたのであつて、自然其掛言葉から來る滑稽趣味、地口ともいふべき一種の駄洒落が句の生命を爲してゐたのであつた。其を改革して文學的生命あるものとしたのが前言つた松尾芭蕉で、其以來斯る流行は廢れたが、尙ほ時に其種の句も存在しないではなかつた。其一例を言へば、

愚痴無智の甘酒作る松ケ岡　蕪村

此句は鎌倉の松ケ岡即ち今は宗演老師のゐる東慶寺のことを言うたのであるが、この松ケ岡（地名）の東慶寺といふ寺は北條時宗の細君が開山の尼寺で、今でいふ女權保護の爲に建てた寺で、この寺に一歩でも足を踏み込んだ女にはもう法律の權威が及ば無い、尼の許しを得なければ將軍であらうが大名であらうが、其女をどうすることも出來無いのであつた。それは北條時代から此御維新前まで續いて來たのであつて、自然此寺には澤山の女が庇護されてもゐたし、又其女の望みによつては末寺の坊に落飾して住まつてゐた女も澤山あつた。さういふ處から女は元來愚痴でかためた無智なものであるが、其愚痴無智の尼が退屈の餘りに甘酒を作るといふのである。普通の家庭でも女等が集まると、お鮓をつけるとか牡丹餅をつくるとかする、其と同じやうな譯で、尼どもが集まつて甘酒をつくるといふのである。この句の「尼」と甘酒の「甘」とが掛言葉になつて、其がこの句の主な趣向になつてをる。易水の句などに比べると同じ蕪村の句でも下等な句である。

郭公大竹原を漏る月夜　芭蕉

此句を見るとすぐ京都の嵯峨の修竹林などを思ひ出す。大竹原といふのは大竹藪といふのも同

じ事であらう。廣々とした藪であつて、而も其竹も小さい竹では無く大きな幹をした竹でありさうに思はれる。其大竹原の上には夏の月がかゝつてゐて、其月影は其粗い大竹原の間を洩つてちらちらと其大きな竹の幹などにも落ちて居る、其處に郭公が一聲二聲鳴き過ぎた、と斯ういふ景色である。初夏の清涼な心持が句に漲つてをる。斯ういふ句を解する時分に、時鳥の大竹原を漏る、といふ風に解する人があるかも知れん。其は俳句の句法に慣れない爲である。郭公で一度切つて、郭公（鳴くや）、大竹原を漏る月夜、といふ風に讀めばいゝのである。其「鳴くや」とか「鳴き過ぐや」とかいふやうな動詞の省略されるといふ事は俳句には普通の文法である。郭公は耳に聞いた聲、大竹原を漏る月夜は眼に見た景色、兩者相俟つて大景を描き出してゐるのである。

はら〳〵と稻妻かゝる芭蕉かな　樗堂

芭蕉は人も知つてゐるやうに、人間でいへば僧などを聯想するやうな飾りつ氣の無い青一色の、大きな葉をしてをる、而かも長大な植物である。其芭蕉の廣葉に稻妻のする秋の夜の景色を言つたのである。芭蕉の葉の上に稻妻が落ちると言つた許りでは、唯事柄の筋道を言つたゞけであるが、其に「はら〳〵と」といふ形容を加へた爲に一篇の詩となつてるのである。即ちあの芭蕉の

廣葉に稻妻のぱつとかゝつた時の心持をはら〳〵と言つたのである。どうも稻妻のするやうな晩であるから空は曇つてをる。今迄は其芭蕉も唯黑い團りにのみ見えてゐたのが、其闇を破つてぱつと稻妻が光ると、唯黑い團りと見えてゐた芭蕉は、さうでは無くつて、長い葉を何枚と無く大空に突出してゐて、其ははた〳〵と風に搖れてをる。稻妻のかゝると同時に其青い色も長大な形も葉搖れも見える。同時に其葉の上に受けた稻妻をはら〳〵と目に映じたのである。唯靜まり返つた水の上とか、硬い石の上とか、突立つた杉の木の幹とかにかゝつた稻妻であつたならば、決してこのはら〳〵といふ心持はしない。其が芭蕉葉の上であつたことによつて初めてはら〳〵といふ心持が生れて來たのである。

旅人や馬から落す草の餅子　規

此句などは解釋を待たないかも知れぬが、念の爲に一二言を費して置く。一人の旅人は馬に乘つた儘或宿場の茶店の前に在つて、其茶店で賣つてゐる草の餅を買つて其を馬上ながら頬張りつつあつた時、ふとしたはずみに其草餅を取り落としたといふのである。或は宿場は已に出離れて、今茶店で買つた草の餅を馬上で食ひながら悠々と打たせてゐると、どうかした拍子に其草餅を取

り落とした光景かも知れないのである。しかし其はどちらでも此句の價値の上には損益するところは無い。要は馬上で草餅を食つてゐて其を取り落としたといふ其滑稽味と、暢氣な旅情とに興味を持ちさへすればいゝのである。

蜂の子の蜂になること遲きかな　子規

この句も意味は明瞭であらう。蜂の巣の中に在る蜂の子が蜂になるのにはなかなか時間がかゝつて容易にはならぬ、といふだけであるが、こゝに注意すべきことは、さういふ表面の意味だけを辿つたのでは、句が殺風景になつてしまふことである。此句の表面の意味は其だけであるけれども、裏面に作者の或意味のあることを認めなければならん。其は何かといふと、蜂の巣に初めて一寸頭の黑い針の尖で突いた程の小さい子が出來てから、其がだん〳〵大きくなつて、遂に羽根が生え、本當の蜂になつて飛ぶやうになる迄、此作者は常に親しく其蜂の巣を眺めてゐたのである。人間の子では無くつて蜂の子であるから、何も成人を待つ、といふ程の熱心な待ちやうでは無くつても、矢張り一つのなつかしみを以て、いつこれが蜂になることかと明暮れ眺めくらしてゐたのであつたが、心待ちに待つてをればをる程、なか〳〵容易に蜂にはならない。何十日も

經つて漸く蜂になつた、といふのである。實際蜂の巣にさういふ親しみを以て接したことのあるもので無いと、「なに蜂の子が蜂になるのか。そりやすぐだらう」と譯も無く言つてしまふのである。なんでも無い句のやうであるけれども、此句が出來た裏面には、さういふ作者の忠實な觀察があることを忘れてはいかん。

逢ひ見しは女の賊や朧月　太祇

朧にかすんだ春の月の出てをる晩、表を歩いてをると、ふと美目のよい一人の女が目についた。美人だと思ひながら、それ程たいして氣にとめるでも無くすれ違つたのであつたが、懷を探つて見ると財布が無くなつてゐる。扨ては今の女が賊であつたのかと驚いたといふ句である。逢ひ見しはといふのは、ふと行き逢つて何となくこちらが眼にとめて見た、あの女が賊であつたといふのである。或は自分が掏られたのでは無くつて、あの一寸目にとまつた女が、後に掏摸であつたことが判つて、あの女が掏摸であつたのかといふやうに解しても差支無いのであるが、しかし矢張り前解のやうに自分が掏られたと解する方が作者の意を十分に酌み得たものかと思ふ。澤村源之助の舞臺などを思はせるやうな句である。

今はやる俗の木魚や朧月　太祇

元來木魚は佛前に置かれて僧の手によつて取扱はれるべき性質のものであるが、俗間の好事家は、其を居間などに置いて唯ボコ〳〵と打つて喜んだり、或は人を呼ぶ時の呼鈴の代りにしたりしてをる。あの妙な形をした佛臭い木魚を脂粉の氣の漂つてゐる邊に用ゐてゐるといふ處に、却つて一種のをかしみがある。此頃は何かといふと木魚を用ゐるのであるが、又此處にも其ボコボコ云ふ音がしてをる。空には朧月が出てゐて艶な光を漂はしてをるといふのである。此作者太祇は京の島原に住まつてゐたといふのであるから、或は其邊の光景かとも想像されるのである。俗の木魚といふだけでは、或は俗人で佛信心のものが持佛の前で木魚を叩いてゐるものとも解されぬことは無いが、「今流行る」といふやうな言葉から推すと、もつと極端に木魚を單に好事的に弄ぶものと解するのが至當であらうと思ふ。今でも座右に木魚を置いて、其を叩いて婢僕を呼ぶやうなことをしてゐる人が隨分あると思ふ。

たらちねの抓さであり や雛の鼻　蕪村

雛のちよびつと持ち上つたやうになつてゐる小さい低い鼻を見た時に、興じて作つた句である。赤ん坊を抱いてをる母親は、摘まむと子の鼻が高くなると言つて、よく戯れ半分に摘まんだりする、この雛の鼻の低いのも、此雛のお母さんが摘まむことを忘れたが爲であつたのかといふのである。雛の鼻の低いのは、雛を作つた人が低く作つたのであつて、其無生の木偶にお母さんのあるわけも無いのであるが、斯く其を人間の如く見ていふ所に、雛に對する親しみと、打ち興じた興味があるのである。これ等は殊に作者の主觀の働きで、客觀の事實は唯雛の鼻の低いといふに過ぎ無いのを曲折をつけて斯く一篇の詩としたのである。尙ほこの雛も、近來鼻の小高く出來てゐるのなどを見ると感じが薄いが、能の面などに近いやうな古い時代の雛を思ひ出すと殊に興味が深いのである。作者も百年前の人である。

雛の宴五十の内侍醉はれけり　召波

これは大内などで催された雛の宴で、いつもは嚴肅な宮中も、今日は雛祭りとて皆うちくつろいで笑ひさゞめいてをる。その中に五十餘りの内侍がいたく白酒に醉はれて、その醉態が殊に其日の興味になつて皆の眼にとまつた、といふのである。宮中といつても局などで催される宴かと

も想像されるのである。五十にもなつた内侍の醉態は餘りいゝ圖で無いかも知れ無い、けれども其背景は美しく飾られた雛壇、いくら年を取つたといつても官女の事であるから、粉黛をも施し例の袴なども穿いてをる、下々のものが取亂したやうな醜態では無いに相違無い。其上もう五十といへば色氣などはなくなつて、唯をかしみ一方の醉態であらうと思ふ。

春の夜や晝雉子うちし氣の弱り　太祇

之は獵に行つて晝間雉子を打つた。鳥の獵のうちでは、小鳥などよりも山鳥、山鳥よりも雉子といつたやうな順序で、雉子は一番に功名とすべき鳥である。あの美しい毛色をした長い尾の見事な雉子を晝間打つた、其張り詰めた晝間の反動で、夜は氣が抜けてがつかりしてをる、といふのである。多寡が小鳥位なら何でも無いと格別嬉しさが大きく無い代りに、夜になつたところで別に氣分に違ひも無いのであるが、晝間の喜びが大きかつたゞけ夜はがつかりするのである。其上前に言つたやうに、大きい美しい鳥を殺したのだといふ事が、美しい春の夜らしい心持はしながらも、何處となく落寞の感じがある、其處にも氣の弱りを導く一つの原因はあるのである。次の句と併せ考へれば、其處の消息はよく判るのである。

牡丹伐つて氣の衰へしタかな　蕪村

牡丹が大きな花を咲かせてをる。其牡丹を伐らうといふ考へがあり乍らも、あの花の王といはれてをる見事な牡丹を伐るといふ事は、どうもさう輕々にやることが出來無いやうな心持がして、まあ〳〵と一寸延しにして居たが、いつまで擲つて置くわけにも行かないので、遂に決心して其を伐つた。そのあとはがつかりして、殊に夕になつて其氣の衰へを感ずることが大きいといふのである。前句は動物、此句は植物の相違はあるけれども、鳥の中の雉子と、花の中の牡丹はよく似寄つたもの、其を打つたり伐つたりした爲に、がつかりして氣を弱らす心持は似通つてをる。

野馬に子供遊ばす狐かな　凡兆

春の日の當つてをる時に土地とか石とか草とかの上に、ゆら〳〵と搖くところの或氣を感ずる。水蒸氣の作用か、其とも單に光線の作用か、いづれにしても春の日影のうらゝかな中に立騰ぼる氣のやうな感じがするのである。和歌で絲遊といふのもこれである。陽炎といふ字を用ゐるものもこれである。扨その陽炎の立つてゐる草原とか堤とかいふやうなところに、一匹の老狐は子狐

を連れて遊んでをる。子狐が無邪氣に遊んでゐるのを、老狐は樂しげに見てをるといふやうな光景である。狐は化けるものであるとか靈のあるものであるとかいふ聯想から、其草に立つてをる陽炎が恰もその靈氣と相應じてゆらめいてゐるやうな心持もするのである。一方に春の麗かさを覺えると同時に、何處か靈氣を感ずるやうなところが陽炎に調和するのである。狐の身になつて見ると、こゝは化けるとか何とかいふ表舞臺では無くつて、人間などに氣兼ねなく單純に子供を遊ばしてをる心持であらう。この子供を人間の子供と解されぬことも無いけれども、其では餘り芝居染みて來る。矢張り狐の子とする方が穩當であらう。

肌寒し竹伐山の薄紅葉　凡兆

秋になつて、もう肌にうすら寒い寒さを感ずるやうになつた。其頃の或光景を言つたので、山には一面に竹が生えてをる、其山の竹を此頃人夫が這入つて伐つてをる、青々とした其竹藪の向うに紅葉する木があつて其がもう時候を知り顔に薄紅葉してをる、といふのである。此句の如きは、或は竹山では無くつて、竹も生えてをれば松もあり紅葉する樹もあるといふやうな山に作者が竹を伐りに行つて、竹を伐りながらも薄紅葉する樹を見たといふ風にも解されぬことは無いの

であるが、併し「竹伐山」といふ言葉から推しても、全體の調子のはつきりした印象を人に與へる點から言つても、青々とした竹山は折節彼處にも此處にも人夫が這入つて竹を伐つてをる、その向うの更に高みになつてゐる岨に薄紅葉のしてをる樹のあるのが、其竹山に打ち映えて見える。竹を伐るといふこと、薄紅葉といふ事につけても、時候の肌寒を身に覺えるといふ風に解する方が適切かと考へるのである。俳句は言葉が單純な爲に斯の如き兩樣の解、時としては三樣四樣の解を試むることも出來るのである。此句の如きは兩樣の解いづれに從ふとしても其趣味の上には變化は無いのである。

三葉散りて跡はかれ木や桐の苗　凡兆

桐の苗木を描いたもので、其苗木には三枚だけ葉が附いてゐたが、その三枚の葉が散つてしまつた跡はもう枯木になつてしまつた、といふのである。俳句の方では落葉した木を枯木といふ、で落葉した冬木の別名と見てもいゝのである。實際枯れてしまつた朽木の意味ではないのである。これは極めて簡單に桐の苗木其ものゝ特質を描いたところが却つて力ある句になつてゐる。桐の葉は人も知る如く大きな粗い葉で、其が桐の幹に疎らについてをるのであるが、其葉の落ち

るときはぼく〳〵ともろく落ちやすい。其僅か三枚の葉が落ちてしまつたあとは眞直ぐに突立つてゐる幹許りになつてしまつて、おや〳〵もう枯木になつてしまつた、と驚かれるのである。

家主の無殘に伐りし柳かな　子規

借家の庭に柳があつた。其柳が枝を延ばし葉を茂らしてゐたのを、借家人は餘り延びた儘になつてゐるとか、葉が茂つて鬱陶しいとか、いろ〳〵に感じてゐたのであつたが、其でも亦一方からは、毎日住み慣れ見慣れた庭の柳であるから親しみもなつかしみもあつたのであるが、或日家主から植木屋を寄越して庭の植木の手入をすると言つて、其柳を何の容赦も無く滅茶苦茶に枝下しをしてしまつたといふのである。或は伐りしといふ以上は根方から其柳を伐つてしまつたものかとも解釋が出來るのであるが、併し「無殘に」といふ言葉から推すと、まだ其柳は全生命を取られたのでは無くつて、敗殘の形を其處に留めてゐるものと見る方がよからうと思ふ。即ち伐といふのは枝を伐つたので亂暴にも其枝も伐り此枝も伐りいかにも無殘に伐り下してしまうたといふのであらうと思ふ。生みの親よりも里親の方が情けがあるといふのと同じ事で、借家人は自分の持物といふでは無くつても、朝暮馴染んでゐた柳の木の事であれば、伐るにしても、もつと伐

りやうがあると思ふのであるが、家主の方に却つて其情けが無くつて、他の木と違つて柳の事であれば、どんなに伐つたところで枯れる憂は無いから、度々手數のかゝらぬやうに思ひ切つて伐つて置いた方がよからうと隨分思ひ切つて伐り下ろしたといふのである。植木屋を寄越したのでは無くつて或は家主自身で遣つたものとしてもよいのである。いづれにしても感じは同じことである。

木々の芽や新宅の庭とゝのはず　子規

春になつて庭に在るいろ〳〵の木がそれ〴〵芽を吹いた。この家は建築して間も無い新宅の事とて、其庭もまだ十分に手入が出來てをらず、いろ〳〵の木が其々思ひ〳〵に芽を吹いて、左なきだに餘り整つてゐない庭が益々整はぬ形を示したといふのである。古い庭であつて見ると、多年刈り込まれたり手入をされたりした庭である爲に、たとひ木の芽が吹いたにしても、さう「庭整はず」といふ程の不恰好さは示さないのであるけれども、まだろく〳〵庭師を入れたといふでも無く、手當り次第に雜木を植ゑたといふに過ぎ無い庭であるから、枯木の間は左までになかつたものも、芽を吹いて見ると、いよ〳〵其不恰好さが目に立つやうになつたといふのである。

水仙にたまる師走の埃かな　凡董

師走となると何かと多忙である。商人はもとよりの事、普通の家であつても、おしつまつて來る程に匆忙として日は暮れる、床の間に生けてある水仙――若くは鉢に植ゑてある水仙――も、其多忙の爲に餘り顧みる人が無くつて、いつの間にか埃が葉にたまつてゐるといふのである。花を生けるといふのも、水仙の鉢を置いて其を見て樂しむといふのも畢竟閑があつての上の事で、多忙となるとなか〳〵さういふ悠長なことに時間をつぶしてゐる隙が無い、けれども埃はさういふ人の匆忙に頓著無くいつでも物の上に降りる。其が水仙の花の上に降りたところに師走の急がしさが思はれるのである。水仙の鉢でも花生けでもどちらでもいゝと言つたが、普通ならば夙くにもう花も變へて生けかへるべきものを、いつ迄も水仙を生けた儘で擲つて置いてあつたものとすると、水仙の鉢とするよりも花生けとする方がより多く適切な樣に考へられるのである。

除夜

年ひとつ老いゆく宵の化粧かな　凡董

大三十日の晩の句で、今宵寢れば又一つ年を取るといふ其宵に化粧をする女を咏じたものである。察するところ此女はもうそろ〳〵老といふ事を氣にしはじめる三十代の女を言つたものであらう。十代の子供々々した女ではもとより無く、二十代の若々しさでも無く、三十代になつて女としてはそろ〳〵もう老境に入りかけたといふやうな女が、大三十日の晩に宵化粧をする、其女の、目出度い元日を待ちながらも、又一歳年を取るといふ淋しい心持を言つたのである。老いそめた女の化粧は尙ほ一點の美しさを留めながらも、化粧をするといふ事其事が軈て一つの淋しさを思はしめる。此句も其心持を言つてをるのである。

たのみなき若草生ふる冬田かな　太祇

若草といへば、これから先きだん〳〵茂つて春の草になつて行くものであるが、其がまだ冬田にちよい〳〵と生ひそめたところを見ると、其若草はいつまで茂るべき未來があるかを疑はねばならぬのである。冬田は、秋稻を刈つた後ちに其儘打ち棄てられて顧みられ無いものであるが、其處へ生える若草は他の地面に生えるものに比べると、まことに賴み少ない心持がする。其冬田に生えた若草を見た時の作者の心持を言つたのが此句である。或は十月に返り花が咲くやうにま

だ冬の初めの田の面に、日當りのいゝ處などに、若草が生えてをるが、これはやがて來る寒さや、雪や霜やに忽ちいためられて枯れてしまはねばならぬものである、其處に生える若草は頼み無いものである、といふ風に解釋されぬことも無いのであるが、併し矢張り前解の方が適切であらうと思ふ。

鼠追ふや椿生けたる枕上　田福

夜鼠が出て來て枕もとをごそつかすので、寢てゐながらしつ〳〵と其れを追うた、其枕もとには椿が生けてあるのだといふのである。鼠が出る位であるから恐らく灯火は消されてしまつてあるので、全くの闇夜であらう。目には文なしで、唯枕もとに荒るゝ鼠の音が聞える許りであるが、その闇中にも自ら目に描き出さるゝものは晝間生けて置いた、あの美しい椿の花である、とさういふのである。鼠が出てあばれるやうな殺風景な闇の中に一點の椿を點出して來て色彩を添へたところが此句の價値である。鼠が椿の花をひつくりかへすであらうから其爲に追うたのだとか、何とかいふやうな解を試むる人があつたら、其は無用の辯といはねばならぬ。枕上は「まくらがみ」とよむか、或は「まくらもと」と讀むか、いづれでもよからうと思ふ。

あながちにくれなゐならぬ紅葉かな　橘仙

紅葉は紅いといつたところで、穴勝に紅許りでは無いといふ其だけの句である。穴勝といふやうな俗語を使つて「くれなゐならぬ」といふやうな雅語を繼ぎ合はせたところに此句の手際はあるのである。紅葉と一概に言ふけれども黄色もあれば、同じく紅いなかにもいろ〳〵濃淡がある、其さま〴〵の色を織り交ぜた美しさを想像せしめるところも亦一方の働きとせねばならぬ。

古寺に狂言會や九月盡　雁宕

狂言會といふやうなことは今でもある。狂言は大概能の間に挿んでやるものであるが、時によると狂言許りを催ほすことがある、それを狂言會といふのである。あゝいふ滑稽を主とするものであるけれども、もと品格のいゝものである上に、其狂言のみが續けて演ぜられるといふ事が、却つて淋しみを人に起させるのである。場所といふと古寺、時候といふと秋の末の九月盡、いづれも荒廢したやうな淋しい感じを起さしめる中に、狂言會を催ほすといふのである。

又或日扇遣ひ行く枯野かな　曉臺

夏爐冬扇といふ言葉がある通りに、冬の扇は必要の無いものとなつてゐるのであるが、其が或日村里を通つてゐると、汗ばむ程に暑さを覺えたので、又扇を遣ひながら行つたといふのである。「又」の字は夏遣うた扇を又冬になつても遣つたといふ意味である。冬といへば寒いことになつてゐるけれども、小春といふ言葉もあるやうになか〳〵春めいた暖さを感ずることもあるので、さういふ時に荷物でも肩にかけながら歩いてゐると相當に暑さを覺えるのである。其が町中とか山路とかいふので無くつて、枯野であるところに、殊に日の周く照つてゐる暖さを思はしめるのである。「又或日」といふ初五字が働いてゐるのである。

出代や稚心に物あはれ　嵐雪

嵐雪の句には斯ういふ優しみのある句が多いといはれてゐるのである。出代といふのは三月に年季奉公の男女が入り交る古來の習慣がある。今までゐた奉公人は新しき奉公人と入り代る爲に、長々の恩義を謝して暇を貰うて出て行く。新しい奉公人はその古い奉公人の爲し來つたことを少

し見習つて、その古い奉公人の出て行つたあとは自分で凡ての事に當るやうになる。竈も昔の竈、七輪も昔の七輪、戸棚も昔の儘の戸棚でありながら、其處にゐる人間の變つたのを見ると、何となく、ものになじまぬやうなうら淋しい心持のあるものである。それが大人であつてもさうであるが、ことに子供で見ると、親しみなじんでゐた昔のものが去つて、なじみの薄い新しいものが來たのであるから一層もの淋しい心持がする。その上、そのなじみのある昔の奉公人のしみ〴〵と主人に暇乞をして出て行くのを見て居ると、まだ凡ての情の十分に發達してゐない稚いものでも流石にあはれを覺える、其者をつかまへて此句にしたのである。出代の句には前説明したやうに新舊の交代したことを咏じたもの、新しく這入つて來た男女のをかしみなどを咏じたもの等があるが、主として此句のやうに出て行く舊い傭人の方のあはれを敍したものが最も多いのである。

君見よや我手入るゝぞ莖の桶　嵐雪

これも嵐雪といふ人の凡てものゝやさしみをいふのに長けてをる例證としてよく擧げられる句である。男世帶などを聯想する句で、友人が尋ねて來て、晩飯でも一緒に食はうとする時に女房か下女でもあるならば、其ものが膳立をしてくれるのであるけれども、さういふ女氣は勿論のこ

と、下部も小僧も無い、唯物草太郎の男が一人で自炊をしてをるのであるから、漬物を出すのも自分でせなければならぬ。君と言つたのは其處に來會はせてをる友人に言つたので、君見てくれ給へ、僕は漬物桶に自分で手を入れるんだぞ、といふのである。菫の桶といふのは、冬三河島菜のやうな菜を漬ける、それを菫の桶といふのである。寒い冷めたい臭い菫の桶に自分から手を突込むといふところに佗びしい心持もあるが、同時に何處やら得意なところもある。鉢の木の謠に佐野の源左衞門が「あゝ降つたる雪かな」と貧乏人のひだる腹を抱へながら雪の降つて來るのを興じて居るが、それと同じことで、むさくるしい男世帶でも、其菫の桶に手を突込むところに、自分で興味を見出して多少得意なところがある、それは優にやさしいといふやうなみやびた情では無いが、滑稽を帶びた輕みのある情味がある。嵐雪の句のやさしみといふのは主としてさういふ點である。餘事ではあるが、嵐雪といふのは芭蕉の主な弟子の一人で、其角と並稱せられ、芭蕉が門人に其角、嵐雪ありと言つたと言はれをる男である。

灌佛や捨子則ち寺の兒　其角

灌佛といふのは、四月八日の釋迦の誕生日に寺で灌佛會といふものを修じ、參詣人に甘茶などを配るのである。これは其灌佛の日に一人の兒がゐるのが人の目につく。扨てあの兒さんはどうした兒さんかと人が目を欹てゝ見るがそれが則ち何年か前に此寺の門前に棄てゝあつたあの捨子なので、寺の和尙は佛の道に携はつてをる慈悲から、それを拾ひ上げて育てたのが、あんなに大きくなつて兒になつたのだといふのである。或は此句を解して、自分が寺の門前に子を捨てゝ置いたのぢやが、何年か經つて恐る〳〵灌佛會に其寺に來て見るとちやんと其子が成人して寺の兒になつてゐる、といふ風に取る人があるかも知れぬが、それは少し穿鑿に過ぎてゐるであらう。灌佛の日は甘茶を酌んで參詣人に渡したりする爲に、寺の人も世話して皆總がゝりで働いてをる、參詣人も多い、其處で多くの參詣人が、「あの兒さんが捨子ぢやさうな。大分大きくなつたものだ」などゝ人に交つて端近く立働いてゐる其兒を見て評するといふやうな句と解する方が至當であらう。「捨子則ち寺の兒」といふやうな磊落な句法が其角の長處で、嵐雪の句のやさしみとは大分趣を異にしてをる。

もどかしや雛に對して小盃　其角

雛に向いて、「さあお雛樣召し上れ」とか何とか言つて女の子などが小さい盃を其前に置き、

それに白酒でもついでをる光景か、それとも雛の祭つてある前に團居して小さい盃で人々が酒盛りでもしてゐる光景か、いづれにでも解されぬことは無い。或は又團居して多勢の人が居るので無くつて、美しい雛を眺めながら、其家の主人か誰かゞ、小盃でちびり〳〵と飲んでをるのかも知れ無いのである。作者はどれか或一つの意味で作つたのであらうけれども、もともと十七字で文字が少ない爲に十分の敍述が出來ず、解する方では三通りにも四通りにも解することが出來るといふやうな場合が隨分澤山ある。それは俳句として不完全といへば不完全であるが、事實さういふ場合が餘程多い。唯その場合に考へねばならぬことは、斯く意味が違つた場合に、其句の趣味に變化を來たすかどうかといふ事である。たとへば、此句の如きに在つては以上三通りの解釋が出來るに拘らず、何れにしてもこの句の生命は「もどかしや」といふ初五字に在るので、そんなに雛に對して小盃をいぢつてゐたりするのを大酒飲みである其角が見て居ると、もどかしくつて——じれつたくつて——仕方が無い。そんな眞似のやうな事をしてをらずに、大盃でぐび〳〵と引つかけたらよからう、といふのである。其處で雛に對して小盃といふ光景は強ひて解すれば二三樣の解を得るけれども、要するに、其を見てもどかしがるところが此句の生命であるから、其等の不明瞭な點があるに拘らず、此句の趣味の上には何の影響も無いのである。これも「もどかしや」といふ豪放な主觀が其角の特色である。雛などに對しては兎角やさしい事を言ひ度がる

ものであるが、其角は、「面倒臭い、もつと大盃でやつゝけろ」といふやうな亂暴なことを言つたのである。嵐雪の雛の句には次のやうなやさしいものがある。

石女の雛かしづくぞあはれなる　嵐雪

石女といふのは姙娠しない子の無い女。女として子の無いのは不幸なものとされてをる、其石女が雛を祭つて、何かと其にものを供へたりなどしてをる、それを見て嵐雪は、あゝ憐れだ、子供があるならば其雛祭も子供の爲にするのであらうけれど、子供の聲のせぬ淋しい家庭に、雛祭をしてをるのが、見るからに氣の毒だといふのである。石女と極つた以上は少なくも三十を過ぎた女位に解釋される、其女が身じまひをして、若々しく化粧などをして、世間に多くの娘を持つた同年輩の婦人の身の上を羨ましく思ひながら、切めて雛祭などをして、淋しさを慰めてゐる光景をあはれと見たのである。其角の「もどかしや」とは大分情味に相違がある。

あれ聞けと時雨來る夜の鐘の聲　其角

嵐雪などの句は判りやすいが、其角の句には判らぬのが非常に多い。前に擧げた句などは、其角の句としては比較的まだ判りやすい方である。此句も一寸判らぬところがある。景色は冬の初め頃はら〳〵と時雨の降つて來る夜に鐘の聲も響いて來たのであらうと思ふけれども、「あれ聞けと」の初五字が十分に判ら無い。强ひて解すれば斯うであらうか。時雨がはら〳〵と音を立てゝ降つて來た、其時雨の降つて來たのは、あの今響く鐘の聲を聞けと、さう人に注意を與へる爲に降つて來たのである。即ち時雨をパーソニファイしたものとするのである。併し又斯くも解することが出來る。それは鐘をパーソニファイしたもので、時雨が降つて來たことを人は知らずにゐるかも知れぬ、それを折節鳴つて來た鐘が人に警告を與へて、あの時雨の音を聞きもらすまいぞよ、とさう言つたものとも取れぬことは無い。——少し無理かも知れぬが——尙又斯うも解することが出來る。「あれ聞け」といふのは二三人集まつてゐる席上の一人が、「あれを聞け、鐘の音がして來た」とさう言つたので、それは折節時雨の降つて來た途端であつたといふのである。中でこの解が穩當かと考へるのであるが、併し何れの解にしても時雨るゝ夜に——恰も時雨來る途端に——鐘の音も聞えて來たといふ光景は一つである。今度は前の雛の句と反對に光景は一つであつて、「あれ聞けと」といふ初五字の意味が曖昧なのであるが、其初五字はどう解釋するにしても、時雨來る夜の鐘の音について、作者の打興じた心持は覗ふことが出來るのである。矢張り

此句の趣味の上にはたいした相違は無いのである。殊に此句の如きは一直線に敍した調子が餘程趣を助けてをるので、初五字の意味は曖昧でありながら、尙ほ時雨るゝ夜の趣を强く受入れることが出來るのは此調子の力に歸すべきである。其角の句は難解であつて五元集一部を初めから終まで解釋し得る人は一人もあるまい。それは其角が偉いといふよりも、其角といふ男はそんな判らぬ句を作つて得意であつた男だと言つてしまつて差支無いのであるが、それでゐて判らぬながらも何處やら面白いといふ句が相當に在るところは、矢張り其角の偉いところである。それは其角の頭に起つて來た或る感じを、彼は殆ど文字に頓著無しに——意味に頓著無しに——今一つ言へば世人がそれをどう解するかといふ事に頓著無しに——感じ其まゝを現さうとして、さういふ句を作つたものとも解する事が出來るのである。我等に或る感じがある。どうかしてその感じを現し度いと思つて、折節其處にある樂器に手を觸れる。四絃一時に音を發して、丁度其作者の感じを其音によつて現し得たといふやうな場合が隨分ある。其角の句を先づさういふ風に解したらよからう。意味は何處やらぼんやりして判らぬところがあるけれども、しかし其角の感じはよく現れてをるといふやうな傾があるのである。

渡りかけて藻の花のぞく流れかな　凡兆

其角の句などを解釋して、二通りにも三通りにも意味が取れるといふやうな事をいふと、初學の人は定めて、さういふ事になると俳句といふのは誠に不安心なものだ、と考へるかも知れぬが、決して其角の句のやうなもの許りが俳句では無いのである。凡兆は矢張り其角と同時の芭蕉の弟子の一人であるが、此人の句の如きは最も明白で、何の疑義も挿む餘地の無い印象明瞭な句を作つてをる。此句の如きも其一例で、一つの流れがあつて、其流れを臀をからげて渡りかけたのであるが、ふと下を見ると川底に生えてをる藻に白い花の咲いてをるのが目にとまつた、其處で其を水の上から覗いて見るといふのである。夏川の涼しさうな澄み渡つた水、藻の花の小さいながらもはつきりした花、其を中流に立ちどまつて覗いてゐる人の容子、其等がはつきりと目に浮ぶ。其角の句など〻は大變な相違である。

上行くと下來る雲や秋の空　凡兆

これは秋の水蒸氣の少ない空氣の澄明な空の或現象を描いたもので、晴れ渡つた青い秋の空にも少し許りの白い雲がある。其雲も一寸見ると唯一樣に白い雲であるが、よく見ると上の雲はたとへば北から南に動きつゝある、下の雲はそれと反對に南から北に動きつゝある、上の雲は向う

に行くやうな心持がすると、下の雲はこちらに來つゝあるやうな心持がする、といふのである。「行く」とか「來る」とかいふのは多少曖昧な言葉であるけれども、而かもそれにしても上層雲と下層雲とが反對の方向に動きつゝある光景は、はつきりと受取れる、それに雲を描きながらも打ち晴れた秋の空の心持もはつきりと覗はれる。矢張り印象明瞭の句なることを失はぬ。

ながく〳〵と川一筋や雪の原　凡兆

此句の如きも畫のやうな句である。一面に雪が降り積つてをるので、何處もかも眞白いが、其中に一筋長く連つて黑いものがあるのは川であるといふのである。一面に白い胡粉で塗り詰めたやうな中に、一筋の黑い川の遠く流れてゐる光景が實にはつきりとよく描かれてある。

藁積んで廣く淋しき枯野かな　尙白

元祿時代、即ち芭蕉時代の作家で、印象明瞭な句を作る人は凡兆が一番であるが、此尙白といふ人なども、矢張り其傾向の一人である。此句は一寸油畫などでよく見る光景で、冬枯の野に外

にこれといふものも無い、稻を刈り取つた田にところ〴〵積藁が殘つてをる、こゝにも藁の山があれば、かしこにもある、此等の積藁を中心にして廣々と見渡される枯野は、何處を見ても淋しい眺めであるといふのである。矢張り凡兆の句に劣らぬ印象明瞭の句である。

ほとゝぎす今日に限りて誰も無し　尙白

これは印象明瞭といふ程の句では無いけれども、それでも其角のやうな疑はしいところは少しも無い、判りやすい句である。ほとゝぎすが鳴いた。珍らしい一聲であるから　自分の外誰かに聞かせ度いと思ふけれども、生憎今日は誰もゐない。いつもこんなことは無い、誰かゞゐる筈であるのに、今日に限つて誰もゐないといふのは誠に生憎であるといふのである。御馳走があると、自分一人で其を食ふ氣になれず誰かに其を食はし度いと思ふのは人情である。子規の一聲も其と同じことで、待ち兼ねて居つた子規の一聲が聞えたのに、生憎誰も居らぬとは殘念だと其一聲を愛惜するのである。

枕元にたゝまぬ春の晴衣かな　格堂

此解釋は前にも言つたことがあるやうに、俳句といふものを解釋する力を養ふことを目的にしてゐるのであるから、近代人の句も之を掲げて其解釋を試みて見ることにする。春になつて花見に行つたとか、若くは芝居を見に行つたとか、さうで無くつても何處かの人の集りに出て行つたので、餘所行きの晴衣を著て行つた。それから家に歸つて來たのはもう遲かつたので、平常著に著替へもしないで、其儘晴衣を枕許に脱ぎ棄てた儘で寢たといふのである。晴衣をたたまずに枕許に脱ぎ棄てた儘で寢るといふところに、春の遊樂に耽つてゐる慌だしい趣もあるし、稍〻しまりの無いやうな濫艶な趣もある。

笠ながらぬかづき行くや春の寺　三湖

笠ながらといふのは笠を著た儘といふので、寺の前に行つても笠を脱ぐのは面倒であるから笠を著た儘、其本尊に禮拜をして行き過ぎるといふのである。此句の表面に出てゐなくつても一番に想像のつくことは「旅」といふので、此人は旅をしてをるので、笠を被つて旅をしてをる時に或る由ある寺の前に來た。笠を脱いで禮拜すべきのを、其まゝで禮拜するといふのである。これを普通の人の旅とすると、さう信心家といふでも無く祖先の習慣に從つて唯頭を下げたといふの

だけで、暢氣坊のやうに取れるし、又信心の爲に巡禮といふやうなものとすると、手に種々なものを持つてゐるとか子供を伴れてゐるとかして、笠を脱ぐことが自由で無かつた爲に笠を著けた儘禮拜をしたのであるが、それでも唯儀式の爲の禮拜といふのでは無くつて心から額いたものと解されるのである。いづれにしても春風の吹いてをる長閑な光景といふ點に一致するのである。これが夏の暑い盛りとか冬の寒い日とかだと、この笠ながら禮拜をするといふ心持がすつかり變つて來る。右兩樣のいづれとするも、うら〻かな春の日とすれば其心持には共通な點があるのである。

鉢に咲く梅一尺の老木かな　鳴雪

これは盆栽の梅を咏じたので、普通に老木といへば少くとも一間以上の梅であらうけれども、これは盆栽の事であるから僅か一尺許りの木であるが、それでゐて矢張り老木なのである。其一尺位の木であつて而かも嵯峨たる老木の趣を備へたところが即ち盆栽家の苦心の存するところで、其一尺の老木は梅の花が咲いてをるといふのである。何でも無いことを其儘言つたのであるけれども「梅一尺の老木」と言つたところがよく盆栽の梅其ものを現してゐると言つていゝのである。

春寒く咳入る人形遣ひかな　水巴

人形遣ひは義太夫許りに限つたことで無くて、他の聲曲類にも昔は大分人形が附隨してをつたのださうであるが、現今では人形遣ひといふと先づ大阪の文樂座あたりの義太夫節に附隨したものをすぐ聯想する。作者の意も恐らくさうであらう。文樂座あたりに行つて見ると、今は死んだけれども、もとの吉田玉造とか桐竹紋十郎とか言つたやうな老人が裃を著けて、立役とか立女役とかの人形を遣つてをつたものであるが、今でも亦相當の老人が恐らく主な人形遣ひとして立つてゐるであらう。さういふやうな年取つた人形遣ひが、春の寒さに風邪を引いて咳入つてをるといふのである。或は作者の意は年は取つてゐなくつてもいゝので、兎に角今の世には稍〻時代遲れの職に携はつてゐる男が、春の寒さに風邪をひいてゐるといふところに同情があるのかも知れぬ。句の上に老人といふのは明かに出てゐるわけでは無いのであるから、其方の解でもよからうと思ふ。年齢は老人で無くつても時代遲れの職業に携はつてゐる男といふのが矢張り老人同樣の佗びしい感じを抱かせるのである。さうして一つ忘れることの出來ぬことは、さういふ佗びしい人間ではあるが、もともと艶な人形遣ひであるといふのが、同じ寒さに風邪をひくにしても、嚴冬の寒さよりは春さきの寒さにひいたといふ方が、其艶な心持によくそふのである。斯ういふ

點は見逃すことの出來ぬ點である。

行春やあまり短き返り事　水巴

行春といふのは春の末のことで、春を生物の如く考へ、その春がもう行つてしまふといふ所から行春と言つたのである。それを生物の如く見るところに春に對する愛惜の情が十分に在るのである。扨て此句意は、その春の末に或人のもとに何か用事があつて手紙を出した。其用事といふのも恐らくしかつめらしい殺風景な用事では無く、何か文藝に關することゝか、若くは多少艶味を含んだ情事に關することかであつたらう、こちらから遣つた手紙には十分に意を盡くし情を籠めて長い文句を書いてやつたのであるから、其返事も同じやうな情意を盡くした長いものであらうと豫期してゐたのに、それは餘り短い返事であつたといふのである。即ち此句のうちには春の暮れ行く怨みの上に其返事の餘りに短かゝつたのをも怨む意が含まれてゐるのである。

行春や選者を怨む歌の主　蕪村

前の句から聯想して此句を思ひ出したから序に解釋する。晩春の怨みにつけて人に對する怨みを敍した點は兩句共に同一である。昔平家の武士の忠度（たゞのり）は俊成卿の千載集の中に自分の歌を讀人知らずとして載せられたのを殘念に思つて、戰に赴く前に俊成の門を叩いて其怨みを陳べたといふやうな事もある。それ許りで無く自分の歌について選者を怨むといふやうな事は隨分ありうちの事である。同じ怨みでも一句の歌の主、即ち作者が選者を怨むといふやうなところには、やさしいみやびたところがある。それが暮春の情とよく調和するところから、此蕪村の句は出來たのである。お岩が伊右衞門を怨むとか、ハムレットが叔父を怨むとかいふのは、物凄かつたり氣味惡かつたりする大分深刻な怨みであつて、それは秋の暮とでもいふ心持にふさはしいであらうが、この選者を恨む歌の主の怨みは其れ程深刻では無くつて、何處かに一點の艶（あだ）つ氣（け）を存してをる、其處が暮春の怨みに相當するのである。斯ういふ事が事實と季題との調和問題となるのである。俳句の季題といふものは、さういふ點に意を用ゐて適當な人事に配合するのである。忠度（たゞのり）の俊成を訪うた時が暮春であつたからだらうとか、何とかいふ理由で之を解釋しようとするのは趣味の方を忘れた解釋である。此前咏史の事を言つた時に、新蕎麥は長田が義朝を殺した時の時候と違つてゐることを言つて、其に頓著しないのが却つて句をよくしてゐるといふ事を話したが、かういふ場合も同じやうな心持で句を見るがいゝのである。凡て斯ういふ風の句は事實の穿鑿よりも

趣より來るべきである。

領土出れば身に王位なし春の風　水巴

王位は人間の第一位と考へ無ければならず、又王位に在る人の幸福も思ひやられるのであるが、いづくんぞ知らん、其位置に在る人になつて見ると、其王位にあることが非常の苦痛で、どうかして暫くの間なりともそれを離れて見度いやうな心持がする。此句は別に王位を退いたものとは見られぬが、兎に角自分の領土を離れて單に一個の旅人となれば、もう自分の身には其王位は無くなつて、いかにも氣輕な一私人となつたのである、折節時候は春の事であるから、うらゝかな春風は其一私人の衣を吹いて、心も身ものびゝとするといふのである。

豪奢飽きて心に遊ぶ春日かな　水巴

豪奢の限りを盡くして、物質上の慾望は出來る限りの事をした。扨て矢張りこれでもう滿足といふ處には達しないで、何か物足らぬものがある、此上はどうしたらいゝか、唯心の上の快樂を

求めるより外に道が無いと悟つて、心に遊ぶといふのである。心の快樂といふのは、ものを遠方に求めるといふので無く、一輪の椿の花を見てもそれを味ふ上に心の快樂を得る、唯机に凭れてゐる許りであるけれども、油然として樂しいのは矢張り心一つに遊ぶからである、といふやうな、さういふ心の遊びである。贅澤の限りを盡くした人の最後の落著き場所である。それが貴い悟りであるかも知れぬ、又止むを得ぬ諦めであるかも知れぬ。

出代(でがはり)のおのが膳拭(ふ)くなごりかな　青々

出代の事は前に言つた。其時も言つたやうに出代りの句には出て行く方の古い奉公人の方を咏じたものが多いのであるが、これも其一例である。これは女中で、いよ〳〵今日の午過ぎにお暇を貰ふことゝ極つてゐたので、主人等の晝飯が終つて後ちに臺所の片隅で自分の晝飯をもすませ、扨て自分の膳として與へられた儘に今日まで用ゐて來た古膳も、自分で洗つて自分で拭いて、それで一切の後片附を終つて、其膳を拭いたといふ事を最後の名殘として――いよいよ出て行くといふのである。自分の膳を拭いてそれを名殘として出て行くといふ所に淋しみもあはれもある。

出代の今や來るかと飯時分　格堂

これは新しく來る方を咏じたもので、新しく來る筈の傭人は一向來ない。もう來さうなものだと待ち兼ねてゐる光景で、折節飯時分になつた、それにつけて來るのが遲いことである、といふことである。

出代に敎ゆ調度の置所　寒樓

これも新しく來た方のことを言つたもので、これは中働きといつたやうなものらしく、この硯箱はこゝに置くことになつてゐる、この抽斗には斯ういふものを入れることになつて居る、あれは其處、これは此處とそれ〴〵道具類の置場所を敎へるといふのである。前の格堂の句は飯時分とあるところから略〻臺所の女中の事を想像し、この句の方は調度とあるところから中働きを聯想するのである。

出代に早く親むこ子供かな　五城

前の嵐雪の句は、稚心に出て行く傭人のものあはれを感じたことを咏じたのであつたが、此句は其裏で、新しく來た傭人に子供といふものは慣れやすいもので、早もう親むでゐるのを咏じたのである。これもなか〳〵考へやうによれば人生の哀れさを覺えさせる句である。去る傭人をあはれがる子供があはれか、來た傭人にすぐなじむ子供があはれか。どちらかとも言ひ兼ねるのであるが、大人の目から見ると却つて後者の方がよけいに物あはれなやうな心持もするのである。

出代や父が年貢のとゞこほり　吾空

これは又小說的の趣向を言つたもので、父の年貢が滯つたが爲に娘は奉公に出て、其幾分を助けることになつたといふのである。年貢が滯つた爲に初めて奉公に出たので無くつて、已に奉公に出てゐる娘のその貧しい實家では、今度父の年貢が滯つて更に窮迫を重ねてをる、その場合その娘は今までの奉公先はひまが出て今度新たに他の家に奉公すると言つたやうな場合を言つたものとしてもいゝのである。要するに其出代る女の身の上を咏じたのが此句の趣向である。此句の場合は此女が出る方か入る方かは、たしかにどちらといふ事は出來ない。唯さういふ境遇に居る女と見ればいゝのであるから詰り出代りといふ言葉によつて傭人といふ事を現し、同時に其傭人

の身の上に變動のある出代りの季節である事だけを描き出したものとすればよいのである。又之は女に限つたことはあるまい、男でもいゝでは無いかといふ説があるかも知れぬが、其父の年貢のとゞこほりにたいして手助けにもならぬといふやうな心持が何處か言外に在るところが、どうしても倔强な男よりは纖弱い女の方に想像されるのである、近松の道中双六に在る馬方三吉の情婦の父は年貢の滯りで水牢に這入つてゐるとある、何だかさういふ聯想も何處やら在るやうな心持がするのである。

女夫して住持醉はしぬ花に鐘　几董

これは夫婦連れで寺へ花見に行つて、もとより酒肴持參の事であるから、どちらが主人やら判らぬやうなわけで、其夫婦がとり〳〵にもてなして、住持を醉はした。折節入相の鐘が花の梢に響き渡つた、といふのである。此住持はもとより徳のある坊主らしくも受取れぬ、一言でいへば生臭坊主で、夫婦のいたづら半分の勸めに、前後不覺に醉つてしまつたのであらう。梵鐘は是生滅法と響いたところで、坊さんは醉ひ倒れてしまつてゐるといふやうなわけであらう。尤も「女夫して……醉はしぬ」とある句法から見ると始めは住持の方は其れ程箍を外してゐなかつたのを、

女夫して遂に醉はしてしまつたといふやうな、多少强迫的なところも見ゆるのである。が、いづれにしたところで有徳の智識とは申されぬのである。寺へ酒肴持參の花見も異なものである。之は檀那寺の和尙さんを自分の家へ呼んで醉はしたものであらうといふ人があるかも知れぬが、特に下五字に「花に鐘」と置いたところから言つても、又「僧」とか「和尙」とか言はずに「住持」と言つたところから言つても、どうしても寺といふことをその光景中に描き出し度くなるのである。天明時代にもさういふ事實はよくあつたことではあるまいか。今の世の中には勿論ある。

花火盡て美人は酒に身投けむ　几董

之は花火見の夜の光景で、東京でいへば兩國の川開きの夜といふやうな時、花火の盛に揚つてゐる時分はまださうでも無いが、もう花火が終つて後は、今度は酒もりが盛になつて、宴に侍してをる美人は遂に酒の中に自分の身を投げる位に盛りつぶされてしまふであらうといふのである。藝妓のやうなものゝ境界を言つたのであるが、其藝妓が酒に身を投げる位であるから、客の方はもとよりいふ迄も無いことである。要は花火の後は如何に亂脈の酒宴が到るところに行はれるか、想像に餘りがある、といふやうな句である。几董は蕪村の高弟で、天明の其角を以て任じ、

酒を嗜(たしな)んでをつたとかいふ事があるから、こんなに酒の句が多いのであらう。

蜂花に入りて落ちけり赤椿　牛眠

物狂はしいやうに蜜を尋ねて飛び廻つてゐる蜂が、一つの赤椿を見つけて、其花の一つの中にぶん〳〵うなりながら這入つて行つた、その時、その椿の赤い花は、ぽたりと地上に落ちたといふのである。椿の花に限つて、俳句の方では散るといはずに落ちるといふ。これはよく椿の花の性質を現したもので、あの大きい花が、一瓣(ひとはな)づゝ散るといふやうなこと無しに、ポタリと落ちる、其處に他の花に無い趣があるのである。木蓮の花なども瓣の厚ぼつたく大きいところは椿の花によく似てをるが、それでも地上に落ちた時は崩れてしまつてゐて、紫や白の花片があちこちに散らかつてゐるのである。其が椿になると、大概花全體が固まつた儘で、まだ白は白、赤は赤と美しい色をしながら地上に落ちるのである。この落ちるといふ言葉のうちに、固まつて大きく形を爲してゐること、地上に落ちた時に或る音を發するやうな心持等が聯想される。

赤い椿白い椿と落ちにけり　碧梧桐

其處に二本の椿の樹がある。甲は白椿、乙は赤椿といふやうな場合に、その木の下を見ると、一本の木の下には白い椿許りが落ちてをり、一本の木の下には赤い椿許りが落ちてをる、それが地上にいかにも明白な色彩を畫(くわく)して判(はつ)きりと目に映るところを言つたのが此句である。此句でも落ちるといふ字から、ぽたぽたとあの大きな花が重なり合つて重げに地上に落ちてゐる光景が聯想されるのである。これが「赤い椿白い椿と散りにけり」では椿らしい心持はしないのである。

花二つ重なり落ちて椿かな　竹奴

前の句はあちらに一團、こちらに一團と落ちてゐる景色を言つたのであるが、此句は二つの花が重なり合つて落ちてゐるといふ、極(ご)く狹い或る格段な場合を言つたのである。これも木蓮とか其他梅とか櫻とかいふやうなものなら、花になつて二つ重なるどころか、一つの花が散り〳〵になつてしまふのであるが、崩れずに形を備へた儘地上に落ちる椿の花であればこそ、斯く特別な場合を見出し得たのである。又斯ういふ光景はよく見ることである。

音のして椿落ちたる笹の中　鬼史

これは又其椿の落花の重たいことを音で現したので、あの大きな花が形を備へたまゝで落ちて來る、それが下に笹の生えてゐるところであつたので、ばさと音がして落ちたといふのである。これも椿の落花を一方面から敍したのである。

ぽつたりと椿落ちけり水の紋　　橡面坊

これも矢張り音を現したことは前句と同樣であつて、下に池か川か其他何等かの水たまりのある上に椿の花が落ちた。重い大きな花であつたので、ポッタリといふ音がした。といふのであるが、前句と異るところは、同時に目に移る景色の活動を描いたところに在るので、其水の上に音をして落ちると同時に波紋が出來て、其椿を中心にして周圍に擴がつて行くといふのである。

流れ得ざる水の淀みの椿かな　　子規

此句は前句のやうに水上に落ちたる椿の花が、流れに從つて流れて行くうちに、其水の淀んでゐて十分に流れぬところに來た。其處では水上に浮いた儘、矢張り水と共に淀んでゐる光景を言

つたのである。櫻其他の花でも斯ういふ光景はよく見るところであるが、其が大きい目立たしい椿の花であるところに、明瞭なる印象を受けるのである。

活け下手の椿に彼方向かれけり　　蓼太

これは落椿を言つたのでは無いが、矢張り椿の花の目立たしい心持は前句と同じことである。即ち花生けに椿の花を生けようとする場合に、手並が上手で無い爲に、椿の花が正面を向かずに向うを向いたといふのである。これも椿の花に限らず、どの生花にもよくあることであるけれども、あのもの〳〵しげな大きな花であること――椿の花の重いこと――椿の花の向うに向いたといふ事の目立つ事――等が特にこの花について言つたのである。この蓼太といふのは天明時代の名高い俳人の一人で、彼の嵐雪の何代目かの後繼者になつてゐるのであるが、蕪村などに比べると名高い割に句は上手では無かつたのである。才智は縱横であつたやうだが、趣味の上に於て大分劣つて居つたやうである。此句の如きも、「活け下手」といふ言葉も俗臭があり、椿を擬人法にして、下手の力の及ばぬ儘に椿の花に向うに向かれてしまつたといふ風に敍したところも氣が利いてゐて却つて厭味になつてゐる。天保時代の梅室、蒼虬あたりの句を月並調と言つて排斥す

るのであるが、天明時代のこの蓼太の句などに、すでに其傾向は多少見えてゐたのである。此句の如きも天保時代の句に比すれば、尙ほ多少雄健なところが何處かにあるけれども、決して讃すべき句では無いのである。俳句では芭蕉を中心とする元祿時代、蕪村を中心とする天明時代を宗とすべきである。

春の水背戸に田作らんとぞ思ふ　蕪村

春の水の汪洋として湛へてゐる趣は豐かないゝ感じのあるもので、いつも見慣れた背戸ではあるけれども、斯く迄に春の水が滿ち〳〵てゐる處を見ると、ふと田でも作つて見ようかといふ氣になるといふのである。此句は蕪村として決していゝ句では無いけれども、前の蓼太の句よりは句の品格がいゝのである。蓼太の句は趣向が必ずしも惡いといふのでは無いが、「生け下手」とか「椿に向うに向かれた」とかいふ句法の上に缺點がある爲に、品格の惡いものになつてしまつてゐる。此蕪村の句は、趣向が必ずしもいゝといふのでは無いが、「背戸に田作らんとぞ思ふ」といふ風に調子が賤しく無い爲に、句が一等上になつてゐるのである。この調子といふものは大事なもので、言葉つきで人間の品格が隱くされぬのと同じことで、句の調子で自然にその品位は

極まるのである。これは句を作る人も大に注意しなければならぬことであるが、又句を見るものも餘程心に掛けて見分けねばならぬのである。一寸一讀して見て、面白いことを言つてゐるとか、旨く穿つてゐるといふ點からいへば、此蕪村の句よりも前の蓼太の句の方が遙に上かも知れぬけれども、春水といふものゝ趣――春水滿四澤といふやうな趣――を味つて、其趣に根柢を置いた點をいへば、蓼太の一寸したところに眼をつけたのよりは大分深いところがあるのである。

磯山や小松が中を春の水　几董

几董は前にも言つたことのある通り蕪村の高弟で、矢張り蓼太などよりは句は上手である。海岸近い磯山の小松が生えてゐる中に、春の水が流れてをるといふだけであるが、磯山といふ所から何處となく淸淨な感じがある、中に小松許りが生えてゐて、他の雜木を交へぬところに又一層潔い心持がある、その中をちよろ〳〵、春の水が流れてをるといふので、此句は春水の美しさを生かしたのが主眼となつてをる。蓼太の句のやうな巧みさは無いが、素直に趣を專一とした句である。

近江路や何處まで春の水邊なる　月居

これは琵琶湖の光景で、東海道の道中でもする時分に近江路を歩いてをると廣々とした琵琶湖は霞を棚引かせて際涯も無いやうに春の水を湛へてをる。あの大きな琵琶湖のことであるから、近江路を歩いてをる間は殆ど琵琶湖を離れることが無い位である。全體この水は何處まで續いてゐるのであらう、といふのである。「何處まで春の水邊なる」といふ邊に調子の巧みさはあるけれど、矢張り趣を專一とした句で、一寸人をあつと言はせてやらうといふやうな賤しい巧みは無いのである。此作者月居も矢張り蕪村の高弟の一人である。

源は柳なるべし春の水　蓼太

其が蓼太になると、矢張り氣取つた作り物のやうな句になるのは、此句などはいゝ例である。春の水の美しく流れてゐるところを見ると、この水の水上が芥や小石などの間から湧いてゐる水とは思へん、多分水上は柳の木のある邊から湧いてゐるのであらう。この春の水の柔かい味のあつて美しい處は、木でいへば先づ柳の絲のなよ〳〵と青みがゝつてゐるものと似通つてゐるから

是非さう想像をつけねばならんといふのである。是等は一寸考へるとやさしい考へのやうであるけれども、ものに拘り過ぎた俗な思想であつて、いくら春の水が美しいと言つたところで、その水上が柳の木から流れ出てゐるであらうといふのは理窟である。實際又落葉や芥や小石からの間から、ちよろ〳〵と流れ出てゐるところに實際の美しさはあるのであつて、其が是非絲を垂らしてをる柳の木の下からであるやうに解するのは所謂月並である。殊に此句の最も大きな缺點といふのは「柳なるべし」といふ言葉で、一應、柳の木の下から流れ出てゐる、といふ風に解釋して見たけれども、よく考へて見ると「柳なるべし」といふのは曖昧な言葉で「水上は柳だらう」といふのは嚴密にいへば何のことやら判らぬのである。「柳なるべし」といふので「柳の木の下から流れ出てゐるであらう」と解するのは寧ろ解するものゝ無理かも知れないのである。强ひて解釋すれば或は斯う解釋することが出來ないでもない。こゝに流れてゐるのは水である、しかしこの水上を探り探つて行くとそれは一本の柳かも知れん、今目に水と見られるところのものも、ずつと水上に探り上れば水ではなくつて一つの柳の木かも知れん、柳の絲のなよ〳〵と枝垂れてゐるのが地上に垂れて、それが水になつて、その末が斯く流れになつてゐるのかも知れん、とそんな風の意味とも解釋の出來無いことは無いのである。否恐らく作者も、亦この蓼太時代の蓼太の崇拜者もそんな事は穿鑿せずに、唯春水から柳を聯想して水上は柳だらうと言つた、其處に一種

の思ひつき――巧み――があるものとしたものかも知れぬ。蕪村、几董、月居などの句と比べて見ると如何に力の入れ處に相違があるかといふ事が判るであらう。前に俳句といふものは僅に十七字で簡單な字數であるから二樣にも三樣にも句意が解釋される場合があるといふ事を言つたけれども、併し此句の如く曖昧なことを承知の上で敍したやうなのは好ましく無い。一種の誤魔化し句と言はれても辯護の餘地が無いのである。其處の區別は餘程注意しなければならぬ。

春の水山無き國を流れけり　蕪村

春の水がゆつたりと流れをる光景を言つたもので、山無き國といふのは日本では稍〻空想に近い言葉ではあるけれども、先づ平原の續いた廣々とした國と見ればいゝのである。その山の無いやうな廣々とした國を流れてゐる川は、折節春の事であるから雨が屢〻降り、今まで涸れて居つた冬川と反對に澤山の水を湛へ居るといふのである。廣々とした平野を汪洋と長く流れをる春の水の光景は、のんびりしたいゝ感じである。

足弱の渡りて濁る春の水　蕪村

春の水は春夏秋冬四季の水の中でいへば最も女性的なものである。優し味もあれば美しさもある。其處で足弱――女の事――が渡つても、その春の水はやさしく濁るといふのである。一寸ものが障つても抵抗力が無く、すぐしなふといふやうなところに女性的なところがある。春の水も其やうに女性的で抵抗力が無くつて、あの足弱が渡つても、その爲に早濁るといふのである。反言すれば強い男の猛者などが金の草鞋などで踏みにじるのならば濁るのも尤もであるが、あの足弱が渡つても濁るところはどうしてもやさしい春の水である。此句などは優しい春水を咏ずるのは稍〻理窟に墮ちかけたもので、蕪村の句のうちでもいゝ方とは言へないのである。「水上は柳なるべし」程では無くつても稍〻それに類する嫌ひがあるのである。

小舟にて僧都送るや春の水　蕪村

僧都（そうづ）といへば僧正といふのについだ位の僧の事、その身分ある僧都の何處かへ行くのを送るのに、大きな船では無く小さい舟で送るといふところに、春水のやさしみと調和するところがあるのである。殊にこの僧都は天台とか眞言とかの美しい緋の衣でも著た坊さんであらうから、それが春の水の上に浮んでゐるところに、美しさの上の調和もあるのであらう。この句は足弱程では

無いけれども、殊に春水に拘泥して小舟と言つたり僧都と言つたりした痕跡があつて、何處やら作りものらしい感じがするところがある。蕪村集中の佳句の方では無い。

畫舟に狂女のせたり・春の水　蕪村

謡曲隅田川の狂女を畫にしたやうな句である。舟に狂女が乘つてそれが春の川に浮んでをる、といふのである。殊に畫舟と斷つたのは、朝でも無く夕方でも無く――勿論夜でも無く――春の日永の頃の、しかも眞畫中であるといふところに、一層ゆつたりしたやうな心持を含ませたものであらう。物狂といひながらも、さう亂暴をするやうな狂女では無くつて――たとへば謡曲隅田川の狂女のやうに、都鳥の問答をしたりするやうなやさしい狂女であつて――それが川を渡る爲か何かで舟に乘つてゐる、其女が普通の女と違ふところに、却つてゆつたりした心持がある。それが前いふやうに畫間であるといふことが、愈〻その心持を強めるのである。前の僧都の句と似寄つた句であるけれども、此方がいくらか作りものであるといふ痕跡が少ないかとも思ふ。併し程度も先づ似寄つた句であつて「畫船」といふのも不熟である。

重箱を洗うて汲むや春の水　蕪村

これは些細な人事を咏じたものであるけれども、前の二句などに比すれば餘程自然である。何處か水邊に野遊びに行つた時か、若くは舟遊びをしてゐる時かの光景で、携へて行つた行厨を開いて樂しい畫飯を食つた、その御馳走の空になつた重箱をすぐ其處の水で洗つて、その重箱に水を汲み上げた、といふのである。野遊びなどに行つたことのある人は必ず實見したことのあることで、その重箱に汲み上げた水をすぐ飲むか、若くは土瓶にでも入れてわかして飲むか、いづれにしても、今ものを洗つた水をすぐその洗つた器で汲み上げて飲むといふ處に、野遊びらしい暢氣な心持も十分にあるし、又その水の美しさも思ひやられるのである。此句の如き事柄は前の二句に比べて寧ろ些事であるけれども、作りものらしい痕跡が無くつて、自然の趣を得たことにおいては遙に上位に位してゐるのである。好句の一たるを失はない。

橋なくて日暮れんとする春の水　蕪村

ある川に出た。是非この川を渡らねばならぬのであるが、一寸見たところでは何處にも橋が無

い、それにもう日暮であるから、ぐづ〳〵してゐると日が暮れてしまふ、さういふ時の光景である。けれどもこれが秋の日の釣瓶落しといふやうな時だと、さういふうちにも日が暮れてしまふのであるけれども、「暮遅し」といふ言葉のあるやうな春の夕暮のことであるから、さうは言ひながらもなか〳〵容易に暮れてはしまはない。其處に流れてゐる水も春の水でやさしく靜かに流れて居る。さう差し迫つた心持がしない。そのゆつたりした感じが十分によく出てゐるのである。此の如きは趣向も下卑て居らず、趣も自然であるし、たしかに好句である。

人音にこけ込む龜や春の水　太祇

太祇も天明の俳豪の一人で、蕪村よりは寧ろ先輩で、しかも蕪村の友人であつた。几董の句などは蕪村の感化を受けたと同じ程度に太祇の感化も受けてゐるやうに見える。此句は春の水のほとりを歩いてゐると、今まで岸邊に出て遊んでゐた龜が、その足音に驚いて逃げようと走りかけたが、あの大きな甲羅を持つてゐる龜のことであるから、素早く逃げることが出來ず、自分の重みでころ〳〵と水の中へ倒け込んでしまつたといふのである。長閑な春の水の趣も一方に想像されるが、しかし此句の如きは其龜を描いたところに特色があつて、いかにも龜らしい心持のするところに面白味がある。

我事と泥鰌の逃げし根芹かな　丈草

此句を芭蕉が丈草出來されたりとか何とか讃めたといふ事である。此句は根芹を摘まうとして水の中に手を入れると、其處にゐた泥鰌が、驚いて逃げたといふのを、自分がどうかせられるのかと思つて逃げやあがつた、といふ風に敍したところにをかしみがあるのである。泥鰌にはよく見る光景を捕へてはゐるのであるが、しかし、「我事と」といふ作者の主觀でをかしみをつけてゐるので、まだ何處か句に幼稚なところがあるが、前の太祇の句になると「こけ込む龜」と言つて龜の行動を客觀的に敍してゐて、しかもをかしみを十分に備へたところに、此丈草の句よりは一歩を進めたところがある。

行舟に岸根をうつや春の水　太祇

又太祇の春の水の句に戻つて今一句此句を解釋しようならば、春の水に浮んでゐる一艘の舟が

水上を漕いで行くと、その水面に起つた波動が終に岸まで及んで、その岸根をちやぶ〳〵と打つといふのである。これは春の水の美しいとか艶があるとかいふ方よりは、靜かな心持を言つたものであらう。その舟が行く以前は鏡の如く靜まり返つてゐた水が、はじめて舟によつて波を起して、其波が及び及んで遂に岸根を打つといふのである。

城外や水春にして四方の船　水巴

ある城がある。その城の外に大きな川があつて、其處には諸國の船が集まつて來て居る、といふのである。繁華な城下の或光景を捕へたものである。「水春にして」といふ言葉などは明治になつて殊に多く使用されるやうになつたものである。この意を延べて言へば、水許りで無く凡て春の光景であるけれども、殊に水の景色も春らしい色を帶びて、とでもいふのである。春になれば人の心も動き始め、凡てのものが活潑になる。城外の川に集まつて來る諸國の船も從つて多くなつて來たのである。此句の如きは春水の盛んな趣を言つたのである。

春水やいくつ舟出す三井の僧　水巴

これも近江の琵琶湖を言つたもので、春になつて三井の僧が舟遊びをする爲に或日湖水に舟を浮べた。一艘々々と漕ぎ出て行くところを見て居ると、もうおしまひかと思ふのに又一艘漕ぎ出して行つた。全體何艘舟を出す積りなのだらうと言つたのである。三井の僧の盛んな遊びを敍したのである。此句も春水の盛んな光景を捕へたものである。

競漕の旗ひたりけり春の水　景水

これは隅田川のボートレースを敍したものであらう。春の水の上に何艘かのボートが殆ど沈むかと思ふやうに舳を水に突込んで、速力を競つて漕いでをる、その一つ〳〵のボートに在る旗が、いろ〳〵違つた色をしてゐるのであるが、そのうちの一艘のボートの旗は、水の中にひたつてゐるといふのである。その旗の水にひたつてゐるところを見つけたところに、春水に親しみあこがれるやうな作者の心持は現れてをるのである。是等は春水に對する作者のなつかしみといふやうなものが、主な背景を爲してをるのである。

地震つて春の澤水溢れけり　青々

地震の爲に急に水が噴き出したり、又水が涸れたりすることは隨分よくあることであるが、併し此春水は必ずしも其地震が原因といふわけでもあるまい。折節地震がゆつた、その地震もさう烈しい地震では無かつた、野澤の水は春になつて一面に充ち溢れてゐるといふのである。斯う考へると、地震も亦景色の一つを爲すのみで、春の野澤の水の溢れ充ちてある光景に、更に一つの景色を添へたことになるのである。即ち畏るべき地震も亦豐かな春の野の一點景物となるのである。水巴の句以下は現代の句である。これを以て見ても、今日の句は必ずしも天明時代の句に劣つてゐないことが判るのである。

下ろし置く笈に地震る夏野かな　蕪村

此句も地震を咏じたものである。或修行者のやうなものが、笈を負うて夏野を歩きつゝあつたのが、其處に笈を下ろして休んでゐると、其時地震がゆつたといふのである。笈に地震るとあるから、その笈が地震の爲に少し動くのも目に映つたのであらう。この地震も恐らく大きな強震では無く、あゝ地震がゆると言ふうちにその笈も少し動くのが見えると言つたやうな光景であらう。草木なども茂つて勢力の内部に籠つてゐるやうな心持のする夏野が、僅に地震によつて力を上部

に現したやうな感じがするのである。その點から言つてもこれが大きな地震であると、却つて夏野の大きなゆつたりした感じを殺ぐのである。體も大きいし容貌も魁偉で聲音も太いといふ人が別に大きな聲も出さず、僅に微笑をしたところに、却つて偉大な感じを起すのと同樣である。

行々てこゝに行く夏野かな　蕪村

これも夏野の大景を言つたもので、何處まで行つても廣々とした原野で、なかなか果てしが無い事を言つたのである。行つて〳〵又行つて行つて、現在もまだ歩きつゝあるのであるが、矢張り夏野を越し切ら無いといふのである。「ゆき〳〵てこゝにゆきゆく」といふやうな疊句が一層その果てし無き夏野の力を強めてゐるのである。前に調子のことを一寸言つたことがあつたが、此句の如きは調子によつて趣を助けてゐる一例と言つていゝのである。

たえず人憩ふ夏野の石一つ　子規

これも夏野の廣々とした感じである。夏野の中に道があつて、その道のほとりに一つの石があ

る。其石は丁度適當な場處に在つて、適當な形をしてゐる爲に其處を通る旅人はよく休む。一人の旅人が休んで立去つたと思ふと、もう其處に他の旅人が休んでをる。——時としては二人も三人もやすんでをることがあるかも知れぬ——何にしてもその石の上に旅人の絶えたことが無いといふのである。夏野の道を旅人の小止(をや)み無く通つてゐることも聯想さるれば、その石を唯一の休み場處とする夏野の廣々とした光景も覗はれる。此句も亦此切字の無いやうな一直線な敍法が、旅人のいつも絶えずに其處に休んでゐることを聯想さすに十分の力を持つてゐるのである。此句の作られた時から今日までもまだ其野中の石には、いつも入り交(かは)り立ち交り旅人は休んでゐるやうな心持がするのである。

夏野盡きて道山に入る人力車　子規

夏野を人力車で越してゐると、隨分長い夏野の路ではあつたけれども、漸くもう野を越えてしまつて、それから道が又山に入るやうになつた、人力車は矢張りその山路を通るべく其處へ引き入つた、といふのである。是等は夏野を正面から描かず、廣い夏野は遠景の方にぼかしてしまつて、目前の景色はその夏野の果になつて、これから山路にかゝらうといふ所に、一人の旅人を乘

せた人力車を描き出したのであつた。人力車が夏野を過ぎて山路にかゝるところに、よく旅で出(でつ)會はす情景が浮び出るのである。此句は夏野を正面に描いてゐないに拘らず、矢張り夏野の廣大な感じは想像されるものである。

實方の長櫃通る夏野かな　蕪村

蕪村は夏野といふやうな大景を句にすることに於ては、たしかに儕輩に卓越してをつた。太祇や几董などには此種の題の句は餘り澤山無く、あつてもそれ程自由で無いが蕪村は自由である。此處らが蕪村の大家たるところであらう。其處で今一句蕪村の夏野の句を解釋して他に移らう。此句は實方中將が、宮中で物爭ひをした爲に「歌枕見て來れ」といふやうな勅諚の下に東北の方に追ひやられ、仙臺近くの笠島といふ處まで行つて、落馬したのがもとで死んだといふその憐れな故事を材料にしたもので、兎に角公卿の旅行の事であるから、その旅荷物として長櫃位はあつたらう、其長櫃が、とぼ〳〵と實方の夏野を歩いて行くあとについて矢張り夏野をかゝれて行くといふのである。前(さ)きの隅田川の狂女の句と同じやうに、斯ういふ歴史的の句を作るといふ事も亦作者の一技倆ではあるが、併し下手(へた)にやると見られぬものになつてしまふ。先づ蕪村などは比

較的上手の方と言つてよからう。

笠島やいづこ五月のぬかり道　芭蕉

この句は「奥の細道」中に在る句で、次のやうな文章がある。「奥州名取の郡に入りて中將實方の塚はいづくにやと尋ね侍れば、道より一里半ばかり左の方笠島といふ處にありと敎ふ。降り續きたる五月雨いとわりなく打過ぐるに」即ちこの文章にある通り、旅行の序に芭蕉は此あはれなる歌人のあとを弔はうと思つたけれども、何分五月雨が降りしきつて不本意ながらも行けなかつたのである。扨て句意は、笠島は何處ら邊であらう、その方向を見渡して見ると唯五月雨のぬかり道が見える許りであるといふのである。實方中將の句には尙ほ次の一句がある。

實方中將の墓にて

君が墓筍のびて二三間子規

此句は作者が「果て知らずの記」と題する紀行文をものした奥羽行脚の時の句である。同じく

夏ではあつたけれども、芭蕉と反對に親しく笠島に實方中將の墓を弔うて觸目した光景をその儘言つたのである。實方中將に向つていふやうな心持で、君の墓には二三間にも延びた筍が突立つてをるといふのである。「はて知らずの記」には此句は載つてゐない。あとで作つたものか、或は收錄するに足らぬ句として入れなかつたものか、孰れかであらう。「はて知らずの記」の文章をここに引用して置くことは無用の事でもあるまい。

巡査一人草鞋にて後より追附かれたり。中將の墓はと尋ぬれば我れに跟きて來よといふ。道道いたはられながら珍らしき話など聞けば病苦も忘れ、一里餘の道はかどりて其笠島の假住居にしばし憩ふ。地圖を開きて道程細かに敎へらる。いと親切の人なり。野徑四五町を過ぎ岡の上杉暗く生ひこめたる中に一古社あり。名に高き笠島の道祖社なり。京都六條道祖神の女の商人に通じて終にこゝに身まかりたりとかや。口碑固より定かならず。

われは唯旅すゞしかれと祈るなり

杉の中道横に曲りて藥師の堂を下れば、實方の中將馬より落ち給ひし處大方こゝらなるべし。中將は一條天皇の御時の歌人なり。ある時御前にて行成卿の冠を打ち落しゝより逆鱗にふれ、それとなく奥羽の歌枕見て來よと勅を蒙り、處々の名所を探りて此處にかゝり給ひし時、社頭

なれば下馬あるべきよし土人の申しゝに、扨は何の御社にやと問ひ給ふ。土人しか〳〵の旨答へしかば、そは淫祠なり馬下るべきにも非ずとて阪を上り給ひしに、如何はしたまひけん馬より落ちて奥州の邊土にあへなく身を終り給ふとぞ聞えし。田畦數町を隔てゝ鹽手村の山陰に墓所あり。村の童にしるべせられて行けば、竹藪の中に柵もてめぐらしたる一坪許りの地あれど、石碑の殘缺だに見えず。唯一本の筍誤つて柵の中に生ひ出でたるが丈高く空を突きたるも、中中に心ある樣なり。其側に西行の歌を刻みたる碑あり。枯野の薄かたみにぞ見ると詠みしはこなりとぞ。ひたすらに哀れに覺えければ我行脚の行末を祈りて、

旅衣ひとへに我を護りたまへ

塚の入口のかなたに圍はれたる薄あり。やう〳〵一尺許り生ひたるものから、かたみの芒とはこれなるべし。云々。

此筍の句が如何なる光景を讀んだものであるかといふ事は、この文章と照し合はして見ると一層よく判るのである。芭蕉の句が五月雨の句であつたのを緣にして、元祿以來の五月雨の句を少し評釋して見よう。

五月雨をあつめて早し最上川　芭蕉

之も矢張り「奥の細道」に在る句で、折節五月雨の降る頃であつたので、最上川の水勢を增してもの凄い勢で流れてゐるのを咏じたのである。降り續く五月雨の爲に水嵩の增してゐるのを「五月雨をあつめて早し」と言つたのである。山岳の多い國原に降る五月雨をこの最上川だけに集めてゐるやうな感じがするところに、此句の强味があるのである。

五月雨の雲吹きおとせ大井川　芭蕉

これも大河と五月雨との配合であるが、大井川は人も知るやうに昔東海道でよく川止めなどのあつた難所の一つ。其大井川に芭蕉が行つた時に、恰も大變な出水で、いつ五月雨が晴れさうにも見えぬので、どうか晴れてくれゝばいゝと祈る心から、五月雨を降らすその雲を大井川の中へ吹き落としてしまへと言つたのである。さうすれば空が晴れて、雨も止み自然この出水も無くなるであらうといふこゝろである。以上二句は芭蕉の五月雨の句としてよく壯大な句の例に引合に出されるのである。

五月雨に家ふり捨てゝなめくじり　凡兆

これは五月雨の大景といふよりは、寧ろ小景を見出したのである。五月雨の降る中をなめくじりがよく出歩いてゐるのは人の見る通りである。木の幹などはいふに及ばず窓の縁や縁側や時としては鴨居までにをる、なめくじりは雨を喜ぶあまりに自分の栖家もふりすてゝ高歩きをしてをるといふのである。此句の場合は右の家の中などにゐる場合では無く、竿の先とか竹垣とか、其他雨の降り灌ぎつゝある中を出歩いてゐる場合であらう。

髪剃や一夜に錆て五月雨　凡兆

五月雨の降る頃は凡てものが錆びやすい。砥ぎすました剃刀が一夜の間に錆びてしまつたといふのである。これも五月雨の大景を見出したのでは無く、小さい或事實をつかまへて來たのである。けれども此句も前の句も其小さい事實を通して五月雨の降り續いてゐる濕つぽい天氣が十分に想像が出來る。

馬士の謂次第なりさつき雨　史邦

これは五月雨の降る中を歩いてゐた旅人が、終に道の惡いのに堪へかねて馬に乘つた場合の句である。こちらの足許を見すかされてゐるのであるから、萬事馬方の言ひなり次第で、賃はもとよりの事、急ぐ旅であつても何處かの茶店で暫く休むといへば、それも聞入れねばならず、其他萬事客でありながら少しも頭が上らぬのを言つたのである。雨中の困難といふやうな事が此句の背景となつて居るのである。

縫物や著もせでよごす五月雨　羽紅

羽紅といふのは凡兆の妻だといふ說がある。尼羽紅とあるところから見ても兎に角女には相違無い、此句も女らしい句である。縫物をどういふ風にした場合かといふ事はこれだけでは判らぬが、或は風呂敷にくるんで雨中持つて歩いてをるやうな場合でもあらうか。何にせよまだ著物として手を通しもしないのに五月雨の爲よごしたといふのである。五月雨の爲に天も地も家の中も濕つぽくなつてしまつたやうな心持で、新しいと言つてもまだ著物にも仕上ら無い縫物にまで泥

をつけた、といつて嘆息するのである。以上は皆元祿の五月雨の句である。

五月雨や夜半に貝吹くまさり水　太祇

それが天明になると先づ此句のやうなのがある。五月雨のため水嵩が増したと言つて、沿岸の民家を警戒する爲に夜中に法螺貝を吹き立てるといふのである。これは隨分大正の今日でも見る光景であつて、たとひ法螺の貝を吹かぬにしても、半鐘でも亂打して人の眠りを驚かすのである。

つれ〴〵と据風呂焚くや五月雨　太祇

此句は前と反對の暢氣な句で、毎日々々雨が降つて退屈してをるのに、今日も亦降り續いて退屈で仕方が無い、其處で仕方無しに据風呂でも焚いて這入らうといふのである。碁をうつにも相手が無く書物を讀むにも鬱陶しい、其上著物も疊も凡て濕つてゐるやうで氣持も惡いから据風呂でも焚いて湯に這入らうとするのである。

鹽魚も庭の雫や五月雨　太祇

鹽魚を梁か何かに吊つて置いたところが、連日の雨で空氣が濕つてゐるのでその鹽魚の鹽が溶けて土間の上にポタ〴〵と雫が落ちるといふのである。天氣がよければから〴〵になつてゐる鹽魚が雫になるまで濕つぽいといふのは五月雨頃の鬱陶しい心持をよく現してをると言つてよい。

五月雨や大河を前に家二軒　蕪村

太祇の句は五月雨といふ壯大なものを捕へて來ても、寧ろそれを人事に持つて來て――小景として取扱つたことは、元祿の凡兆など〻似たところがあるが、蕪村は矢張り大景を捕へて來て居る。その點が元祿の芭蕉に似てをると言つてよい。其等の點から芭蕉、蕪村と併稱してもい〻資格の一つである。此句は五月雨の降る頃、その爲に水嵩が増してをる大河を前に控へて家が唯二軒あるといふのである。物凄い程水が増して瀑々と濁水が漲り流れてをる其堤に澤山の家もあることとか、小さい藁葺の小家が唯二軒ある許りだといふので、その川の壯大な力强い感じと、それを控へて平氣な顏をしてゐる二軒の家の心細いやうな、しかも何處やら其に堪へて力强いやうな

ところが現れてゐるのが、此句の力となつて居るのである。これが澤山の大きな家が竝んでゐるのであると心丈夫らしくつて、却つて其川水の勢力にぢつと堪へてゐる力は弱いやうなところがある。それが唯二軒の家である爲に、其強大な力をその唯二軒の家でぢつと耐へてゐるやうなところに、却つて内に籠つて外に發せぬ強大な力を認めるのである。

湖へ富士をもどすや五月雨　蕪村

諺に一夜の間に富士山と近江の琵琶湖とは出來たといふやうなことを言つてをる。これも其處から思ひついた句で、斯う小止みなく強雨が降つては、富士山を湖へ戻してしまふであらうといふのである。一夜の間に出來たといふのは、取りも直さず湖の窪んだだけの土が富士山となつて突起したのであるが、雨のために富士山の土は流されてもとの處へ戻されて湖は埋まつてしまふであらうといふのである。五月雨のため山の土を流し、それを湖海に推し出すことを極端に言つた迄の句であるが、大きなことを言つたといへば言へるのである。併し餘りいゝ句では無い。

五月雨や佛の花を捨てに出る　蕪村

五月雨の降り續く爲に佛前に供へて置いた花も取りかへることが出來ず、日を經て枯れた上に腐るやうな心持もする、其處で或日雨中にその花を棄てに出るといふのである。雨中の鬱陶しい心淋しいやうな心持がよく出て居る。此句の如きは大景を言つたものでは無いけれども、いゝ句たるを失はぬ。

五月雨や滄海を衝く濁水　蕪村

五月雨のため川の水は濁つてしまつて、濁水が非常な勢で流れてをる、それが海に這入る時の光景を言つたもので、大海はその爲に濁るといふわけでも無く、矢張り毎日のやうに日に二回の干滿をやつて寄せてはかへしてゐるのであるが、其中にその川の濁水は非常な勢で突入つてゐるといふのである。これも壯大な方の句である。

五月雨や水に錢ふむ渡し舟　蕪村

これは又小さい人事を言つたのである。渡し舟の中も五月雨の爲に水がたまつて、跣足(はだし)で其舟

に立つてをると、その水の中に錢が落ちてゐる、それを足の腹で踏んだといふのである。五月雨頃の光景が極めて適切に描かれてをる。滄海の句などよりも、寧ろかういふ句の方に五月雨らしい心持は強く出てゐるのである。

五月雨の猶も降るべき小雨かな　几董

降り續いてゐる五月雨が、何處やら晴れさうになつて來て明るくはなつたのであるが、しかも小雨がしよぼ〳〵と降つてをる。この鹽梅だと迚も晴れはしないで、遠からず又ざあと降つて來るであらうといふのである。五月雨其ものの或場合の光景を描いたもので、「尙も降るべき小雨」と言つた句法が巧みである。

五月雨や船路に近き遊女町　几董

五月雨の降つてをる海岸か、もしくは川つぶちに在る遊女町のことを言つたので、出船入船のあるその船路に近い遊女町は、五月雨の鬱陶しい中にも尙ほ絃歌の聲が聞えてをる。流連の客も却つて雨の爲にある位であるけれども、流石に何處となく物淋し氣で一種の哀れがあるとでもいふのであらう。さういふ感じの方は讀者の隨意に任すとして、兎に角船路に近い五月雨の遊女町といふものをつかまへて來て、人々の前に突出したところに、此句の働きはあるのである。以上で天明の句はおしまひとする。

五月雨の合羽つゝばる刀かな　子規

これは維新前の士の道中などを想像したもので、五月雨のため合羽を著て歩いてゐると、刀が定めて突張るであらうといふところから出來た句である。維新前の人であつたら餘りありふれた事で、そんな事は句にせうとも思はぬかも知れぬのであるが、其時代を過ぎ去つて見ると、斯ういふ事を句にして見て何處やら其時代をなつかしむ心を滿足さすのである。

椎の舍の主病みたり五月雨　子規

椎の舍の主といふのは誰の事を言つたものともわからぬが、兎に角此文字から想像のつく通り、

大きな椎の木のある家の主人に違ひ無い。さういふ大きい椎のある家であれば、自然その陰になつてゐる家は鬱陶しいに相違無い。晴れた日であつても餘り晴れ〴〵しく無い家が、五月雨の爲に益〻陰氣で鬱陶しい、その爲といふのではあるまいけれども、主人は病氣で寢てゐるといふので、愈〻鬱陶しい陰鬱な心持は強くなるのである。

病人に鯛の見舞や五月雨　子規

これは前の句と違つて、同じ病人を敍するにも陰鬱に一方を言はず、その陰氣な中へ或處から病人へ見舞と言つて美しい鯛を見舞に屆けたといふのである。其鯛の爲に一點の打晴れた陽氣な心持を呼び起すところが此句の生命である。

五月雨や晴るゝと思ふ朝の内　格堂

先きの几董の句と稍〻似寄つた句で、朝の間は明るくなつて、此鹽梅なら今日は晴れるだらうと思つてゐたに、又暗くなつて降り續けたといふのである。

川越しの小兵に負はれ五月雨　紅綠

五月雨に水嵩の增して居る川を渡る場合に、人の脊に負はれて渡る、その自分を負うて呉れる男は小兵であつて、自分よりも脊の小さい男である、といふ處に一寸した矛盾と滑稽とを感ずるところが此句の生命である。

五月雨の漏るや厠に行く處　寒樓

五月雨の漏るといふのは、ありふれたことであるが、その場所が厠に行く所だと指定したところに、この句も一寸した滑稽があるのである。要するにこゝに擧げた近代の句は芭蕉や蕪村やの大景の句に相當する程の價値のあるものは無いと言つてよい。但しこれが近代の句の粹を拔いたといふのでは無い。手當り次第に取り出したので、代表的の句とするには足り無いのである。それに反し芭蕉、蕪村等の句は代表的の句である。次に秋風の句に移つて見よう。

終夜（よもすがら）　秋風聞くや裏の山　曾良

曾良といふのは芭蕉の弟子で、芭蕉奥羽行脚の時供となつて、何かと其世話をして歩いた男であつたのであるが、加賀に這入つた時病氣になつて芭蕉に別れ、一人江戸に歸つたのである。これは其芭蕉に別れた夜、加賀の全昌寺といふ寺に泊つて、腹が痛む爲に終夜眠られなかつた時の句である。眠れ無いために終夜裏の山を吹き鳴らしてをる秋風の音を聞いたといふのである。旅のしかも病中の物凄い秋風を咏じたのである。

人に似て猿も手を組む秋の風　珍碩

珍碩も亦芭蕉の弟子である。秋風の吹く頃はうら淋しく、どこかに寒さを覺えはじめるので、猿もぢつと手を組んでをる、それが人に似てをるといふのである。此句の如きは秋風のもの淋しさを現さうとして、無心の猿もまた自然その物の淋しさを知つてをるといふ風に言つたところに、多少の脈味を持たうとしてをる。元祿の句には質朴なところがあつて、僅にそれを救うてをるのである。

旅行

あか〳〵と日はつれなくも秋の風　芭蕉

旅中の物うい心持を言つたもので、秋の風の吹いてゐる頃ではあるけれども、併し赤みを帶びた秋の日は我につれなく熱く當つて堪へ難いと言つたのである。芭蕉のやうな孤獨の境界にゐる人が、旅に在りてまだ宿にもつかず、これから又峠を一つ越さねば宿（しゅく）が無いといふ樣な場合の心持は、いかにも此句に現されたやうなものであらうと想像されるのである。「日はつれ無くも」といふ言葉など、これが他の人の言葉であると或は脈味を感ずるかも知れ無いのであるが、元祿のしかも、始終さういふ境遇に身を置いた芭蕉であるとすると、その言葉に權威があつて而も眞實が籠つてゐて、其脈味は感ぜられないのである。斯ういふ事をいふと、人によつて句の價値を二三にすると言つて攻擊する人があるかも知れ無いが、俳句にはさういふ傾は實際あるのである。一概にさう許りとはいへ無いが、作者を離して俳句を考へることの出來無い場合は決して少くは無いのである。次に天明に移ると、

おもひ出て酢つくる僧よ秋の風　蕪村

ふと思ひ出でゝ、さうだ一つ酢を作つて見ようと言つて、或坊主がそれに取りかゝつた、それは秋風の吹く頃であつたといふのである。別に秋風に酢つぱい味があるといふのでは無いが、夏も過ぎて秋風の吹く頃になると人の心も引きしまり、忘れてゐた事も思ひ出しやすく、その上酒などゝ違つて酢といふものを造ることを思ひ立つたといふ處に、何だかその秋風に心の引きしまつた僧の思ひつく事として、さもありさうなことのやうに思はれる。これが牡丹餅を作るとか白酒を作るとかいふのに比べて見ると、その冷めたい酸つぱい味のする酢を作るといふ所に、どうしても秋の心持がある。

秋の風芙蓉に雛を見付たり　蓼太

此句は蓼太の句としてはいゝ句である。別に秋風の淋しさを言はうとしたやうな句では無くつて、むしろ下十二字で敍した芙蓉の花の下に鶏の雛を見つけたといふ事の添物として置かれたに過ぎ無いといつてよいのである。あの小さい雛がどこへ行つたか見え無くなつた。よく見ると芙蓉の花の下にゐたといふので、むしろ美しい句である。秋風としても色彩に富んだ珍らしい句である。

網をすくともし火あほつ秋の風　乙總

漁師か、さうで無くつても樂しみに漁をするもの、若しくは網をすく事を商賣としてをるもの、と言つたやうなものが、灯火の下に脊を曲めてその網をすいてをると秋風が吹いて來て、其ともし火を吹き動かすといふのである。以上擧げたどの種類の人としても、固より世に時めいてゐるもので無く、貧しげな暮しをしてをるか、自ら世を韜晦してをるか、何れかの人として淋しい心持がつき纏ふ、其處に秋風らしい心持があるのである。

秋風や捨ば買はふの越後縞　凡董

越後縞といふのは、どういふ縞か知らぬが、兎に角それを賣りに來た男があるが、外に必要も無いのであるから少しも買ふ氣は無い。しかし向うも持て餘してゐるので捨て値でいゝからどうか買つてくれといふ。さういふ賣買の應對が行はれてゐるといふやうな場合に、何となく其縞の捨て賣りにされてゐるといふところに、一種の淋しさを覺える。それが丁度秋風の頃で、愈〻其感じを強める、と言つたやうな場合である。秋風といふものを單に景物として、縞の賣買といふ

人事を主題としたところに目新しい處がある。尤も此傾向は後世になる程強いのである。

蔓草や蔓の先なる秋の風　太祇

太祇句集中に在る唯一句の秋風の句である。太祇のみならず天明の秋風の句は一體に振つてをる方では無いやうである。扨て句意は、蔓草を見ると其蔓の先に秋風は吹いてをるといふのである。蔓草の蔓の先を見ると風の爲に動いてをるのを見て、成程秋風がその蔓の先に在る、といつたやうな句である。芭蕉の「日はつれなくも」の句などに比べると、秋風といふものに就いての感激の度が餘程違つてゐるので、餘り秋風といふやうな題について多くの興味を見出さなかつたか、其ともむづかしくて相手にしなかつたのかも知れぬ。秋風といふ樣な題は、むづかしいものである。明治に至つては、

秋風の鼻も無き別かな愚哉

人に別れる時、何かその人に鼻をやり度いと思ふけれども、遂に遣ることが出來なかつた。其

志を致さぬといふことが一層此別れを本意無くする。それが秋風肅殺の候であるから、一層その心持を強うする、といふのである。詰り「秋風の」といふのは「秋風の吹く時に」といふ位の輕い意味である。

落書の酒肆の障子や秋の風　抱琴

酒を賣る店の障子に醉つた客の落書がしてある、それは醉中のいたづらであるけれども、其が却つて秋風の中に淋しさを見せてをるといふのである。醉つて障子に落書する人も、心に何等かの不平とか憂とかがあつてすることである。その人はいつ迄も醉つてをりはしない。今障子に落書は殘つてゐても、其人はもう夙くに醒めてゐるのである。唯その憂ひとか不平とかを落書として障子の上に殘して置いた迄である。秋風の中にそれを見るにつけて、淋しい心が動くやうな心持がするのである。次に冬木立に移る。

砂よけや蜑のかたへの冬木立　凡兆

海岸に行くと、其海岸の砂を畑や人家に吹きつけるのを防ぐ爲に、藁や其他で、砂よけといふものを拵へてをる。此句の場合は人家に吹きつける砂を防ぐ爲の砂よけで、漁師の家がある、其傍に冬木がある、其冬木立のところに砂よけがしてあるといふのである。冬木立そのものも砂よけの働きを幾分かはしてをるのであらうけれ共、更にその冬木立を利用して其處に藁とか柴とかいふもので砂よけが拵へてあるのであらう。

乾びたる三井の仁王や冬木立　其角

三井寺の山門に仁王がある、その仁王は年月を經て、色彩なども剝げてをるのであるが、それが殊に冬になつて、その山門前に突立つてをる木が、皆落葉して冬木立になつてをる時に見ると、殊に乾びた感じが強いといふのである。木々が若葉してをる頃に見ると同じ仁王でも、矢張りその若葉に打映えて何處か生々しいところがあるやうに感ずるのであるが、その木が皆冬木立になつてゐると、仁王も同時に枯れ朽ちたやうな心持がするのである。三井の山門が木立の間に在る光景も自然に想像されるのである。

冬枯の木の間尋ねん賣屋敷　去來

この邊に賣り屋敷があるといふ事を聞いて見に來たのであるが、一寸見當ら無い。大方此冬枯れてをる木立がある、その間の邊にでもあるのであらう。その木の間を尋ねて見ようといふのである。家も住む人が無くなつて賣屋敷となつてをるその落寞の感じのするところのものを、天然も冬枯れてをる木立の中に尋ね入るのである。冬枯の木といはずとも冬木と言うてもすむのであるが、それが元祿時代の事であるから、まだ冬木立といふ成語がさう大きな力を持たず、自然斯ういふ句も出來たのであらう。だん〳〵後世になつて來ると冬木立といふちやんとした題があるのに、それを「冬枯の木の間」といふやうなことは却つて言へ無いものである。後世から見るとをかしく思ふことでも、時代といふ事を頭に置いて考へると、をかしいと言へぬ場合が隨分あるのである。此句の如きはそれ程をかしいといふのでは無いけれども、序に一言して置くのである。

天明に移ると、

二　村に質屋一軒　冬木立　蕪村

何村々々といふ餘り立派で無い村が二つある、その間には冬木立もある、さうしてその二村を通じて質屋は唯一軒ほか無いといふのである。寒村の趣で、冬木立と相俟つていかにもありさうな景色と受取れる。

この村の人は猿なり冬木立　蕪村

これはもつと極端な寒村で、冬木立のある中にぽつ〳〵と人家があるが、此村の人は人間では無くて丸で猿みたやうだといふのである。

斧入れて香に驚くや冬木立　蕪村

冬木立の中に木を樵りに這入つて行つて、或一つの樹に斧を打込むと、思ひも設けぬいゝ香が鼻を打つた。それはもう朽ちた木で何ともわからなかつたが、白檀とか伽羅とかいふ靈木でゞもあつたのだらうか、不思議の名香に驚いたのである。

みよし野やもろこしかけて冬木立　蕪村

これは吉野山は、だん〳〵それを分け入つて行くと、唐土に通じてゐるといふ話のあるところから思ひついた句であらう。謡曲の國栖にも次ぎのやうな文句がある。「總じてこの山は都卒の内院にもたとへ、又は五臺山清涼山とて唐土までも、遠く續ける芳野山、かくれ家多きところなり。」即ち吉野山へ逃げ込めば唐土までも通ずる道であつて、自由に何處へでも隱れることが出來るといふのである。即ちその三吉野も春は櫻の花で名あるところであるが、冬になると滿山一面の枯木となつて、その枯木は唐土までも續いてゐるのである。

冬籠心の奥のよしの山　蕪村

これは冬木立の句では無いけれども一寸序に解釋して見よう。此句も矢張り前句などゝ同じ聯想から來たもので、冬籠りをしてぢつと想をいろ〳〵の方面に走せてゐるとさま〴〵の事を思ふ。それは殆ど際限も無いことである。たとへて見ると、心の奥に吉野山があるやうなもので、其吉野山は唐土までも續いてゐるといふ事であるが、恰も我心も唐土は愚か天竺までも和蘭まで

も續いてをるといふのである。或は此句は冬籠りをしてゐて、嘗て見た春の吉野の光景などを思ひ出してゐるといふ風に解釋が出來ぬことも無いが、それでは「奥の」といふ字も十分に利かない。奥のよし野と續いた處は「奥吉野」といふ言葉もあるところからではあらうけれども、矢張り奥深くどこまで續いてゐるかわからぬ吉野といふ心持がなくてはならぬのである。已に「もろこしかけて冬木立」の句がある以上、此句も第一解の如く解することが至當であらう。冬籠りといふのは、冬の寒さに外にも出ず、家の中に閉ぢ籠つてゐるのをいふのである。また冬木立に戻つて、

盗人に鐘つく寺や冬木立　太祇

木立の中に在る寺で、その木立も冬枯れて一層淋しさが增して居る。ところがその寺へ盗人がやつて來たので、その急を村人に知らす爲に鐘樓の鐘をゴーン〳〵と撞き鳴らすといふのである。隣りにすぐ人家でもあれば聲を上げて「泥坊々々」と叫ぶ位でも聞えぬことは無いのであるが、冬木立に遮られてゐる爲に急を知らすため鐘を撞くのである。時ならぬ鐘の亂打に村人は何か事あることを知つて直ちに走せつけるのであらう。

夜見ゆる寺の焚火や冬木立　太祇

これも前句同樣冬木立の中の寺を咏じたもので、夜その寺で焚火をしてゐるのが、冬木立を透して見えるといふのである。晝間は冬木立の中に寺があるといふ事を承知してゐながらも、その寺の甍もはつきり見えない位であるが、夜になつてあたりの暗い中に焚火をしてゐるのであるから、其焚火が冬木立をすかして、よく見える趣を言つたのである。木立は皆灰色に冬枯れてゐる中に焚火の赤いのが際立つて赤く見える心持がする。

曙やあかねの中の冬木立　几董

此句は前の太祇の句と反對に、夜明方の冬木立を言つたもので、朝曙(あさぼ)が赤い色をして天地を染めてゐる中に、一叢の冬木立が立つてゐるといふのである。尙ほ此句には强ひて必要は無いけれども「旅行快天」といふ前置きがある。旅をしてゐて早朝く宿を立出た時分、晴れ渡つた野路の曙の景色を言つたものであらう。次に明治に移ると、

門前のすぐに坂なり　冬木立　子規

或家の門を出ると、すぐ其處がもう坂になつてゐて、其處に冬木立があるといふのである。其冬木立は其家の向ひ側に在るか、坂の上に在るか、將た他に在るのか、其等は判きりしてゐないが、要するにそのあたりは冬木立もあるやうな人家の建てつんでゐないところであることさへ判ればよいのである。山がかつた邊鄙を言つたものか、又市中の或場所を言つたものか、どちらとも取れぬことは無い。又いづれと解しても句の趣の上には變化は無いのである。この句の主眼は家を出ると門前がすぐ坂になつてゐるといふ點に在るのである。冬木立は點景物に過ぎ無いのである。

鳥の巣のあらはに掛る枯木かな　寒樓

冬木の梢の方を見ると他と違つて少し黑ずんで密生したやうなものがある。何であらうかと見ると、其は鳥の巣であつたのである。常磐木の梢に在るのだとそれ程目立たないのであるが、落葉してしまつてゐる枯木であるから、それが特に目立つて見えるのである。

本堂に足場かけたり　冬木立　靜子

太祇の句同樣冬木立の中の寺を見つけたのである。殊にその寺は普請をする爲に本堂に足場をかけてをるといふのである。普通の人家でも足場をかけてゐるのは目に立つものであるが、それが寺であるから一層目立つて見える、殊に冬木立の中に在るといふ事が一層その感を强めるのである。以上元祿、天明、明治と竝べ立てゝ見ると多少變化が無いでも無いが、しかしそれは小異動であつて、本書の冒頭に言つた通り、俳句は要するに芭蕉の文學であるといふ事にたいした異論の挿みやうが無いであらうと思ふ。天明、明治は芭蕉時代の祖述と言つても間違ひは無いのである。大正に至つてどう變化するかは未定の問題である。今少し芭蕉の句を驗べて見よう。

古池や蛙とび込む水の音　芭蕉

芭蕉の句といへば先づ古池の句といふ程に有名なものになつてゐるが、此句は果してそれ程いい句であるかどうかといふ事に就いては已に大分議論のあつたことである。實際此句の如きはさうたいしたいゝ句とも考へられ無いのである。古池が庭にあつてそれに蛙の飛び込む音が淋しく

聞えるといふだけの句である。牽強附會の說を加へてこの句を神聖不可侵のものとするのは論外として、これ以上に複雜な解釋のしやうは無いのである。唯此句は芭蕉が、所謂芭蕉の俳句を創めるやうになつた一紀元を畫するものとして有名だといふ說は受取り得べき說である。即ちそれ迄の芭蕉は談林調と言つて、つとめて滑稽洒落を言つてゐた時代の句になづんでゐたが、此句を作つた時代から初めて今日のやうな實情實景をその儘に描く芭蕉流の俳句を作るやうになつた、抑〻その頓悟の句が此句であるといふのである。或日芭蕉が深川の草庵に居ると庭の古池に水音が聞える。それは外の音でも無い蛙の飛び込む水音である。四邊が靜かであるので、その水音は獨り際立つて耳に響く。芭蕉はそれを句にしようとして「蛙飛び込む水の音」と言ひ、上五字は有りの儘に「古池や」と置いた。それが頗る自分の意に適して、斯く何の巧も無くそのまゝを咏ずることが、今後俳句の歩むべき正しい道であると悟つた。同時に又滑稽でも洒落でも無く、斯る閑寂の趣こそ俳句の生命であるべきを悟つた。閑寂趣味と其儘の敍寫といふ事が、此句によつて初めて體現されたといふ事が何よりも芭蕉の滿足することであつて、自分も此句をもつて初めて悟りを開いたやうに考へたのであらう。柳絲花紅が佛者の悟りであるやうに敢てものを遠きに求めるわけでも無く、實情實景そのまゝを朴直に敍するところに俳句の新生命はあるのであると大悟して、それ以來、今日に至るまで所謂芭蕉文學たる俳句は展開されて來たものとすれば、此

古池の句に歷史的の價値を認むべきは否定することの出來無いことである。

物いへば唇寒し秋の風　芭蕉

此句も有名なる句の一つである。沈默を守るに若かず。無用の言を吐くと駟も舌に及ばずで、忽ち不測の害をかもすことになる、注意すべきは言葉であるといふ道德の箴言に類した句である。斯ういふ句を作ることが俳句の正道であるといふ事はいへない。俳句は矢張り古池の句の如く實情實景をその儘に敍するといふ事を正道とすべきである。此句のやうに道德的の寓意を含んだ句の如きは、たまに有つてもいゝけれども寧ろ脇道に外れたものである。

荒海や佐渡に横ふ天の川　芭蕉

越後の出雲崎といふ處で作つた句である。奧の細道を辿つて酒田より越後路に出で、出雲崎に宿つた時恰も秋の晴れ渡つた空で、銀河が遠く佐渡ケ島の方に流れてゐた、その光景を咏んだのである。荒海といふのは、元來日本海は太平洋よりも荒るゝことが多いので、殊に秋から冬にか